
電獣戦隊ボルトマン

高浜ゆりえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電獣戦隊ボルトマン

【Nコード】

N 6 6 2 9 A

【作者名】

高浜ゆりえ

【あらすじ】

狂気の博士、ドクター・ソスが作り上げた電脳軍イレイズの侵略から、人の命と心を守るために防衛組織GONは電獣戦隊を結成した！……電獣戦隊ボルトマンは大自然の力と人類化学の力を併せ持った陸・海・空の戦士である！

プロローグ

全ての発端は十年前に一人の科学者が作り出した発明であった。

「ニューロン反応正常、記憶の読み出し…成功！こっ！……これはっ！」

科学者達は、安らかに眠る少年の死体に繋がられている脳髓のような機械から送られてくるデータを演算しているコンピューターを見つめながらキーボードを操作した。

少年は車と衝突して死亡したらしく、死体は綺麗に原型を留めていた。

「電圧安定、電腦に異常なし…（電腦）…正常に起動しました！」

「やった！やっと 完成した ！」

歓声の数人の若い科学者の中で、銀髪の科学者が光り輝く脳髓のような機械を前に立ち、その輝きを見つめていた。

「…やっと…やっと完成した 機械仕掛けの脳……電腦が ！」

…雷の鳴り響く嵐の日に、ある研究所の一室にて完成した世紀の大発明（電腦）…

「博士！産業スパイに情報が流れる前に…早く学会に報告しましょう！」

電腦…それは人間の脳機能を肩代わりする、優れた機械である。

「素晴らしい！この電腦は人類の未来を変えるぞ！」

電腦はすぐさま学会にて賞賛され、大手の会社は量産体制を整えた…
「博士！ありがとうございます！ボク！また走れるんだあ！」

「ああそうさ！君はもう走れる！電腦が君を救ったんだよ！」

だが、運命は残酷であった…

「…はあか…あせえ…！」

…電腦には重大な欠陥があったのだ

「ば…馬鹿な…！？私の電腦が…なぜだ…？！」

『はかせえ…ぼくのからだ…どうなっちゃったのお…？』

実験体00（ダブルオー）の変質が起こったのは、電腦が本格的に
発売される数週間前であった

「…は…か…せえ…あ…が…あああつ？！」

初めての変質から数週間後、被験者の少年は狼のような化け物に姿
を変えた。

急な事態に、博士は驚愕し…そして…悲劇が生まれた

「なぜだっ！私の発明は完璧なはずだ！」

電腦には、遺伝子に悪影響を与え、人間の体を異形の姿に進化させ
てしまう副作用があったのだ…

「博士！君は…何てものを作ってしまったんだ！」

「このプロジェクトに使った予算！ どうしてくれるんだ！」

電腦はすぐさま欠陥品の烙印を押され、博士は学会から追放された

「ぐっ… 電腦は完璧なはず！ そうだ！ この姿こそ… 強靱な肉体をもったこの姿こそ…… 人間のあるべき姿なのだ！」

博士の精神は崩壊した。

後に、博士の本当の名を呼ぶものはいなくなった

彼は 自らをドクター・ソスと呼び、己が理想とする世界を作り出すために活動を開始した。

第一話 狂気の電腦軍！ **（増量版）（前書き）**

今、勇者が集う。

人の心と、命を守るために。

第一話 狂気の電腦軍！（増量版）

それから十年後

東京都の過疎地区の住宅街

「こここの辺りか」

夏のある晴れた日曜の午後。

東京の過疎地区の古めかしい住宅街に、赤いジャケットを着た短髪の青年が現れた

「駄菓子屋（磯八）… 本当にここが集合場所なのか？」

短髪の青年は、家と家の間に建てられている駄菓子屋の前に立ち、店の看板と地図を交互に凝視した。

「…迷ってる 暇はない」

短髪の青年は訝しげな表情で引き戸を開き、駄菓子屋の店内に入った。

「あゝっ！また負けた！… おじさん強い！」

店内には、テーブルを囲んでカードゲーム（レンスト）で遊んでいる少年と後頭部の髪が薄い中年の男性がいた。

「はっはっは… タケシくんのデッキはムラが多すぎるな…」

中年男性は自らのカードの束をケースに入れ、短髪の青年を横目で一瞥すると、再び少年に笑顔を見せた。

「カードゲームというものは、コンボが発動するカードと補助カードだけあれば勝てる… 飾りはいらなんだよ」

「…ちえ」

うなだれる少年の前に、中年の男性は立ち上がり、入り口近くの短髪の男性に近づいた。

「…そう、島国・日本を守るためには…陸と海と空の戦士だけでいいようにね」

中年の男性は目を細めて不敵な笑みをこぼした。その手には、陸・海・海属性の三枚のモンスターカードが握られていた。

「あなたは…やはりここが集合場所でしたか」

動揺している短髪の青年を背に、中年の男性は店の奥へと歩き出した。

「そうか…君が…空矢君か…了解した、今から長官の所に連れて行く」

中年の男と会釈すると、短髪の青年は中年の男性の背中を追った。

「ありがとうございます」

二人はかなりの数の駄菓子や玩具が置いてある店内を歩いた。

（…駄菓子屋でカモフラージュするとは…司令官をやっている人は相当な策士だな…安心した やっていけそうだ）

店の奥には、明らかに不自然な鉄製のシャッターが設置されていた。

「…さて…前もって言われているよね？鍵を出してもらおう」

中年の男性に促され、短髪の青年は赤いジャケットのポケットから驚の刻印が刻まれた携帯を取り出した。

『…認識番号を入力してください』

「認証が必要なんですか、なかなかハイテクなんですね」

中年の男性は含み笑いをしながら呟いた。

「こつ見えても… ここは人類防衛の前線基地だからな…」

短髪の青年はシャッターの横のセンサーに携帯を翳し、備え付けのマイクに近づいた。

「航空防衛隊第48分隊隊長、十文字 空矢」

短髪の青年 十文字空矢は開いたシャッターの奥へと再び歩き出した…

「あの、ここから先はどういけば…！」

空矢が振り返ったシャッターの入り口の辺りには、既に中年の男性の姿は無く、数秒後にシャッターが閉じた。

(…今の男は隊員か？なんだか中途半端な案内だな…)

空矢が視線を戻した先には、鉄に覆われた長い一直線の通路が広がっていた。

「…行くしか ないな」

空矢は長くて明るい通路の中を歩き出した。

通路は無数のパイプとコードが配置されており、さながら未来の施設といった感じがしていた。

「ここが 防衛組織GONの前線基地か」

長く続いた通路から出ると、そこは公民館ほどの広さの作戦司令室であつた。

GON作戦司令室内

「よお！やっときたな！」

入室した空矢を迎えた声の主は、ビーフシチューを食らう坊主ヘアの男性であった。

「先に来ていたのか 俺の名前は十文字空矢、よろしくな」
空矢は坊主ヘアの青年に向かって敬礼をした。

「そんなに改まるなつて、俺は大門ダイモン 陸だ、リク陸上防衛隊で軍曹をやつてたんだ、頑張ろうな！」

握手を交わす二人の横から、皮のジャケットを羽織ったセミロングヘアの青年が現れ、瞳を細めて二人を見回した。

「…これで全員揃ったわけだな」

気配を感じていなかった空矢は驚き、セミロングの青年を凝視した。

「おっ?!…あなたが 司令官?」

セミロングの青年は二人に背を向け、司令室内の奥を見つめた。

「違う…俺の名は西川 海、お前達と同じようなもんだ」

海は部屋の奥のドアの更に向こうで歩く靴音を聞き取った、彼は生来の地獄耳であった。

「…来なすつたぜ……」

集合した三人の見つめる司令室の奥のドアから、先ほどの中年男性が現れた。

「集まったようだな…、私がGON司令官の火車 ヒグルマヒロシ 広だ」

中年の男性は先ほどのジャージではなく、勲章の付いた黒いスーツを着ていた。

「あなたは…さっきの!」

「道案内してくれたおじちゃん?!」

空矢と陸の二人は自分を道案内した中年男性が長官であることに驚いた。

「お前ら 鈍いな……」

中年男性の正体に感じていた海は腕を組ながら二人の顔を見回した。

「……………」

司令官は三人の顔を見つめて、静かに話を続けた。

「さて、では…君達には今から電獣携帯を使ってボルトマンに変身してもらおう、変身コードは先日送った手紙に書いてあった通りだ」
先日送った手紙とは、空矢達三人が戦士に採用された際に送付された手紙である。

「十文字空矢！君はボル・コンドルに変身し、空を駆ける！」

火車長官は直立不動の空矢を指差した。

空矢は火車司令官に向かって敬礼した。

「了解！」

若々しい快活な声が響く。

空矢は驚の刻印が刻まれた電獣携帯を取り出し、変身コードを入力し、定キーを押した。

「電獣携帯！」

電獣携帯から赤い光が放たれ、光の粒子が空矢を包み込んだ。

「電獣携帯から放たれた粒子は君達の力を増幅させるボル強化服になる、そして、ボル強化服は電獣の力を発動させる鍵なのだ」

変身中ではあるが、火車司令官の説明が入る。

火車司令官は無類の説明好きでもあった。

彼らが頼めば強化服の素材や開発経緯に致まで延々と説明してくれるだろう。

「ボル・コンドル！」

数秒後、光は消失し、空矢は鷲のように端正な赤いマスクの戦士に変身した。

「西川海！君はボルホエールとなって海を制覇するんだ！」

「了解！」

海は長官の指示通りに鯨の刻印が刻まれた携帯をシャツのポケットから取り出し、変身コマンドを入力し、決定キーを押した。

「電獣携帯！」

電獣携帯から青い光が放出され、粒子が海に収束した。

「ボル ホエール！」

光はすぐさま消失し、海は鯨のように力強い青いマスクの戦士に変身した。

「大門陸！君はボル・ライガーとなって大地を守れ！」

火車長官の指示を受け、陸はジャージのポケットから獅子の刻印が刻まれた電獣携帯を取り出した。

「了解！電獣携帯ッ！」

変身コードを入力し決定ボタンを押すと、電獣携帯は黄色い光を放ち、粒子が陸を包み込んだ。

「ボル ライガー！」

陸は獅子のように誇らしげな黄色いマスクの戦士・ボル ライガーに変身した。

「よくやったみんな…、これから君達はその力で人の命と心を守るのだ……奴ら 電脳軍から！」

火車司令官は机の上にあるボタンを押し、背後の壁に埋め込まれていた巨大モニターを起動させた。

「…電脳軍 イレイズ… 防衛隊に所属していた君達なら知っているだろう？」

モニターは電脳、そして電脳によって変質した人間…電脳怪人を映し出した。

「電脳軍…副作用が強すぎる電脳を普及させようとした博士が狂気の末に作り上げた私設軍隊…」

ボルコンドル 空矢はモニターを見つめて呟いた。

「電脳軍はここ数年の間で急激に勢力を拡大させた…… 一部の諜報員の話では、現在の防衛隊の戦力に匹敵するとまで言われている」

「

火車司令官は様々な画像をモニターに投影させた。

それは、電脳怪人と交戦して破壊された戦車や、なぶり殺しにされた兵士の画像であった。

「だから私はエリート戦士を選びすぐり（電獣戦隊）を結成した」

モニターに映し出されている電脳怪人は、まるで狼のようなモニスターのようであった。

「ひでえな…28式戦車がこんなズタズタに？！」

正義感の強いボルライガーは拳を握りしめて怒りを露わにした。

（イレイズ：俺はお前達を 許さない このボル・ホエールの腕で…仲間の敵をとる！）
ボルホエール 西川 海は腕を組みながらモニターに投影された電脳怪人を睨みつけた。

その瞳の奥では、人知れず怒りの炎が静かに燃えていた。

「君達の力と現在開発中の最強の機動兵器…（電獣）の力が合わされば、電脳軍を倒すことも可能だと、私は考えている……因みに」

「緊急事態発生！緊急事態発生！」

火車長官が最強の機動兵器（電獣）についての説明をしようとした瞬間、基地内に警告音とアナウンスが流れた。

『緊急事態発生！緊急事態発生！港に停泊していた大型タンカーが襲撃されています！』

サイレンと共にオペレーターの声が響く、警告ランプの赤い光が司令室を照らした。

「なっ！なんだって！」

驚くボルコンドル、モニターには被害地の周辺のマップが映し出され、襲撃されている大型タンカーの位置が赤く表記された。

「くっ！先手を打たれたか！やむを得ない 電獣戦隊、緊急出動せよ！」

司令官はボル強化服に身を包んだ三人を指差し、声高らかに指示を出した。

「了解！電獣戦隊出動します！」

ボルコンドルは敬礼をすると、腰に装備されている刀を収めた鞘に手を添えた。

「よっしゃあ！やったるぜ！」

「海の戦いなら…俺に任せろ！」

司令官の指示を受け、三人の戦士は力強く走り出した。

人の心と、命を守るために！

大型タンカー（朝塩）ブリッジ内

『デンノー！…船員はこれで全員か！？』

『デンデン！』

『デンデン！！』

数人のイレイズの戦闘員達^{デンデン}は敬礼をした。

そして、頭部が旅客船の形をした電腦怪人・フネデンノーが叫び声をあげながらブリッジ内の機械を操作していた。

「たっ！助けてくれえっ！」

『デンデン！』

マッチョな船員達は抵抗も虚しくイレイズの戦闘員達に縄に縛られてしまった。

『デンノーッ！…どこにオイルタンクがあるんだ！言えっ！言えッ！』

フネデンノーは縄で縛られた船員達を締め上げ、凶悪な瞳で睨みつけた。

「ぐっ…かつ 格納庫の…奥だ！」

苦しみもがく船員を放り投げ、フネデンノーは邪悪な笑みをこぼした。

「げほっ！　がはっ！」

確認してこい！デンデン！」

フネデンノーに指示され、イレイズの戦闘員達^{デンデン}はブリッジから通路へと飛び出していった…

『デンノー！…さあ　これで（東京大爆破作戦）の下準備も大詰めだ！デンノー！』

フネデンノーの恐ろしい言葉に恐怖した船員達は、その筋肉質な体を寄せ合った。

「とっ！東京…大爆破作戦だと?!」

「この船の　重油を使うのか?!」

『この船の重油だけでは無い！様々な爆弾を一気に投下し、東京を灰にしてやる…』

フネデンノーは船員達に迫り、その恐ろしく奇怪な顔で睨みつけた。

『重油はあくまでオマケだデンノー！がはははッ！なっはッははは！』

『デンデン〜！』

『デンデンデン〜！』

フネデンノーに合わせ、ケラケラと笑い、軽いステップを踏むデンデン達。

電脳軍イレイズの恐怖の作戦の概要を聞き、船員達は恐怖に震えた。

「そっ…！…そんな！…そんなことをされたら東京は！」

恐ろしかった。

東京が火の海になるなど、戦後生まれの彼らには想像もつかないことである。

「壊滅だ……！」

船員達の横で倒れていた船長らしき風貌の男が、縛られた体を起きあがらせて恐る恐るフネデンノーを見上げた。

「なぜだ　なぜお前はそんなに易々と作戦を口にするんだ？」

船員らしき男の枯れた声を聞いたフネデンノーは、船のスクリーユ状の右腕を振り上げた。

『くくく　はははははは！　今から死ぬ奴に言ったところで　我々の作戦に何ら支障は無い！デンノー！』

凍りつく船内にフネデンノーの右腕のスクリーユの乾いた回転音だけが響く。

船員達は戦慄し、声も出せなかった。

「……やめ……てく　れ」

血も涙もないフネデンノーの前で、虚しく声が響く。

『……死ぬがいい！デンノオオオオツ……！』

「そうはさせるか！」

フネデンノーが右腕を振り下ろそうとした瞬間、ブリッジの天井が爆発し、凄まじい爆音が響いた。

『なっ！なんだデンノーっ？！』

「ぐあああぁっ！」

爆風によって船員達とフネデンノーはよろめき、どこからか飛来した槍がフネデンノーの右腕のスクリユーに突き刺さった。

『デンノーっ?!』

槍は勢い良くスクリユーを砕き、船内の床に突き刺さった。

「誰…なんだ…?!」

スクリユーを砕かれたフネデンノーはよろめき、船長らしき男は驚きのあまりに腰を抜かした。

「ボル コンドル!」

大きな穴の開いた天井から太陽の光が射し込み、その穴の上から赤いマスクの戦士が壮絶としている船内に降りたった。

「コンドルキック!」

赤いマスクの戦士、ボルコンドルはフネデンノーに一気に肉迫し、ボル強化服によって強化された跳び蹴りを繰り出した。

『ぐえッ?!』

跳び蹴りはフネデンノーの頭部に炸裂し、奇怪なその体は勢い良く吹き飛び船内を転がった。

『ぐあああっ!』

蹴り飛ばされたフネデンノーは壁にめり込み、身動きがとれなくなつた。

「ボル ホエール!」

天井の穴から降りたった青いマスクの戦士、ボルホエールは吹き飛んだフネデンノーを後目に、縛られている船員達の縄を解いた。

「早く逃げろ! 走れるんだろ?!」ボルホエールはブリッジの壁に

鉄拳で巨大な穴を開け、船員達に避難するよう促した。

「あつ ああ！」

「…ありがとよ！」

船員達は驚きながらも大穴から逃げ出した。

『デンノーっ！早く来いデンデン達！』

不測の事態に戦闘員達を叫ぶフネデンノー、しかし戦闘員達は戻って来なかった。

『デンノー！どうしたと言ったデンデン！来い！』

「ボル ライガー！」

通路から歩いてきた黄色いマスクの戦士、ボルライガーは気絶した数人の戦闘員を抱えながら、ブリッジ内に浸入した。

「悪いが増援は無しだ悪党！俺が倒しちまったからな」

ボルライガーは抱えた戦闘員達を投げ飛ばしてボルコンドルとボルホエールの元に駆け寄った。

『くっ！ 貴様ら… 何者だデンノー？！』

怒り狂い、悪人のテンプレートな台詞を吐くフネデンノーを前に、三人の戦士は立ちふさがった。

「人の命と心を守る！」

ルライガーは雄叫びをあげる獅子のように叫び、フネデンノーを威嚇した。

「電獣戦隊！」

ボルホエールは海を雄大に海をゆく鯨のように両腕を振り上げた。

「ボルトマン！」

ボルコンドルが叫んだ瞬間、三人の背後で爆発が起こり、三色の煙が立ち上った。

『デンノー！電獣戦隊だろうが何であろうが殺してやるデンノー！』

フネデンノーはブリッジ内を走り出し、瞳から破壊光線を発射した。
「遅いっ！」

ボルライガーは狭いブリッジ内を縦横無尽に駆け抜け、破壊光線を避けながらフネデンノーに肉迫した。

「ライガースラッシュ！」

ボルライガーのグローブから生えた爪の一撃がフネデンノーに直撃し、数センチにもなる深い傷をつけた。

『ぐあああっ?!』

血の花が咲いた。

フネデンノーは流血している腹の傷に手を当てながら、再び破壊光線を構えた。

「ホエールかかと落とし！」

『ぐぶうつ?!?』

背後から迫るボルホエールのかかと落としが隙だらけのフネデンノーに炸裂し、フネデンノーはフラついた。

「まだだ電脳怪人！これでもくらえッ！」

ボルコンドルは腰の鞘を左手で掴みながら一気に跳躍し、フネデンノーに肉迫した。

「ていやあっ！」

すれ違いざまにボルコンドルの日本刀がフネデンノーの体に直撃し、フネデンノーは左腕を失った。

『…くっ…！なんて奴なんだデンノー！！ 強いデンノー！』

フネデンノーはよろめきながら壁に開いた大穴に近づき、船から海への離脱を試みた。

「待て！逃げる気か？！」

追いかけようとするコンドルを無視し、フネデンノーは大穴から外へ足を移動させた。

『…だが 次は 必ず勝つ！覚えているデンノー！』

捨て台詞を吐いて海に逃げ込むフネデンノー、しかし電獣戦隊はそれを見過ごすほど甘くはなかった。

「みんな！ボルトサイクロンを使うぞ！」

彼らには、無敵の必殺武器が存在するからである。

「おう！いこうぜコンドル！」

「了解！潰してやるぜ！ 電脳怪人ッ！」

ボルライガーとボルホエールが電獣携帯にコマンドを入力すると、ボルコンドルの手元が光り輝く。

次の瞬間、光の中からバレーボールサイズの三色の球体が現れた。

「ボルトサイクロン！氷岩の一角！」

（ボルトボール）を足元に置き、思い切り蹴り飛ばした。

「ナイスコンドル！いくぞホエール！」

蹴り飛ばされたボルトボールを両腕でトスした。

「ボルトジャンプ！」

トスされ、大穴から甲板に飛び出したボルトボールを追い、ボルホエールはジャンプした。

「ラストシュート！」

ボルホエールのオーバーヘッドキックが炸裂し、ボルトボールは水面を泳いで逃げていくフネデンノーの、前方に飛んだ。『なっ！これは！』

フネデンノーの前方の海に落下したボルトボールは巨大な氷岩に変化して、その行く手を阻んだ。

『船はいきなり……止まらない！デンノおおーっ！！！！』
ばく進するフネデンノーは巨大な氷岩と衝突し、タイ○ニツクのよ
うに沈没した。

「やったか……」

電獣戦隊の三戦士は半壊してしまったタンカーの甲板の上に立ち、太平洋に沈む夕日を見つめた。

「改めてよろしくな！海、陸！」「ああ やってやろうぜ！」

「とりあえず帰ってビーフシチューでも食おうぜ！」

沈みゆく太陽を背に、三人は腕を重なり合わせた。

それは最後まで諦めずに三人で戦うことの誓いであった。

戦え！電獣戦隊ボルトマン！

人の心と、命を守るために！！

戦え！電獣戦隊ボルトマン！

人の命と心を守るために！

【次回予告】

ついに電獣戦隊の戦いが始まった！

電獣戦隊は電脳軍イレイズの計画する侵略作戦第一号（東京大爆破作戦）を知り、その狂気の作戦を阻止するためにスパイ作戦に打って出るのであった！

【第2話 スパイ作戦を実行せよ！】

静かに潜め、電獣戦隊。

第二話 スパイ作戦を実行せよ！

電腦軍イレイズ 前線基地 總統室内

先程の戦闘から数時間後、諜報員からの情報を受け、電腦軍イレイズ首脳部は揺れた。

『なんだと！フネデンノーがやられただと？』

2・4メートル程はある巨大な身長 of 仮面男、電腦軍イレイズの総統ドクター・ソスは純白の玉座に座り、頬杖をしながら呟いた。

『はい フネデンノー及び戦闘員デンデンは（電獣戦隊）なる戦闘集団と交戦し…戦死しました！』

玉座の前に跪く有翼人種のような形の作戦参謀は報告書を片手に震えていた…まさか自分の同胞が死ぬことになるとは思ひもしなかったのである。

『偉大なるドクター・ソス様！電獣とは 何なのですか！』
ウイングレイザーと共に跪くドラゴンのような姿をした戦闘員養成担当幹部は自らが鍛えた同胞の死に憤りを隠せなかった。

『わからん、注意する必要があるだろう』

ドクター・ソスは自らの頭に繋がれた光ファイバーのような配線を取り外し、室内の巨大モニターを起動させた。

『そんなことより、（東京大爆破作戦）はどうなっている？』

巨大モニターには東京の全体地図が表示され、爆破予定地点に印が付けられた。

『既に最終段階です、後は東京各所に爆発物を埋設すれば完了です
戦闘員デンデンの準備も出ています』

『デンデン！』

ウイングレイザーの背後に4体の戦闘員が現れ、ドクター・ソスに敬礼をして跪いた。

『そうか ならば作戦に使えるような電腦怪人を数体作り出そう。ウイングレイザー！電獣戦隊に警戒しつつ、献体を募集せよ！』

ドクター・ソスの指示を受け、ウイングレイザーは立ち上がり敬礼をした。

『ハッ！お任せを！行くぞデンデン！』

『デンデン！』

数十人の戦闘員を従わせ、ウイングレイザーは走り出した。

『キバレイザー、お前は爆撃をする電腦怪人をもっとよく鍛えておけ！電獣戦隊の邪魔が入るかもしれぬ』

ドクター・ソスはモニターの電源を切り、玉座から立ち上がった。

『了解です！最強の爆撃部隊を作り上げてみせます！』

キバレイザーは立ち上がり、敬礼をした後に総統室から退室した。

『…電獣戦隊…ついに日本政府も重い腰を上げたということか…だ

が、もう遅い」

ドクター・ソスは総統室の入り口を閉め、再び玉座に座り仮面を外して仮眠を始めた。

『… 電腦により遺伝子すら支配した我々は無敵だ…』

電獣戦隊は先の戦闘で人質になった民間人から電脳軍イレイズの恐怖の作戦（東京大爆破作戦）の情報を聞き出し、その詳細を知るためにスパイ作戦を敢行した。

都内某所

「… あちい」

多数のビル群が立ち並ぶ街角の中、Ｙシャツを着た一人の青年… ボルホエール・西川海が電柱の横に突っ立っていた。

（… 長官の情報によると、ここの新興宗教団体・アリヤの会の会員数人が失踪を遂げていらしいが… ）

海は電柱の横から真新しい二階建ての建物を見つめ、眉を潜めた。

（… あからさまに 怪しいな）

建物の入り口の大きな看板には（アリヤの会）と書かれており、怪しい銅像が立っていた。

「どうかされましたか？」

背後から呼びかけられ海は息を呑んで不安な表情を作った。

「いえ…あの 僕は…」

オドオドとしながら振り返った先には、白いスーツを着た細身の女性がかバンを片手に立っていた。

「もしかして…あなた、何か悩みを抱えていませんか？」

スーツの女性は不安そうな（演技であるが）海の気持ちを察したのか、長い髪に手を添えながら海に近づいた。

「…えっ…あ はい」

ヤレヤレと思いながらも、海は演技を続けた。

「そうなのですが、私で良ければ相談に乗りますよ」

「あ…はい ありがとうございます」

スーツの女性はニコツと笑い、海の手を握ると（アリヤの会）の建物の入り口へと歩いた。

「…ここは…」

建物の中は怪しいグッズが至る所に置かれており、少々キツイお香の匂いがした。

「私達、宗教団体（アリヤの会）は現代社会の荒波の中で心に悩みを抱えた人々を救済する機関なのです」

女性は並んでいる机の引き出しからパンフレットを取り出し、室内を見回している海に手渡した。

「そうなんですか…」

手渡されたパンフを片手に、適当に相槌をうった。

（何やら怪しい機関ではあるが、電脳軍との関連性は無さそうだな… 早めに話を切り上げるか）

女性に話を切り出そうとしたその時、海は部屋の奥に人間の脳味噌のような銅像を発見した。

（あれは まさか！）

海はその像を見て、この宗教団体と電脳軍イレイズの関係を直感した。

「…あれは…何のですか？」

海は脳味噌のような銅像を指差し、首を傾げた。

「みだりに指差してはいけません！あれは我らの神の像です！」

女性は憤怒し、パシンと海の頬を思い切り叩いた。

「いてっ！」

海は吹き飛び床に叩きつけられた。

「…あなたは一度…転生をしなければいけないようですね！」

スーツの女性に鳩尾を蹴り飛ばされ、海はうめき声を出して気絶した。

「うげえっ！」

スーツの女性は気絶した海の胸倉を掴み、再び床に叩きつけた。

「ふふふ ははははっ！デンノー！」

スーツの女性は奇妙な笑い声をあげながら一回転し、顔をマスクのように剥がした。

『「こうも簡単に献体が見つかるとは！思いもしなかったデンノー！」』

女性の体は蠢き、真の姿である電脳怪人へと変貌した。
ハチデンノー

『さあ！ウィングレイザー様の元へ連れていけ！デンデン！』

ハチデンノーの指示をつけ、クローゼットの中やベッドの下から四体の戦闘員デンデンが現れた。

『デンデン！』

四体のデンデンは気絶した海を抱え上げ、ハチデンノーと共に二階へと移動して行った…

『ハチデンノーか、…献体は見つかったのか？』

何かの設計図を握りながら巨大な脳を模した御神体の前に立つウィングレイザー、その足元には無数の肉片が散らばっていた。

『はい！…この献体は肉体も健常なので強力な電腦怪人が作れる筈デンノー！』

興奮気味のハチデンノーの傍らでは、4人のデンデンが血にまみれた手術台に海を乗せていた。

『ならば…これより（電腦移植）を開始する！』

ウィングレイザーは無数のコンピュータが置いてある机から野球ボールほどのサイズの電腦を掴み、その内部から赤青黄色の三色のケーブルを引き出した。

『まずはこのケーブルを脳味噌に刺し、適合させる！これで普通の人間とはおさらばさ…！』

先端に先鋭な針の付いた三色のケーブルを海の脳天に添えた…その時であった

『うぐつ?!』

気絶した筈の海の鉄拳が腹にめり込み、ウィングレイザーはつめき声をあげた。

「悪いが…俺の体は俺のものだ!」

気絶した…演技をしていた海は手術台の上に立ち上がり、電獣携帯を構えた。

『起きていたのかデンノー?!』

「電獣変身! ボル ホエール!」

海は驚くハチデンノーとウィングレイザーを前に、青き戦士ボルホエールに変身した。

『ええい! 行け! デンデン!』

『デンデン!』

『デンデン!』

ウィングレイザーの指示を受け、建物の一階から駆け上がってきた二体のデンデンを含め、計6体のデンデンがボルホエールに襲いかかった。

「なにっ?!」

「ボルトガン!」

六体のデンデンに一齐に囲まれながらも、ボルホエールは電獣携帯ボルトガンを拳銃形態に変形させた。

「電獣ショット!」

『デンツ!』

ボルトガンから放たれた閃光は迫り来る二体のデンデンを貫き通し、壁に小さな穴を開けた。

『今だデンノー！毒針光線！』

ボルホエールの一瞬の隙をつき、ハチデンノーは蜂の毒針状の右手から怪光線を放射した。

「ぐああっ！」

怪光線はボルホエールに直撃し、眩い火花が散った。

『デンデン！』

よろめいたボルホエールは四体のデンデンに一斉に殴られ、硝子を割りながら窓の外へと吹き飛んだ。

「ぐっ…一時撤退だ」

ボルホエールは傷ついた体を引きずりながら駐車していた電獣戦隊仕様のバイクに跨った。

「…後は 任せたぞ」

『デンッ！』

『デエッ！』

謎の言葉を呟くボルホエールを追撃しようとした二体のデンデンはバイクに吹き飛ばされた。

『はははッ！電獣戦隊 ここまで弱いとはな！』

ウィングレイザーは砕かれた窓硝子の穴から逃げ帰るボルホエールを見つめた。

『デンノー！これならもう現存の戦力だけでも（東京大爆破作戦）を実行できますな！ウィングレイザー様！』

『そつだなハチデンノーよ！よし、前線基地に戻ってドクター・ソス様に報告だ！』

ウィングレイザーは棘の着いた翼をはためかせて、窓から飛び立った。

『デンノー！ よし！俺達も帰るぞ！』

『デンデーン！』

『デンデン！』

先の戦闘で無事であった二体のデンデンは指示を受け、一階へと降りていくハチデンノーの後に続いた。

『よし 帰るぞ！デンノー！』

ハチデンノーは建物の裏に駐車してあった軽トラックに乗り込んだ。
『デンデーン！』

二体のデンデンは荷台に乗り込み、敷いてあった新聞紙に身を隠した。

『デンツノ〜！飛ばすぞ！』

ハチデンノーとデンデンを乗せた軽トラックは猛スピードで街中を駆け抜け、街外れの廃棄物処理工場のような所にたどり着いた。

『デンノー！よし いくぞ！』

『デンツ！』

『デン！』

軽トラックは人の気配の無い廃坑のような工場内の地下駐車場で停止し、ハチデンノーとデンデンは薄汚れた廊下を歩き始めた

『しかし ドクター・ソス様もよく考えたよなあ 』

ハチデンノーは廊下に設置されていたカコ・コーラの自動販売機の前で立ち止まった。

『使わなくなつた廃棄物処理工場の地下に前線基地を作るなんて天才だよなあ』

ハチデンノーは自動販売機に千円札を入れ、午前の緑茶を二本、蜂蜜オーレを一本購入した。

『デン?』

『デンデン?』

『デンノー!俺の驕りだ、よく味わえよデンデン』

ハチデンノーは細長い口の先端で蜂蜜オーレを啜りながら、午前の緑茶を二体のデンデンに投げ渡した。

『デンッ』

『デンデン...』

二体のデンデンはハチデンノーに会釈し、マスクを少しずらして、午前の緑茶を飲み始めた。

『デンノー!いいつてことよ、お前らが一番大変なんだもんなあ...さつきも四体死んじまつたし...辛いよなあ』

ハチデンノーはタオルで汗を拭きながら空になった蜂蜜オーレをゴミ箱に投げ捨て、自動販売機からお釣りを取り出して歩き始めた。

『デンノー!さあ、気を取り直していくぞお前ら!』

『デン!』

二体のデンデンは空の缶を捨て、ハチデンノーの後に続いた。

『電腦番号ヲ入力シテ下サイ』

薄暗い廊下の奥には、セキュリティシステム付きのエレベーターが設置されており、ハチデンノーは備え付けのマイクに接近した。

『電腦番号A3番!ハチデンノー!とオマケのデンデンだデンノー』

！』

ハチデンノーは自らの脳天に青いケーブルを突き刺し、反対側の先端をエレベーターのボタンの横の穴に差し込んだ。

『電脳ヲ承認シマシタ』

セキユリティーステムは完全にハチデンノーを承認し、エレベーターの扉が勢い良く開いた。

『デンノー！…地下5階…と！』

ハチデンノーはボタンを操作し、手際よくエレベーターを作動させた。

『デンデン…』

二体のデンデンは焦りながら顔を見合わせた。

『デン…』

エレベーターはハチデンノーとデンデンを乗せながら一気に地下5階まで移動し、軽快にドアが開いた。

『ハチデンノー！只今帰還しましたデンノー！』

静かな総統室内に入ったハチデンノーは跪き、部屋の奥の玉座に座っているドクター・ソスに頭を下げた。

『…ハチデンノーよ、よく戻った』

ドクター・ソスの足元にいたウィングレイザーはハチデンノーと視線を合わせ、会釈した。

『ドクター・ソス様、先に申し上げた通りでございます 電獣戦隊はデンデン6体とこのハチデンノーに圧倒され敗退しました 現存の戦力だけでも（東京大爆破作戦）は行えます！』

先に帰還していたウィングレイザーは必死に作戦の早期発動を提案した。『偉大なるドクター・ソス様！電獣戦隊は弱いのです！作戦の

早期発動をこー考下さいデンノー！』

ハチデンノーもドクター・ソスに向かって頭を下げながら電獣戦隊の脆弱さを力説した。

『……………』

ドクター・ソスの仮面は常に笑顔である、しかしそれは時としてとてもない狂気を感じさせるものですらある…彼が無言の今もそうである。

『ドクター・ソス様 ！』

ウィングレイザーが更に何かを言おうとしたその時、ドクター・ソスは突然右手の人差し指でハチデンノーの背後を指差した。

『……………?!』

ハチデンノーはその指先にあるものを視線で辿った…その先にあったものは跪く二体のデンデンであった

『ドクター・ソス様 …?!』

ウィングレイザーは首を傾げながらデンデンとドクター・ソスの指先を交互に見回した。

『…ハチデンノーの部隊に配属させたデンデンは四体…先の戦闘で四体やられたと聞いたが…その二体のデンデンは 何者だ ！』

ドクター・ソスの脳天と玉座を繋いでいる光ファイバーのような配線は光り輝き、玉座の横から無数ミサイルが発射された。

『うわっ！？スパイですとっ！？』

『あちちっ…デンノー！』

無数のミサイルはウイングレイザーとハチデンノーを通過し、二体のデンデンを巻き込んで爆発した。

『まさか電獣戦隊が我々を畏にかけるとは！不覚でございます！』

ウイングレイザーは怒りに身を任せて拳で床を叩いた。

『まんまとハメられたデンノー！悔しいデンノー！』

は右手の毒針を振り回して爆煙の中を暴れまわるハチデンノーをよそに、玉座に座るドクター・ソスは脳天から光ファイバーのような配線を引き抜いた。

『…この程度でやられるとは思えぬ…出てこい！電獣戦隊！』

ドクター・ソスは叫びながら幾多の武器を積んだ玉座から立ち上がり、周囲を見回した。

「よく俺達の二重スパイ作戦がわかったな！」

爆煙が晴れた室内の床には、すっかり焼け焦げたデンデンの全身強化タイツが脱ぎ捨てられていた。

『貴様らが…！』

『電獣戦隊なのかデンノー！』

ウイングレイザーとハチデンノーが振り返った先には、二人の戦士が立っていた。

「ボル コンドル！」

赤いマスクの戦士、ボルコンドルは日本刀を構えて三体の敵に向かって突き出した。

「ボル ライガー！」

黄色いマスクの戦士、ボルライガーはナイフを構えて威嚇した。

激しい睨み合いを繰り返す両者：どうなってしまうのか

それは

また次回の話。

【次回予告】

電獣戦隊のスパイ作戦によって窮地に立たされた電脳軍イレイズ。

しかしドクター・ソスは既にこの事態を予測し、東京大爆破作戦の
実行部隊（飛行電脳怪人部隊）を出撃させていたのであった！

今、激しい戦いのゴングが鳴り響く！

【次回 電獣戦隊 ボルトマン】

【第三話 東京大爆破作戦を阻止せよ！】

勝てるのか？電獣戦隊ボルトマン！

第二話 スパイ作戦を実行せよ！（後書き）

作品へのご感想やご質問がありましたらお願いします（こうした方がいい）（よくわからない）などとても参考になり、嬉しいです。

第三話 東京大爆破作戦を阻止せよ！（前書き）

スパイ作戦によって電腦軍イレイズの前線基地にたどり着くことのできたボルコンドルとボルライガーの二人

第三話 東京大爆破作戦を阻止せよ！

(…やはり 一筋縄ではいかないな)

ボルコンドルに変身した空矢は、内心そう思っていた…このスパイ作戦は敵基地の位置と中核部分さえ把握し、敵の隙を見て帰還できればよかったのだ。

『改めまして、電獣戦隊の諸君…私はドクター・ソス 電脳軍イレイズの総統だ』

仮面の大男の声は冷静であつた…しかし、その銀色のグローブに包まれた指先は僅かに震えているようにも見えた

「なぜだ！なぜ こんな事をする?!」

ボルコンドルは仮面の男 ドクター・ソスを指差した、しかしその直後、眼前に何かが飛来した。

『たわけえええっ!』

ウィングレイザーは両刃の剣を片手にボルコンドルに接近した、そのスピードは余りにも速く、ボルコンドルは日本刀で受け止め、鏑迫り合いに持ち込むのが精一杯であつた。

『電脳によって進化し…力を得た我ら電脳怪人こそ 人間の真の姿なのだよ!』

ウィングレイザーの言葉を間近で聞き、ボルコンドルは困惑した…

「力だけが…人間じゃないだろうに!」

激しい鏑迫り合いの最中、ボルコンドルはウィングレイザーの腹を

思い切り蹴り飛ばした。

『うぐあぁっ！？』

『…力だけでは無い、か』

ウイングレイザーは腹に手を添えて立ち上がった

『だが、一つだけ覚えておけ…その理屈は力があればこそ言えるのだと！』

ウイングレイザーは背後の壁に寄り添い、そのままズルズルと回転扉の中へ撤退した。

『あぁっ！ウイングレイザー様！ チックショウ！お前ら許さないぞデンノー！』

ハチデンノーは嫌々ながらも蜂の尻状の右手を構え、その先端の毒針を連続で発射した。

『ライガークロー！』

ボルライガーは高速で迫り来る毒針を両手から延びた爪で弾き、ボルコンドルの元へ駆け寄った。

『大丈夫かコンドル！』

『大丈夫だ、早くここから脱出しよう』

肩を叩かれたボルコンドルはグッドサインを出し、ハチデンノーとドクター・ソスに背を向けて撤退を始めた。

『コラ！逃げるなデンノー！』

ボルライガーはハチデンノーの毒針攻撃を弾きながら、ボルコンドルの後ろを守った

『くっ！ しつこい！』

「セキュリティ解除コード発信！」

総統室に入室した際に使ったエレベーターに乗りこむ二人、ボルコンドルは電獣携帯に解読させていたセキュリティ番号をエレベーターの装置に送信し、エレベーターを起動させた。完全に起動し、一階へと動いていくエレベーターの中で二人の電獣携帯が通信を受け振動した。

「ん…電獣携帯が鳴っている?!」

ボルライガーは腰に装備されている電獣携帯を取り出し、画面を見つめた。

「…この番号 長官からじゃないか！」

長官の携帯番号が表示された画面を見つめ、ライガーは受話ボタンを押した。

「コンドル、ライガー！無事か?!」

電獣携帯から響く長官の声は、少し焦っているようであった。

「今、基地のエレベーターの中です！基地の位置を転送します！」

電獣携帯のGPS機能を使い、基地の位置を転送し始めるボルライガーをよそにボルコンドルは自らの電獣携帯から長官と通信をした。

「長官、何かあったんですか？」

「ああ 電脳軍イレイズめ 東京大爆破作戦を発動させたようだ！」

「なっ?!」

「なに?!長官！それは本当ですか?!」

驚く二人、敵の大規模な作戦が発動している…確かにわざわざ長官が電獣携帯に通信を入れるくらいの緊急事態であった。

「今、ボルホエールが応戦している！早く基地から脱出してくれ！」

電脳軍イレイズ…ただの狂気の集団では無いようだ、と二人は思った

「了解です！」

二人は電獣携帯の通信を切り再び腰に装備すると、丁度よくエレベーターが一階に着いたようであった。

「ん…？」

ボルライガーとなった大門陸には熱源を感知する能力があり、その能力によって数体の敵の待ち伏せを感じ取った。

「コンドル 扉の向こうに何かがいるぞ！」

ボルライガーは静かにボルコンドルに耳打ちし、身を屈めた。

「流石にただで帰してくれるわけじゃないのか！」

ボルコンドル 十文字空矢は今まさに開こうとしている扉を見つめて舌打ちした

『デンノー！お前ら これで終わりだデンノー！』

扉が開いた瞬間、待ち伏せをしていたハチデンノーの右手から放たれた無数の毒針が狭いエレベーター内に雨のように降り注いだ。

『お前らのために二百四十円使っちゃった俺の怒りの毒針で 碎け散れええっ！』

無数の毒針の雨がエレベーター内の壁に突き刺さった、しかし 肝心のボルコンドルとボルライガーの姿はそこにはなかった。

『なにっ?! いないデンノー！』

驚いたハチデンノーがエレベーターの中に入った瞬間、彼の視界の上から何かが落下し、背後に凄まじい衝撃が加えられた。

『ぐあっ?!』

ハチデンノーは天井に張り付いて隠れていたボルコンドルとボルライガーに背中を蹴り飛ばされ、思い切り壁に叩きつけられた。

「ハチデンノー！もう　こんな組織にいるのはやめろ！やり直すんだ！」

「お前は部下を大事にできる人間だ　人間なんだから！」

ボルコンドルとボルライガーはそう言いながらエレベーターから出て、自動販売機を横切って基地の廊下を走り出した。

『デン…ノー！』

壁にめり込んだハチデンノーは呻きながら這い出た。

『…ふざける　なよ　スパイ野郎』

隙を見て逃げていく二人の背中を睨みつけながら、ハチデンノーは薄れてゆく意識の中で呟いた。

力を求めてこの姿になった俺が…今更人間の社会でやり直せるわけ…ないだろ

…基地の外に出ると、ボルライガーは電獣携帯を取り出してボルホイールの居場所を確認した

「ホイールは第13地域の団地の近くか、敵の総数はどれくらいなんだ？」

ボルライガーが首を少し傾げると、ボルコンドルは渋々自らの電獣携帯を取り出した。

「衛星通信モード、起動」

コンドルは電獣携帯のアンテナを引き出し4112とボタンを押し、

小さなマイク部分に口を持っていった。

「電獣携帯、索敵開始！」

電獣携帯から通信をうけ、円盤のような形状の軌道衛星ボルライトの超超高感度対地カメラ（電獣の瞳）が東京全土を探索した。

「第1地域周辺に集中しているようです」

電獣携帯のモニターの地図には、衛星から送られた敵の数が表記された。

「よし！ホエールと合流するぞ！」

ボルホエールは脇から出現した翼をはためかせて飛翔した。

「ああ！待つてろよホエール！」

ボルライガーは百獣の王である獅子のように四足歩行を始め、疾風のように地上を走った。

…ボルホエールは十数体のデンデンを倒した後、ビルの谷間に身を隠して追跡してくるデンデンを各個撃破していた。

「…一人じゃこれが限界か」

ビルの谷間のポリバケツに身を隠したホエールは、素通りして歩道を歩いていくデンデンを見つめて、ボルトライフルを構えた…その時であった。

「なにっ？なんなのっ！？」

空を裂くような乾いた叫びが街中に響く、女の悲鳴であった。

『くつくつく！女だろうが容赦しない！殺してやるデンノー！』

黒い鳥人のような電脳怪人カラスデンノーが青い空から地上に降り立ち、歩道で杖をついて怯えている少女を睨みつけた。ボルホエールは困惑した、

避難警報は出ていたはずなのだ…何故であろうと思った時、彼は気づいた。

「あの女…目が見えないのか?!」

ボルホエールは叫ぶのと同時にポリバケツをはねのけて走っていた。
「やめて…やめて下さい!」

すっかり腰を抜かしている少女に近づくカラスデンノーに向かって一直線に加速した。

「やあめええろおおっ!」

『なにいつ?!』

ボルホエールはボルトライフルを連射し、一瞬の内によりめくカラスデンノーの体に肉迫した。

「ホエールバイトツ!」

ボルホエールの両腕はカラスデンノーの首を挟み、まるで鯨の牙が獲物を噛み砕くかのように一気に締め上げた。

「お前らは…悪魔だ!…血も涙もない!悪魔だ!」

『ぐあああつ…!』

カラスデンノーの首は空き缶のようにねじ曲げられ、バレーボールのように頭が吹き飛んだ。

「…ハア……ハア」

ボルホエールは血しぶきを浴びながらも振り返り、杖を持ちながら腰を抜かしている少女の元に駆け寄った。

『デンデン〜!』

振り返り血を浴びた青い戦士に睨みつけられ、完全に戦意を喪失してしまったデンデンは脱兎のごとく逃げ出した。

「助けて…くれたのですか?」

少女は恐る恐る足音のする方向を見つめた。

「…ああ…もう大丈夫だ」

ボルホエールは地に塗れた腕で少女を抱え上げ、一気に持ち上げた。
「…えっ？」

少女は困惑しているようであった、それを感じ取ったボルホエールは取り繕うように言葉を繋いだ。

「ああ…すまん、だが今は危ないし時間が無いんだ このまま避難所に連れて行く、いいな？」

ボルホエールの言葉を聞いて、少女はこくりと頷いた。

「ボルトダッシュ！」

ボルホエールは一気に走り出した、今なら間に合う 確か近くに避難所があったはずだ、少女を力強く抱えながら、街中を走っていく。

「あなたは…何者なんですか？」

少女は女子高生くらいのおおきさであつた、セミロングの髪と細身の体からはこの殺伐としたふんわりとした紫陽花の匂いがした。

「俺は…ボルホエール…みんなを守る電獣戦隊ボルトマンの戦士だ」

ボルホエールは乾いた声を出した…少女は戸惑いながらも手を伸ばして、その返り血を浴びた青いマスクに触れた。

「…つまり 正義の味方 ということなのですか？」

ボルホエールは自嘲するかのようにはみ笑いをしながら呟いた。

「わからないな 今は…まだ」「そうなのですか…」

会話が中断し、二人の間に重い空氣が流れ数分が経つた時、ボルホエールは避難所にたどり着いたようであつた。

「ここか 後は一人で行けそうか？」

「はい ありがとうございます」

ボルホエールは少女を降ろし、その場を立ち去ろうとした。

「あの…あの！」

少女のか弱い叫びに立ち止まるボルホエール。

「何だ？」

振り返った先の少女は、微かに笑っているように見えた。

「あなたが正義なのは私にはわかりません…ですが、私は（いい人）だと思います」

「そうか…覚えておく」

ボルホエールはきびすを返して歩き出した、その血まみれの姿は少女には見えていないのであろうが、少女はいつまでも小さく手を振っていた。

「ボルホエール！大丈夫だったか？！」

「ああ…なんとかな」

ボルコンドルとボルライガーと合流したボルホエールは苦笑いをしながら頷いた。

「どうするコンドル、ホエール？！敵は数十体いるんだぜ！？」

ボルライガーは困惑しながら今も尚頭上を飛行していくカラスデーンノー（二体目）を睨みつけた。

「確かに…敵は飛行爆撃タイプの電腦怪人…正面から戦ったら不利だな」

ボルコンドルは他の二人と併走しながら思案した…しかし、いくら考えてもあの数の。

（くっ…このままではさっきの避難所も危ない…どうすれば…！）

ボルホエールは車道の真ん中で銃を乱射しているデンデンを蹴り飛ばしながら頭をフル活用して思案した。

「そうだ！コンドル！ライガー！ボルトサイクロンだ！」

ボルトサイクロン、それは第一話でも使用した電獣戦隊の必殺武器である。

「何か閃いたんだな…ホエール！」

ボルコンドルはボルトボールを取り出し、から空きの車道の中央に立った。

「さすがホエールだぜ！」

ライガーも車道に立ち、攻撃体制に入った。

「見てろよ電脳軍イレイズめ お前達の東京大爆破作戦 絶対に阻止してやる！」

ボルホエールはアスファルトの大地を踏みしめ、拳を握りしめた。

「 やつてくれコンドル！ボルトサイクロン！生ゴミだ！」

ボルホエールはボルコンドルから百メートルほど離れた車道に立ち、叫んだ。

「 ああいくぞ！ボルトサイクロン！生ゴミ！」

ボルコンドルはボルトボールを蹴り上げ、バレーボールサイズの球は空高く飛翔した。

「 ナイスコンドル！いつくぜえええホエール！」

空高く飛翔したボールに、全身のバネを使って更に高く飛び上がったボルライガーの蹴りが炸裂した。

「 ボルトサイクロン！生ゴミ！…くらえええええいッ！！！」

ボルホエールは天空から猛スピードで落下してくるボールをオーバ

ーヘッドキックで打ち出し、ボルトボールは無数の袋詰め生ゴミとなつて街中に散らばつていった。

『デンノー！あれは生ゴミ！何か残飯は無いのかデンノー！』

爆撃部隊の無数のカラスデンノーはボルトボールが変化した生ゴミを捕食し始めた。

『う うまい！美味しいデンノー！』

『ああ！美味しいデンノー！』

無数のカラスデンノー達が完食した瞬間、彼らの腹の中で残飯と化したボルトボールが大爆発した。

『！？』

断末魔をあげる間も無く吹き飛ばカラスデンノーの群れ、その騒然たる姿を見て、地上で活動をしていたデンデンは作戦の失敗を悟り、撤退を始めた。

「やったぜ！さすがホエール！」

「これで…東京大爆破作戦は失敗だ！」

ボルコンドルとボルライガーはボルホエールを称えながら、残党であるデンデンを駆逐し始めた。

「俺達は…みんなを守るためなら どんな攻撃を繰り出してでも電脳怪人を殺す…仕方ないんだよ 攻めてくるなら」

いつか戦いの終わる日を夢見ながら、ボルホエールは勇ましく走り出した…沈む太陽を背にして…

【次回予告】

東京大爆破作戦は、電獣戦隊の活躍によって阻止された。

しかし電脳軍イレイズはケイタイデンノーの力を使い、大量虐殺を敢行するために（死ね死ねメール大量送信作戦）を発動させた！

このままでは日本に溢れている悩める人々が危ない！

日本中の人間のアドレスを調べ上げていくケイタイデンノーを倒し、人の命と心を守れ！電獣戦隊ボルトマン！

【第4話 恐怖の死ね死ねメール送信！】

みんなはこんなメール、絶対に送っちゃめだよ！

第四話 恐怖の死ね死ねメール送信！（前書き）

前線基地を失った電獣軍イレイズは、凶悪な作戦を実行した。

人の心と命を守れるのか？！電獣戦隊ボルトマン！

第四話 恐怖の死ね死ねメール送信！

…何年前からだろう、他の人間や社会との関わりを絶ったのは…

「私：もう駄目だな」

アパートの自室にて、二十代半ばの女性はパソコンを起動させ、空虚なネットサーフィンに勤しんでいた。

■
 ■
 ■
 ■
 ■
 ■
 L

女性は薄暗い室内で光る画面を見つめながら小さなカプセルを飲み込んだ。

「あ」

パソコンはメールを受信したらしく、メールボックスに一通のメールが入っていた。

(私…アドレスなんて教えてないのに誰?!)

女性が開いたメールの内容は、その荒みきつた心を破壊するようなおぞましい内容であった。

[illegible]

女性の脳裏は真っ白になった。手は震え、青ざめた唇で何かを呟いた。

⋮

女性は虚ろな瞳で部屋を出た、真新しい靴を履き アパートのドアを開いた。

「さよなら……」

…振り返る女性、薄暗い室内とおぞましいメールを映し出したパソコン

それが彼女が最後に見た自分の唯一の居場所であつた…

電脳軍イレイズ 地中要塞 総統室内

『うおおおおっ！！』

電脳軍イレイズは前線基地の位置を電獣戦隊に知られてしまったために、前もって用意しておいた地中要塞ドリルガイアを活動拠点としていた。

『東京大爆破作戦が失敗し 前線基地まで手放すことになった…なんてことだ！』

ウイングレイザーは苛立つ気持ちに任せて総統室内の床を叩いた。

『…落ち着けウイングレイザーよ、今回のことで気づけたではないか（電獣戦隊侮り難し）と』

玉座に座るドクター・ソスは天才らしく、きつぱりと過去を捨て去り次の作戦・更に次の作戦を考えていた。

『仰る通りです…ドクター・ソス様』

ウイングレイザーはドクター・ソスに向かって土下座し、立ち上がった。

『ですが今回は私の責任です！ 私は懲罰室に入ってきます！』

ウイングレイザーは納得できないといった表情をしながら、部屋を後にした。

『…ウイングレイザーも（第三段階）に入ったか これは今後の成長が楽しみだ……さて』

ドクター・ソスはノートに何かを書くと、玉座に座ったまま手元の報告書を読み返した。

『（死ね死ねメール大量送信作戦）は比較的簡単に多数の人間を抹殺できる…見ているよ電獣戦隊』

狂気の博士は報告書を握ったまま、深い眠りについた

電獣戦隊 司令室

その日の電獣戦隊司令室は、今までにない緊迫感に包まれていた。

「電脳軍イレイズめ　なんて卑劣な作戦を！」

ボルコンドル　十文字空矢は悲慘なニュースを流し続けるテレビを見つめながら、怒りに震えた腕でテーブルを叩いた。

「昨日の１１時頃から東京都全体で不審な自殺者が同時多発的に発生し、今朝で４５人を越えた　大方の共通点は謎の（死ね死ねメール）か」

ボルホエール、西川海は現場の写真をテーブルの上に並べて難しい顔をした。

「こんなメールを日本中の携帯やパソコンに送信されたら…」
ボルライガー・大門陸は、陰惨な光景が映っている写真を見つめながら最悪の状況を想像した…

「日本中の悩みを抱えた人間達は皆、自殺してしまうだろう」

長官は室内の巨大モニターに自殺現場と様々な電波が赤点で表記されている地図を表示させた。

「そうなる前にメールを送り出している電脳軍イレイズの構成員を倒すんだ！電獣戦隊、出撃だ！」

「了解！いくぞ！海！陸！」

長官の号令と共に、三人は敬礼をして室内を後にして駆け出した。

「許せん イレイズめ！」

「おっ！おい待てよ！空矢！：海！」「しかし：どうすんだ空矢？敵はどこからメールを送り出しているかわからないんだぜ？」

海はYシャツを団扇のように扇ぎ汗を拭きながら人が行き交う交差点を見つめた。

「確かに：毒物とか匂いがあるものなら：俺の鼻で追跡できるのにな」

陸はボルライガーとしての能力（野生の嗅覚）を活用する事もできず、苛立ちを隠せないでいた。

「電獣携帯の探知機能を使おう、電脳軍の電波を元に発信源を探り当ててくれるはずだ！」

空矢は電獣携帯を開き、電波探知機能を作動させてバイクに跨った。

「よし、行こうぜ空矢 陸！」

海は車と突撃しても大丈夫そうな大型バイクに跨り、ヘルメットを被った。

「いっくぜ！ライガースクーター！」

陸も獅子のような牙をもったスクーターに跨り、坊主頭にヘルメッ

トを被せた。

「反応あり！…謎の電波は 郊外の森から放たれている、感づかれる前に倒すぞ！」

空矢は自らの後ろを走る陸のバイクと海のスクーターに通信を入れた、視界には月曜の街中をゆっくりと歩いていく人々が流れていた。

「ああ、これ以上被害者を出させてたまるか！」

海はバイクのメーター部分にセットしていた電獣携帯のボタンを押した。「電獣携帯！ボル ホエール！」

電獣携帯は光り輝き、バイクに跨っている海の体の周囲に蒼い粒子が舞い…その鍛え上げられた肉体を包み込んだ。

「いくぞ…ホエールバイク！」

海の変身した青いマスクの戦士ボルホエールはバイクを更に加速させ、森の中に突っ込んでいった。

「電獣携帯！ボル ライガー！」

陸はスクーターにセットしてある電獣携帯のボタンを押し、黄色いマスクの戦士…ボルライガーに変身した。

「電脳軍め…許さないぜ！」

ボルライガーがアクセルを踏み抜くとスクーターに装備されていたジェットエンジンが起動し、木々を避けながら森の中を疾駆した。

「電獣携帯！ボル コンドル！」

空矢は腰のベルトにセットした電獣携帯のボタンを押し、赤きマス

クの戦士ボルコンドルへと姿を変えた。

「いくぞスピードコンドル！フライトウイングだ！」

ボルコンドルの乾いた叫びと共にバイクは可変し、翼の生えた小型のボードへと姿を変えた。

「飛べえッ！」

日本刀の鞘を片手に、ボードで空を駆けるボルコンドルは緑が生い茂る森を見下ろした。

「反応が強くなっている？」

三人の電獣携帯は赤く点滅を始め 静かな森に緊張が走った。

「突入するぞ！ ホエール、ライガー！」

電獣携帯を片手に、ボルコンドルは敵に聞き取られないように静かに通信を終えた。

郊外の森の奥にひっそりと佇む廃工場から、奇怪な叫びと凶悪な叫びが響いていた…

『デンツノー！』

薄暗い工場の中で、電脳軍イレイズの作り上げた大型コンピュータが発光ダイオードの光を放っていた。

『デンノー！このケイタイデンノーの力をもつてすれば…日本全国の携帯、パソコンのアドレスなど簡単に探知できるデンノー！』

携帯のような頭を持つケイタイデンノーは大型コンピューターとケーブルで繋がられている体を震わせて、片手で槍を振り回した。

『デンデン〜!』

数十人のデンデンは短剣を片手に狂ったように舞いを踊った。

『…さあ…あと数分で日本中のアドレスの探知が終わるデンノー！
さあ…さあさあ…死ね死ねデンノー!』

ケイタイデンノーの頭は紫色に光り輝き、悪意のオーラがその場を包み込んだ。

『デンデン〜ン！デンデン〜ン！デンデン〜ン!』

『さあ…このケイタイデンノーの力の前に消えるがよい!心…弱きものよ!』

ケイタイデンノーが槍を天井に翳した瞬間、工場の窓ガラスが割れる音が響いた。

「そうはさせないぞ!」

ボルコンドルはボードに乗ったままガラスをぶち破り、薄暗い工場の中に突入した。

『なっ…誰だ?!』

「ボル コンドル!」

砕かれたガラスを踏み抜き、ボルコンドルは日本刀を鞘から抜いて上段に構えた。

『貴様が噂の 電獣戦隊かデンノー?!』

「一人じゃないぜ 悪党!」

鉄の壁をバイクが突き破り、青いマスクの戦士…ボルホエールが現

れた。

「ボル ホエール！」

ボルホエールは両腕を鯨の口のように広げ、自らを取り囲んだデンデンを威嚇した。

「二人じゃない！ 三人だ！」

威勢のいい叫びと共にスクーターが壁を打ち砕き、ボルライガーが現れた。

「人の心と命を守る！」

ボルライガーは両腕に鋭い爪を出現させ、大地を駆ける獅子のように雄々しく悪意に立ちふさがった。

「ボルトマン！」

ボルコンドルの叫びと共に三人は散解し、数人のデンデンを引きつけた。

『フン！あと数秒で死ね死ねメールは全国に送られる！ どんなにあがいても無駄デンノー！』

ケイタイデンノーはボルコンドルを指差して笑った。

「なっ…なんだと！」

驚くボルコンドルを前に、ケイタイデンノーは大型コンピューターと自らを繋ぐケーブルを分離させた。

「くっ 時間が無いのか！」

ボルホエールは迫り来るデンデンを蹴り飛ばしながらケイタイデンノーを睨みつけた。「どうりゃああっ！」

ボルライガーは四足足でアスファルトの大地を蹴り、デンドンを切り裂きながら大きなドラム缶を蹴り飛ばした。

『デエン?!』

「要は 手早くお前を倒せばいいんだな!」

ボルライガーの渾身のキックが床を転がる大きなドラム缶に巻き込まれたデンドンの脳天に炸裂した。

「秘剣! 驚の爪!」

ボルコンドルは握りしめた日本刀を鞘に入れ、一気に抜刀した。

『デエエンツ?!』

デンドンはボルコンドルの日本刀の一撃で槍ごと切り裂かれ、その全身タイツに包まれた亡骸はアスファルトに叩きつけられた。

『なに…十数体のデンドンをこんなにアッサリと?!』

三人は数十秒の間で十数体のデンドンを倒し、驚くケイタイデンノーに向かって歩き出した。

「電腦怪人! 人の心を破壊する言葉の暴力 それを利用したお前を俺達は許さない!」

ボルコンドルは日本刀を鞘に納め、ケイタイデンノーに向かって指差した。

『フン!』

「死ね」

とメールで言われたくらいで死ぬ奴が悪いデンノー! そんな弱い

奴を掃除してやってるんだ！有り難いと思ってほしいなデンノー！」

ケイタイデンノーは笑みを浮かべながら槍を回転させ、三人を威嚇した。

「ふざけるな！ 人間は支え合って生きるべきなんだ！ 優しい言葉を掛け合いながら！」

ボルコンドルは日本刀を片手に、ケイタイデンノーに向かって走り出した。

「そう生きれる可能性があった命を 言葉の凶器で奪った！俺は俺達はお前を許さない！」

ボルコンドルは日本刀を一気に抜刀し、槍を振り回しているケイタイデンノーに居合い切りを繰り返した。

「ほざけッ！」

ケイタイデンノーは槍の先端部分で日本刀を弾き、鋭い突きを放った。

「そんな優しい社会が日本にあったのか？！俺が殺した人間どもは生きていれば幸せになれたのか！？ 答えるデンノー！」

ケイタイデンノーの言葉と共に槍での鋭い突きが放たれ、ボルコンドルはその無数の突きを爆転しながら避けた。

「可能性は 可能性はあったはずだ！ そんな可能性をもった命を奪う権利はお前に無い！ 誰にも無いんだぞ！」

ボルコンドルはデンデンの亡骸が握っていた槍を奪い、ケイタイデンノーに向かって投げつけた。

「お前達が助けた孤独な命が 何かを求めて 力を求めて 我々レイズの仲間に入って電脳移植をするかもしれない！そんな可能性もあることを…忘れるなデンノー！」

ケイタイデンノーは槍を回転させ、自らに向かって真っ直ぐに飛来してくる槍を弾き飛ばした。

「くっ！ 強い！」

天井に突き刺さった槍を見て、ボルコンドルは敵の戦闘力の高さを改めて感じた。

「もう終わりだデンノー！メール送信まであと二十秒だデンノー！」
ケイタイデンノーは槍を振り回しながらボルコンドルに向かって走り出した。

「コンドル！時間が無い！ コンビネーション攻撃でいくぞ！」

ボルホエールはボルコンドルの肩を叩き、両腕を構えた。

「一気に決めてやろうぜ！」

ボルライガーは血が滴り落ちる爪を振り上げて叫んだ。

「ああ！ボルトサイクロン・電子レンジだ！」

ボルコンドルが叫ぶと、三人はジャンプしながらお互いに五メートルほどの距離をとった。

「ボルトボール！いくぜホエール！」

ボルライガーは野球ボールサイズのボルトボールを取り出し、ボルホエールに向かって投げつけた。

「ナイス！さあいくぜボルコンドル！打ってみろ！俺の必殺魔球を！」

ボルコンドルはグローブを被せた左手でボルトボールをキャッチし、そのボールを右手に持ち換えて大きく振りかぶった。

「鯨波流必殺大魔球三号！いっけえええいッ！」

ボルホエールが思い切り投げつけたボルトボールは一気に加速し、ボルコンドルの元に光となって向かっていく

「ボルトバット！さあ ホームランアタックだ！」

鉄バットを構えたボルコンドルは、迫り来る光の球を前に固唾を呑み ホームラン宣言を出した。

「クリティカルヒットおおおうッ！」

ボルコンドルの思い切り振ったバットはボルトボールを確実にとらえ、カキンという軽快な打撃音とともに打ち出されたボルトボールはケイタイデンノーに向かつて一気に加速した。

「送信まであと三秒 二秒 ！」

ケイタイデンノーは槍を振り回しながら謎の踊りを舞っていた

「一秒！（死ぬ死ぬメール）送信開始デンノー！」

叫ぶケイタイデンノー しかし、彼の体は何も反応しなかった。

「なっ なぜだデンノー！？送信出来ないデンノー？！」

ケイタイデンノーはその時、初めて自分がボルトボールの変化した巨大な電子レンジの中に捕らわれていることを知った。

「なっ！なんだこれは！？暗いデンノー！狭いデンノー！」

「教えてやろうケイタイデンノー！作動している電子レンジの中では 電波は届かない！…圏外だ！」

叫ぶボルコンドルは、ケイタイデンノーを捕らえた巨大な電子レン

ジのボタンを更に押した。

『や やめろ！やめてくれデンノー！』

暗闇の中で叫ぶケイタイデンノー 電子レンジのエネルギーが次第に強くなっていき その体の中に詰まっている電子部品はドロドロに溶け出した。

「パワー最大！」

『うぎやあああッ?!』

電子レンジの中はパチパチと光り輝いたと思うと、中のケイタイデンノーは一気に爆発した。

「この中に 全国のアドレスが入っているのか」

戦闘が終了した後、三人は変身を解除すると 廃工場の奥で巨大なコンピューターを見つけ出した。

「早く破壊しよう、こんなもの」

海は怪しく光るコンピューター睨みつけ、そう吐き捨てた。

「そうだぜ空矢！誰かが使ったら危ない！」

空矢はコンピューターを蹴り飛ばそう二人を止め、自らのポケットから電獣携帯を取り出した。

「いや、ちょっと待ってくれ 全国の人に 送りたいメールがあるんだ」

空矢はコンピューターと電獣携帯をケーブルで繋ぎ、ボタン操作を初めた。

「どんなメールなんだ？」

海が問いかけると、空矢は窓硝子から差し込む小さな光を浴びて笑って答えた。

「（生きる） ってな…」

【次回予告】

その試作機の設計図を完成させた技術者は叫んだ。

「これは 最強の兵器だ！」

その試作機を見つめて工場長は呟いた。

「よくもまあ こんなものを考えたもんだ」

葵重工で開発されている電獣 スカイコンドル・マリンホエール・グランドライガーは既に完成間近であった

【第五話 番外編 技術者達の短い休息】
次回もサービス、サービスう！

第五話 番外編 葵重工の短い休息（前書き）

狂気の電脳軍イレイズと戦っているのは電獣戦隊だけでは無い。

防衛組織GONの隊員や装備を開発している葵重工の人々も、人の心と命を守る立派な戦士達と言いうことができるであろう。

第五話 番外編 葵重工の短い休息

…葵重工は日本有数の大企業・葵インダストリアルの前身となった製造会社であり、電獣戦隊の装備を作り上げた会社でもある…

「よし、開発費もオーバーすることなく80%が完成したぞ！」

葵重工東京支部の巨大工場の中では、数十人の整備士と獣数人の技術者の手によって電獣戦隊の決戦兵器・一号を製造している真っ最中であつた。

「馬鹿やろう、もう当初の予算は軽くオーバーしてんだよ まったく正義の味方のやることはわからんよ」

整備士の一人は束になっている予算報告書と武装の説明書に目を通してながら呟いた。

「確かに ここで作っているスカイコンドルだけでも既に超高熱レーザーと60耗バルカン砲が二門づつ付いてるもんなあ」

整備士は梯子に登り、滴る汗をタオルで拭きながら鉄の匂いのする巨大な弾丸をバルカン砲に装填した。

「そついえば 二号機…マリンホエールはどうなってるんだろ？」
整備士は梯子を移動させレーザー発射口に近づき、その巨大なレンズを拭いた。

「さあな、二号機は水陸両用の決戦兵器だから海洋艇製造工場で作られていると聞いたが…」

予算報告書をテーブルに置いた整備士は立ち上がり、深紅の特殊コーティングが施されていくスカイコンドルの元へ歩いていった。

「さて 仕事だ仕事」

工場の内部は特殊コーティングの放つ独特な匂いが充満していたが、それでも彼らのやる気が萎えることは無かった。

日本海に面した海岸沖に建てられた葵重工・海洋艇製造工場は電
獣戦隊決戦兵器二号を未完成ながら形にして、近くの海で試運転の
真つ最中であつた。

「今まで色々な兵器に乗ってきましたが　こんな大きい戦闘艇は初
めです」

テストパイロットの少女は特殊なパイロットスーツに身を包み、決
戦兵器二号・水陸両用戦闘艇マリンホエールを思念操作していた。

「と　潜水開始します…十メートル…三十メートル」

マリンホエールは灰色の装甲で水を弾きながら、その青い深淵へと
潜行していく

「現在、二千五百メートル…ミサイル装填、熱源センサー作動」

未だに人類が足を踏み入れたことの無い漆黒の世界に到達したその
灰色の戦闘艇は、熱源センサーによって自動標的を完全に捉えた。

「ミサイル発射！」

灰色のボディから試験タイプの黄色い小型ミサイルが発射され、水
中に無数の水泡が発生した。

「目標の破壊を確認…帰還します…ん？」

テストパイロットは特殊スーツから自らの脳裏に送られている情報
により、戦闘艇の装甲がダメージを受けていることを感じとった。

「あなた　水圧に負けているの？…最終コーティングが無いと駄
目みたいですね」

テストパイロットはそれ以上機体から危険信号が送られてこないことを祈った。

「…完成までの道のりは遠いですね…ということはもう一回乗らなきゃなんですね トホホ」

少女は巨大なパイロットスーツの中で小さく笑った。

関西国際空港・増設滑走路

その狭いコクピットの中でテストパイロットの少女はモニターから映し出された光を見つめて、心を沸き上がらせていた

「…パイロット番号E5番：セキュリティー番号b8ad」

葵重工関西支部にて開発された決戦兵器三号・四脚重戦車ガイアライガーは他の決戦兵器とは違う戦術で運用されるがために、真つ先に完成し GOM関西支部によって稼働実験が行われていた。

「決戦兵器三号、第14回稼働実験を開始する」

関西国際空港に増設された滑走路に立っていたのは、帽子とサンダラスを付けた鬼軍曹風の男と 四階建てのビルほどはある巨大な鋼の獅子であった。

「…エンジン稼働、いけっ ガイアライガー！」

鋼の獅子は身震いし、その四つの脚を使って大きく躍動した。

「よし！そのままサイドギアに突入するんだ！」

コクピット内に男の乾いた声が響き、パイロットの少女は2つのレバーの中央に武骨な機械をセットした。

「了解、サードギア 行きますよっと！」

少女がペダルを踏むと鋼の獅子は凄まじい速さで滑走路を走り、一条の光となって加速した。

「痛ッ！いたたたたッ！」

少女がブレーキペダルを踏むと、鋼の獅子は失速しながら反転した。「くうっ やっぱりこのスーツでは限界だぁ」

少女はパイロットスーツを脱ぎ捨て、鋼の獅子のコクピットを開放させた。

「長官！ボクもボルトマンになりたいっス！」

コクピットから飛び出した少女はロープを伝い、陽炎が浮かぶ灼熱の滑走路に降り立った。

「駄目だ！」

鬼軍曹風の男 GOM関西支部の司令はプラスチック製のメガホン片手に降り立った少女の元に走った。

「決戦兵器には 鍵をかけると言っとなるだろうが ばっかもーん！すぽーん、という音と共に少女はメガホンで叩かれた。

「了解っス！」

少女はよろめきながらも体勢を立て直すと、敬礼をして鋼の獅子のコクピットの中に戻っていった

「それが終わったら滑走路を20周だ！それができたら ボルトマンの件を上にも報告してやる！」

メガホンによって拡大された関西支部司令の声を聞いて、少女の中のやる気が爆発した。

「本当ですか！よーっし！ボク、頑張るっス！」

少女はコクピット内でポニーテールを結ぶと、機体に鍵をかけて再びアスファルトの大地に降り立った

「待ってて下さい電獣戦隊の皆さん ボク 絶対にボルトマンになつてみせるっス！」

電獣戦隊司令室

…三体の決戦兵器の開発計画を推し進めていたのは、防衛組織GONの司令官・火車広である

「そうですか、やはり電獣戦隊の戦士達が乗らないと目標性能の40%も出せませんか」

火車司令官は椅子に座りながら通信機で各機関と連絡をとっていた。「ああ、ガイライガーに至っては（あの機能）も使い切れていない」

通信機から聞こえた声は、先ほど関西国際空港で実験をしていたGON関西支部司令のものであった。

「確かに彼らを乗せるのが一番手っ取り早いんだが…いつ事件が起こるか分からないからな」

火車司令官は男の提案に難色を示しながら、数枚の企画書を見つめた。

「正義の組織というものは…難しいものですな」

関西支部の司令官との通信は切れ、火車司令官は椅子から立ち上がり背伸びをした。

「…暇が無いだけ充実はしているんだがね… ん？」

通信機は赤く点滅し、緊急事態を伝えていた。

「…はい、こちらGON司令室！……なんですって！ 了解しました、すぐ向かわせます！」

通信機を片手に、火車司令官は電獣戦隊の三人の電獣携帯との回線を繋いだ。

「電獣戦隊…緊急集合せよ！ これは第一級緊急事態である！」

【次回予告】

東京と大阪間をハイパー新幹線（雷鳴）がシンカンセンデンノーにジャックされた！

残忍で凶悪なシンカンセンデンノーは雷鳴を音速まで加速させ、東京駅に突っ込み大破壊を企んでいる！

雷鳴を止めて、今までの電脳怪人とは違う能力をもったシンカンセンデンノーを倒すことが出来るのは ヤツしかない！

大地電獣 ガイアライガー起動！

【第五話 死を呼ぶ音速新幹線！】

光の速さで大地を駆けろ！鋼の獅子よ！

第五話 番外編 葵重工の短い休息（後書き）

これからも電獣戦隊ボルトマンをよろしくお願いします

第六話 死を呼ぶ音速新幹線！（前書き）

それは凶悪すぎる作戦であった。

一刻を争う緊急事態に、遂に電獣戦隊の決戦兵器が立ち上がる！

圧倒的な超パワーで巨大な悪意に立ちはだかるのだ！

第六話 死を呼ぶ音速新幹線！

ハイパー新幹線（雷鳴） 客室内

「おぎやあああつ！おぎやあつ！」

…赤ちゃんの悲鳴とと修学旅行に来ていた女子高生達のすすり泣きが…真新しい客室内に響いていた。

『デンノー！この新幹線は一時間後に東京駅に突っ込む！助かりたい奴は…電腦軍イレイズに魂を売り…構成員となるのだ！』

駅弁を下品に貪りながら、新幹線の頭をした^{シンカンセンデンノー}電腦怪人が乗客達に向かって罵声を浴びせていた。

「そんな…金ならいくらでも出すから助けてくれえッ！」

小太りの中年男性が椅子から立ち上がって叫ぶと、シンカンセンデンノーは駅弁を放り投げて中年男性に近づいた。

「ひいつ？！」

シンカンセンデンノーに袖を思い切り掴まれた中年男性は声にならない悲鳴をあげて、恐怖のあまりに失禁した。

『…聞こえなつたのか禿デブ野郎…俺は（魂を売る）（死ぬ）…の選択肢しか与えてないぜデンノー！』

シンカンセンデンノーは中年男性を吹き飛ばして、新幹線の運転士へと歩き出した…

「俺っ…電腦軍イレイズつてのに魂売るよ！」

「そうね 死ぬのよりはマシよ！」

「いつ…イレイズっ ばんざあい！」

背後からは乗客達の悲壮な声が響いていた。

『グハハッ！さあ…さあさあさあ恐怖しろ！そして魂を売るのだ 電脳軍イレイズに！』

シンカンセンデンノーは残忍な笑い声をあげながら運転室の椅子に座り、思い切りペダルを踏み込んだ。

防衛組織GON基地 司令室

「なんですって！ハイパー新幹線が電脳軍イレイズに占領された？！」

司令室で驚愕した空矢は既にボルコンドルに変身していた、それは一刻も早くGON本部に集合するためでもあった。

「ああ、大阪発東京行きのハイパー新幹線（雷鳴）が電脳軍イレイズに占領され…現在、東京駅に向かって加速中だ」

ボルホエールに変身していた海は、司令官の言葉を聞いて耳を疑った。

「加速中？まさか奴ら 新幹線を東京駅にぶつけるっていうのか？！」

ボルホエールの質問に長官は頷き、司令室のモニターに現在も加速しているハイパー新幹線（雷鳴）を映し出させた。

「多分そのつもりだろう、ハイパー新幹線（雷鳴）は現在も時速720キロの速さで東京駅に向かって加速中だ」

ボルライガーに変身した陸は、おぞましい光景を想像して思わずゾツとした。「馬鹿な！そんなことをしたら どれだけの人間が死ぬと思ってるんだ！」

ボルホエールは司令室の壁を叩きながらうなだれた。

「ぐっ 電脳軍イレイズ 悪魔め！ どうすりゃ…どうすりゃいいんだ…！」

長官は焦るボルホエールとボルライガーを見かねたのか、机を叩い

て仁王のように一喝した。

「冷静になれライガー！ホエール！…何か手段があるはずだ！諦めるんじゃない！」

「しかし！」長官の言葉に二人が言い返そうとした瞬間、モニターの画像は大きく揺れ、外部からの通信が受信された。

「手が無いわけではないぞ、電獣戦隊の諸君！」

モニターに映し出されたのは、何かの基地のような場所を背に椅子に座っているサングラスの男であった。

「あなたは GON 関西支部の切れ者 小田切おだぎり 釧勝司令官！」

サングラスの男を映し出すモニターを見つめて、火車司令官は司令官の帽子を被り直した。

「やはり（決戦兵器）を使う時ですか 釧勝長官」
司令室のモニターの画面は二分割し、サングラスの男の横に大地を疾駆する鋼の獅子を映し出した。

「火車司令官、もうそちらに向かわせましたよ この決戦兵器三号 大地電獣ガイアライガーを！」

モニターに映し出された大地を疾駆する鋼の獅子を見つめ 電獣戦隊の三人の戦士は驚愕した。

「…大地電獣ガイアライガー もう完成していたのか」
ボルコンドルはモニターを凝視して固唾を呑んだ。

「噂には聞いていたが 動く状態だったのか」
ボルホエールは震える拳を開いて呟いた 彼らは電獣が開発されている事実は知っていたものの、完成は2ヶ月後と聞かされていたの

でこれほどに驚いているのであった。

「ちょ！ちよつと待つて下さいよ釧勝長官殿！今　ガイアライガーに乗っているのは誰なんですか？！」

ガイアライガーを始め電獣は通常の人間には扱うことはできない、と聞かされていたボルライガーはモニターの中で今も尚大地を駆ける電獣　ガイアライガーを見つめて驚いた。

「テストパイロットを乗せた　あいつは」

釧勝長官が何かを言おうとした瞬間、司令室のモニター画像は大きく振動し　ガイアライガーを映していた画面に謎のパイロットスーツを着た人間を映し出した。

「ハイハイハイ！ボクが動かしてるっすよー！」

パイロットスーツの人間は小柄な体に衝撃を受けながらも、何ともないといった風に（失礼にあたるくらい）軽快に敬礼をした。

「君は　君がガイアライガーを動かしているのか？！」

ボルライガーはあまりにも場違いなノリのテストパイロットに焦りを覚えていた。「はい！　ボクがガイアライガーをリモッタの外れないレベルにまで加速させて東京に届けるっす！絶対　届けてみせるっす！」

テストパイロットの意気込みを感じたボルライガーは冷や汗をかけた。

「ボルライガーは光速まで加速することが可能だ　ハイパー新幹線を追い抜くこともできる！」

モニターに映っている釧勝長官は拳を握りしめて電獣戦隊の三人の戦士を指差した。「電獣戦隊！君達は今すぐ東京駅に集合してくれ！あと二十分でガイアライガーが　ハイパー新幹線は二十三分で到着する！」

釧勝長官の言葉を聞き、火車司令官の額から冷や汗が滴り落ちた。

「ボルライガー！三分の内に乗り換えてハイパー新幹線を止めるんだ！電獣戦隊！出勤せよ！」

冷や汗が滴り落ちた腕を振り上げ、火車司令官は電獣戦隊に指示を出した。もう選択の余地は無かった。やるしかない。

「了解！行こうぜコンドル！ライガー！」

ボルライガーは火車司令官とモニターに映る釧勝長官に敬礼すると、震える汗ばんだ腕を振り上げて司令室から飛び出していった。

「了解！間に合ってくれよ」

「頑張ろうぜライガー！」

ボルホエールの背中に続くボルコンドル 緊急の戦いが始まった。

大地電獣 ガイアライガー内

「いたッ……最新式のスーツでもやっぱり…痛いっスね」

今までに体験したことの無い加速による圧力を受け、テストパイロットの少女は焦りを感じていた。

「ああは言っただけ…やっぱり辛いっス」

少女は今までにない緊急を感じ、モニターの上部に映る青空を見つめた。

「パイロット番号E5番！たつみ 巽 ゆう 勇！弱音を吐くな！」

ガイアライガーのコクピットモニターに、叫びと共に釧勝長官の顔が映し出された。

「…でも…ボクがもしこのガイアライガーのスピードに勝てなかったら…！」

「大丈夫だ！貴様ならできる！絶対にだ！！」

少女の言葉を失った、それは自分が今まで長官に誉められたことが無かった故の驚きであった。

「……………長官……………初めて勇気づけてくれたっスね」

長官は含み笑いをして、サングラスを外した。「事実だ…貴様は今までのテストパイロットの中で一番努力した人間だ！」

サングラスを外した釧勝長官の顔は微かに笑っていた

「だから俺は信じている　貴様の努力が確実たる奇跡と約束された勝利を呼ぶことを！」

長官は再びサングラスをかけた、テストパイロットの少女は小さく笑って高らかに宣言した。

「奇跡は起きます…起こしてみせるっス！！！」

東京駅・新式レール車線上

東京駅周辺は完全に避難勧告が出され、そのレールの上には電獣戦隊の三人の戦士だけが立っていた。

「ボルライガー…緊張してるだろ？」

ボルコンドルは風に吹かれているライガーの方を見つめた。

「ん…んなわけないだろ？！やってやるさ！俺は！…」

端から見ても無理をしていることはまるわかりであった、それを自ら感じ取ったボルライガーは首を横に振った。

「…って…言っても無理だわな…手が震えてやがる　我ながら情けねえ」

ボルホエールは珍しく弱音を吐いたライガーの肩を小さく叩いた。

「誰もやったことない無謀な作戦だ、無理ないぜ」

「やってやるさ　絶対！」

ボルライガーがため息をつく、静かな駅のホームに鳩が数匹降下

した。

「ボルライガー！あと数秒でそちらにガイアライガーが来るぞ！電獣携帯でパイロット承認コードを出すんだ！」

電獣携帯から響く司令室の声を聞いて、ボルライガーは覚悟を決めたようであった。

「よし…来い！電獣ガイアライガー！」

ボルライガーが天に翳した電獣携帯は黄色い光を放ち、レールに沿って一直線に加速した…その時であった。

「電獣戦隊の皆さん！…お待たせしましたっス！電獣ガイアライガー到着します！」

凄まじい速さで2つのレールの上を走って来たボルライガーは東京駅の新式レールの車線上に止まり、凄まじい轟音が響いた。

「ライガージャンプ！」

鋼の獅子の下腹部分にジャンプして飛び乗ったボルライガーはハッチを開けて、コクピット内に入り込んだ。

「君が…運転してきたのか？！」…トの後ろに退いた小柄なテストパイロットを見つめてボルライガーは驚いた。

「そうっス！そんなことより早く運転してくださいっス！もう時間がないっス」

どう見ても中身は少年にしか思えないテストパイロットのヘルメットを見ながら、ボルライガーはパイロットシートに座った。

「ありがとう…ここまで運んでくれて！……ここからは俺に任せてくれ！」

「了解っス！」

極限状態の今となつては、軽快な返答もボルライガーにとって心地よいものとなっていた。

「いい返事だボウズ！さあ お前の力を見せて見るガイアライガー」

！トツプギアだ！」

ボルライガーが2つのレバーの間に電獣携帯をセットすると、ガイアライガーの瞳は眩い光を放った。

「ギヤアアアオッ！」

烈火の如き雄叫びがコンクリートの樹海に響き渡ると、鋼の獅子は後ろ足だけで直立した。レールの上に立った巨大な獅子の頭部は直立したボディのてっぺんに可動し、ガイアライガーは人型の形態獅子の頭をもったロボットへの変形を完了した。

「すごいっス！…これがガイアライガーの機能！」

「さあ行くぞガイアライガー！新幹線を受け止めるんだ！」

ボルライガーがペダルを踏むと、ロボットに変形したガイアライガーはレールの上を走り出した。

「ガイアライガー！最大パワー！」

向こうから加速してくるハイパー新幹線（雷鳴）に肉迫したのは数秒後のことであつた。

『デンノー！なんだこいつは？！この新幹線を受け止めようとしているのか！？』

運転室で思い切りハイパー新幹線（雷鳴）を加速させていたシンカセンデンノーは、その鋼の獅子を見つめて驚愕した。

「いつけえええいッ！」

ガイアライガーは全身で新幹線を受け止めながら、その加速力を相殺し停止させるために火花をあげた。

「だっ！駄目なのか？！」

モニターに映る危険信号を確認してボルライガーは首を横に振った。「負けないで下さいっス！みんなの心と命を守って下さいっス！」

シートの後ろから響く声に押され、ボルライガーの心の中の炎は爆発した。

「ああ！俺も お前も！…ガイアライガーも男の子だああああッ！」

ボルライガーがアクセルを踏み抜くと、ガイアライガーは全力を出して新幹線のスピードを減速させ ついには停止させた。

「やった やったぜ！」

思わず万歳をするボルライガー、その激しい光景を外から見ていたボルコンドルとボルホエールもガッツポーズをとっていた だが。

『デンノー！このまま帰ったら俺は確実に殺されるデンノー？！嫌だあ！嫌だあああああ！』

シンカンセンデンノーは運転室のフロントガラスを割ると、発狂したように脅え出した。

『俺は嫌だあああッ！』

その死への恐怖が電腦怪人の電腦を激しく刺激したのである…
レールの上に降り立ったシンカンセンデンノーはムクムクと巨大化を始めたのである。

「きよ！巨大化したッスよアイツ？！」

「大丈夫だ！今の俺達なら ガイアライガーなら勝てる！」

驚くテストパイロットをよそにボルライガーは勇ましくレバーを引き、高らかに勝利宣言をした。

『俺は死にたくなああッ！』 巨大化したシンカンセンデンノーは新幹線を背に、放心状態のまま目から破壊光線を放った。

「やらせるかつ！ライガージャベリン！」

ガイアライガーは鋭い尻尾が変形した長槍を回転させて、破壊光線を弾いた。

『うぐわッ?!』

弾き返した破壊光線が直撃し、シンカンセンデンノーはよろめいた。
「まだまだあつ!くらええい!…ライガーバイトッ!」

人型の獅子の怒濤の攻撃は終わらない、ガイアライガーはよろめくシンカンセンデンノーの頭に噛みつき首をもぎ取り、一気にそのボディをビルの谷間に蹴飛ばした。

『うぎああああつ?!』

首を失ったシンカンセンデンノーを前に、ガイアライガーの腕は帯電し凄まじい雷の拳と化した。

「ボルトツ・ブレイカー!」

ガイアライガーはビルの谷間に倒れたシンカンセンデンノーに一気に腕を突き刺し、数千万ボルトもの電撃を放った。

『がああ!死にたくなあああ』

「…死にたくないなら 他人にそれを味わわせようとするなよ!」

爆散するシンカンセンデンノーを背に、ガイアライガーは飛び散る破片からハイパー新幹線を守っていた。

…数分後

「ありがとう お前が届けてくれなかったら 今ごろ俺は」

作戦が終わった時、ボルライガーはシートの後ろでヘルメットを外していたテストパイロットに向かって頭を下げた。

「先輩!謝らないで下さいっス! 先輩達はボクの目標なんですから!」

ボルライガーが頭を上げると、そこにはショートヘアの少女が笑

っていた。

「…あ 女の子だったのねん」

ボルライガーは変身を解除しながら驚きを口にしてしまった

「…えへへ」

少女は苦笑いをしながら舌をぺロリと出した。

「よく言われるっス それ」

ボルライガー… 大門陸はそのボーイッシュな笑顔を見つめて微笑み、「悪い悪い」と言いながらクシャクシャと汗だくの少女の頭を撫でてグッドサインを出した。

「へへっ」

「はははははっ」

夕焼けに染まる鋼の獣の中から、猫と獅子の笑いが響いた。

【次回予告】

電獣戦隊の休日とはどんなものなのであろうか。

人の命と心を守るヒーローは、きっとストレスも溜まっているのであろう。

だから休める時は休んで欲しいものである。

【第七話 休んで遊ぶ電獣戦隊！】

週休2日ではあるが、事件があれば即集合である！

第六話 死を呼ぶ音速新幹線！（後書き）

この作品のご感想、ご質問をお待ちしております…参考にしてより
良い作品作りをしていきます。

第七話 休んで遊ぶ電獣戦隊！（前書き）

戦士の休息、それは民間人となんら変わりはない。

第七話 休んで遊ぶ電獣戦隊！

空矢と陸と海は1日平均9時間働き、帰宅する…

と言っても 電脳軍イレイズ絡みの事件がなにもなければの話だが…

GON基地 事務室内

「ええと、ガイアライガーの欠損部分は確か…右腕の間接部分と足のつま先だったかな？」

先のハイパー新幹線事件から数時間後、十分に休息をとった陸は食玩が並んでいる机に向かって嫌々そうに戦闘報告書を作成していた。「戦闘より面倒くさいなあ こりゃ」

しかし、そうも言ってられないのが正義の味方の辛いところである。

「仕方ないだろ、ガイアライガーは本来ならまだ使用できない未完の兵器だ」

後ろの机に向かって資料を整理していた空矢が立ち上がり、陸にコピーを差し出した。

「だが今回の戦いのデータ次第で、すぐさま電獣戦隊で使うことになるかもしれないから これも重要な仕事だ」

そういうのは技術者がやってくれよ、と言いたかったが、陸は面倒になりそうなので言葉を呑んだ。

「わかってるって…さあて 一気に終わらせるか！」

黄色いワイシャツの腕を捲り、陸は嫌味のように項目のある報告書に向かってペンを走らせていった…

海は、空矢と陸より一足お先に夜の街に繰り出していた。

「…空矢と陸には悪いが、生憎俺はサービス残業はしたくないんでね」

休日であつた筈の1日が終わっていく…そんな疲労を和らげるためにはアルコールが必要であつた。

「あそこで飲むか」

商店街の一角には寂れた酒屋があり、海はその静けさに惹かれて足を運んだ。

「いらつしゃーい」

鉢巻をした店長らしき男の元気のよい声が響き、海は厨房の向かいにある椅子に座つた。

「なんにしやすか？」

厨房からエプロンをした禿頭の男が現れ、手もみをしながら軽く会釈した。

「ユウヒビールと…刺身」

「すみませんお客さん…刺身は無いんだわ」

寂れた店だったのでそんなことだろうと思つていた海は気を取り直して呟いた。

「なら酢ダコでいいや…」

「あいよっ」

店長らしき男はメモをとり、鉢巻を絞めなおして厨房に戻つていった

（しかし 電獣戦隊が結成されてまだ1ヶ月しか経っていないのに
決戦兵器 電獣を使うような事件が起こるとは…日本はこれから
大丈夫なのか？）

テーブルの上に置いてある黒いテレビが流す暗いニュースを見つめ
ながら、海は深いため息をついた。

「久々に…美味しい酒だった」

海が飲み終えた頃にはテレビはお笑い番組を放送していた、若手の
芸人が自殺をテーマにしたコントをしていた。

「さて…行くか」

「1200円になりやすッ」

会計を済ませ外に出た海は、夜風を浴びながら歩き出そうとした…
その時であった。

「本当にもう…止めてください!」

商店街の交差点の近くで数人の柄の悪い男達が薄いカーディガンを
着た女性を囲んでもみ合っていた。

「いいじゃねえかよ!ちったあつき合えよ!」

「カラオケ行こうぜ!」

モヒカンの男が女性の腕を掴んだ瞬間、海は大地を蹴って走り出し

ていた。

「なにしてるんだお前ら?!」

海は長袖の裾から小型のコルトパイソンを取り出し、柄の悪い不良達を威嚇した。

「なんだアお前は?!」

深夜の暗闇の中で光る拳銃を玩具だと思ったのか、不良達に怯む様子は無かった。

「そんなオモチャで ナイト気取りかあ!?!」

不良の一人が鉄バットを振り回しながら海に迫った。

「酔った大人をおちよくんなよ お前ら!」

海は躊躇わずに鉄バットに向かってコルトパイソンを発砲した、小型サイレンサーが付いているために鋭く乾いた音が響いた。「へっ! やっぱオモチャかよ!」

不良はバットを振り上げた、しかし鉄バットは既にコルトパイソンから放たれた特殊弾丸によって撃ち抜かれていた。

「な…なんだこりゃあ?!」

根本だけとなったバットを放り捨て、不良は一目散に逃げ出した。

「おい! 待てよ!」

「くっ……覚えてやがれ!」

テンプレートな捨て台詞を吐いて、女性を囲んでいた柄の悪い不良達は逃げていった。

「あ…ありがとうございます」

海はコルトパイソンを袖にしまい、震える声の元に駆け寄った。

「君は…」

海は驚いた、女性…いや、不良に絡まれていたその少女は 先の（東京大爆破作戦）の際に自分が助けた盲目の少女であった。

「あなたは…ボルホエールさん!?」

少女は杖を片手に海の声の元に近寄り、握手を求める仕草をした。

「…ああ…ボルホエールだ…」

海は少女と握手を交わし、表情を曇らせた。

「それより…なんでこんな時間に商店街を歩いているんだ、女一人じゃ…危ないじゃないか!」

少女はビクンと驚き、俯いた。

「…ごめんなさい…私 外出が好きなんです」

一層震えた少女の声を聞き、海はヤレヤレと言った感じで少女の手を握った。

「え…?」女性は驚いていたが、海は構わず歩き出した。

「一緒に帰ってやるよ…危ないからな」

「あつ ありがとうございます」

少女は手を引かれ困惑気味であったが、海が大きく暖かい手に握られ 不思議と安心していくのを感じた…

「…暖かいんですね あなたの手は」

少女があまりにも可愛らしく微笑むので、海は自分に言い聞かせるように呟いた。

「俺は……ロリコンじゃないんだがな」

その小さな呟きを聞き取った少女は、意外そうな顔をした。

「え…?!…私…今年で26ですけど ?!」

「そうなのか…?!」

意外であつた、小柄で童顔だから少女に見えていたが…少女はやはり女性であつたのだ。

「同年代かよ…悪かつたな、子供扱いして」

海は今まで少女として接してきたことを詫び、女性の手を離した。

「いいんです、小さい私が悪いんですから」

女性はそう言つて苦笑すると、耳をすませて近くを通る電車の音を聞き取つた。

「この辺りなので…もう、行きますねボルホエールさん…今度はお酒を一緒に楽しみませんか？」

「西川 海だ、ああ 暇があつたらな…」

女性は苦笑しながら手を振つた。

「正義の味方は忙しいんですね」

次の日…

「ふぁーあ…ねもい」

ボルライガー・大門 陸は住んでいるアパートから飛び出し、指定場所に生ゴミを捨てて街に繰り出した。

「おはようございまっス！先輩」

背後から軽快な声が陸を呼び止めた、聞き慣れてはいないが多分昨日のガイアライガーのテストパイロットであろう。

「あ…おはよう まだ帰ってなかったのか？」

少女は確か関東支部の人間であつたから、陸はもう彼女が帰還しているものだと思っていたのだ。

「今日は休暇をもらったんで、東京見学をしてから帰ろうかと思つてます」

「あ…そうなのか じゃあ、楽しんで来いよ」

なるほど、と納得した陸は頷きながら走り出そうとした

「先輩も休暇なら一緒にどうっスか？ボク、（カレー）屋巡りしたいっス！」

カレー、という単語に反応した陸は振り返り 真剣な顔つきで言い放った。

「カレー…か、…付いてこい…いい店に連れて行ってやる…」

「りょ！了解っス！」

ボルライガー・大門 陸の最大最高の好物…それはカレーであつた…

黄色い定めか、それとも天のいたずらか。

空矢は一人、湖の畔に立ち、遙かな空に登る太陽を見つめていた
「いい1日になりそうだ…」

空也は駐車場に駐車しておいた車からルアーフィッシング用のロッド（釣り竿）を取り出し、ラインの先にトップウォーターを攻めるルアーを取り付け、一気にキャストイングした。

「…さあ…勝負だ！」

空也は釣りが趣味であつた…彼の戦いの傷は、静かな湖畔での趣味一時で癒されていたのであつた

「…ん？」

数十分後、空也はもどかしいような表情をしながらリールを巻き上げ、ラインの先のルアーをボトムウォーターを攻める（クラנקベイト）に変更した。

「よしっ…こいつなら！」

…数時間後…

「…ブルーギルが一匹か、まあ この前よりはいいかな」

ピチピチと跳ねる小さなブルーギルの口元の針を抜き、空矢はその

命を水面に返した。

「…長生きしろよ」

空矢の趣味はバスフィッシングである。しかし、典型的な下手の横好きであつた

「…昼飯にしようかな……」

水面に映る青空を飛ぶ鳥、周囲で釣りをしている人々…その全てを守るために…十文字。空矢は戦う

彼だけでは無い…電獣戦隊の戦士達は

【次回予告】

それは、翼持つ幹部の最後の作戦であつた。

摩天楼が激震し。そびえ立つ赤き塔が崩れ去る時、灼熱都市の平和は蹂躪された。

しかし、彼らは走り出した。

悪しき進化を遂げた彼らが作り出すカオスの中に、三人の戦士達は燦然と立ちふさがる。

切り札三枚。

手役は電獣。

【第七話 三分二十七秒の大決戦！】

鋼の武具が、怒りに吼える。

第七話 休んで遊ぶ電獣戦隊！（後書き）

これからも電獣戦隊ボルトマンをよろしくお願いします。

第八話 三分二十七秒の決戦！（前書き）

強力な敵を前に、三つの電獣が吼えたける。

スカイコンドルが空を飛び、マリンホエールが海を行く、そしてガ
イアライガーが牙を剥く。

電獣戦隊の力が今、試される。

第八話 三分二十七秒の決戦！

地中要塞 ドリルガイアー内

暗い闇だけが、その檻の中の全てであった。

『電獣戦隊…貴様達は 私が必ず 倒す！』

電脳軍イレイズの翼もつ幹部、ウイングレイザーは懲罰室の闇の中でひたすら怒りと怨執を込めて敵の名を呟いていた…

『…ボルコンドル ボルホエール…ボルライガー…』

自らの創造主に仇なす三色の戦士達の姿を想像するだけで、彼の怒りの心は沸々と沸騰していく

『この私 最後の力で 貴様らを葬り去ってやる ！』

ウイングレイザーは硬い檻をねじ曲げ懲罰室から出ると、要塞内の中心部に向かって歩き出した。

『本当にやるのか…ウイングレイザー?!』

ウイングレイザーは廊下で行き違うキバレイザーに向かって頷き、小さな部屋の中に入っていた…

『ドクター・ソス様 許して下さい （禁忌）を破ることを』

その部屋の中は、人間を電脳怪人にするための実験室であった

『…確か…この奥に……これが ！』

実験室の奥には、大きな電脳怪人の亡骸が培養液入りの巨大カプセルの中に保管されていた。

『こいつが……私と同じA級電脳怪人……（ツメレイザー）……』
巨大なカプセルの中の亡骸は巨大な腕と爪をもった白虎のような電
脳怪人であった。

『……』
ウイングレイザーが無言のまま鉄拳を繰り出すと、巨大カプセルは
鈍い音と共に粉々に砕け散った。

『……さあ……電脳合体するのだ…… ツメレイザーよ』
ウイングレイザーはその細い腕で倒れたツメレイザーの亡骸を抱き、
脳天に手を突き刺した。

『……そして倒そうぞ……我らが創造主の敵 電獣戦隊を……』

ウイングレイザーは突き刺した腕から光り輝く小さな電脳を取り出
した。

『……ボルトマンを……血祭りにあげるのだ！』
ウイングレイザーはツメレイザーの電脳を自らの頭に突き刺し、俯
いた。

『あが……あが……！ああああっ……！』

ウイングレイザーの体の組織は躍動し、異形の姿は更なる変質を始
め、火花を散らした

『創造主よ……偉大なる ドクター・ソスよ……私は……私は……！』
ウイングレイザーは要塞内の廊下を這いながら……外へと向かった……
『……早く……外に出なければ……！があ がああああ！』

張り裂けて散り散りになるような痛みがウイングレイザーの電脳を
襲う……

『ぐあっ……！があっ……！』

それは、ウイングレイザーとキバレイザー2つの電腦が重なり合う衝撃であつた

ウイングレイザーは変質をし続ける体を引きずらせながらも要塞の出口に辿り着いた。

『お前は ウイングレイザー なのか？』

出口のハッチ付近にはキバレイザーが立っていた…しかし、今のウイングレイザーには 驚愕するかつての同志の姿も見えていなかった

『…がああああつ…！』

地中を移動していたドリルガイアーから這い出たウイングレイザーは…地下数百メートルの土の中に放り出された

『見ていて下さいドクター・ソス様…我が名は…我が名は ツメウイングレイザー！』

巨大な腕と爪を得た翼もつ幹部…ウイングレイザー改め、ツメウイングレイザーは地面を掘削し、地上を目指した

『…さあ…皆殺しだ ボルトマン！』

大地を隆起させ、地上に現れたツメウイングレイザーは黒い翼を広げ 一気に飛翔した。

ドリルガイアー 総統室内

『…ウイングレイザー…いや、今はツメウイングレイザーだったか…』

閉ざされた総統室の暗闇の中で、仮面を外した狂気の博士…ドクター・ソスは笑っていた。

『いよいよ…いよいよ私の傑作が第四段階に到達したか…』
ドクター・ソスは仮面を装着し、室内の灯りをつけて立ち上がった。

「…最終段階に至るまでは死ぬなよ…… ツメウイングレイザー」

…ツメウイングレイザーは空を裂き、赤い東京タワーの天辺に降着した。

『この東京タワーは電波パワーに満ち溢れている！その力さえあれば…！』

ツメウイングレイザーは東京タワーの鉄骨に噛みつき、その内部から無数の電波パワーを吸収した。

『ドクター・ソス様…すいませぬ 言いつけを破ります！』

そう叫ぶとウイングレイザーはムクムクと巨大化を始めた…タワーは増えていく質量により折り曲げられ、一気に粉碎された。

『がああっ！さあ…見えるだろうボルトマン！早く…早く来い！さ

もなければ…皆殺しだ!」

巨大化を果たしたツメウィングレイザーは両腕を振り上げて、一気にアスファルトの大地に鉄拳を繰り出した。

「きゃああつあ?！」

「なんだ…あの化け物は…?!」

街の中の人々はその巨大な異形を見つめて驚愕し、集団パニック状態に陥った。

「押すんじゃねえ!うがあっ!」

逃げ惑う人の波が人を圧迫し、街は混沌の支配する地獄と化した。

「助けてくれえっ…助けてくれえっ!」

カレー屋（さつき亭）店内

カレー屋（さつき亭）はボルトライガー・大門 陸の行き着けの店で、数種類のカレーが選べる隠れた名店でもある。

「先輩!このカレーうまいっス!ボク こんなカレー食ったことないっスよ!」

「あつたり前だろ!ここのカレーよりうまいカレーなんかないって!」

小さな店内ではカレーを頼張るテストパイロットの少女 巽 勇とたつみ ゆう小さなテレビを見ていた大門 陸がいた。

「あゝなんか…俺も食いたくなってきたな!」

陸は勇の食べたている大盛りツナカレーを見つめた。

「それがいいっス先輩!一緒に食べましょう!」

和やかな雰囲気の中…その平和な一時を打ち消すかのように 電獣
携帯が鳴り響いた。

「巨大電脳怪人が現れた！大門 陸！今すぐそちらにガイアライガ
ーを送る！変身をしておいでくれ！」

「りっ 了解です！」

陸は携帯を握り締め、立ち上がった。

「くっ！またかよッ！…やるしかないか！」

陸は黄色いキャップを頭に被せ、店の外へと走り出した。

「あつ！待ってください先輩！…おじちゃん！お金は置いとくっス
！」

「勇！お前は民間人の避難誘導をやってくれ！このあたりにはシェ
ルターが多数あったはずだ！」

店の外に出た勇は、的確に指示を出して走り去った陸に一礼して走
り出した。

「りよ！了解っス！ 頑張ってください！」

GON基地 司令室内

司令室の中は緊張に包まれ、巨大モニターには崩壊した東京タワー
を踏み潰している異形の怪人が映し出されていた。

「謎の巨大電脳怪人に東京タワーが破壊され街全体がパニックに陥っている、この電脳怪人は今までのものとは全く違うタイプのようなだ」

火車司令官は今までの電脳怪人の画像と今回の電脳怪人…ツメウィングレイザーの画像をモニターに映し出させた。

「これは…この前基地にいた電獣 ウィングレイザーとか言うのに似てるな」

冷静にモニターを見つめる空矢の呟きに、海は頷いた。

「確かに…こんなに腕は太くなかったが似てるな」

俯く二人を前に火車司令官はモニターの電源を切り、制服のポケットからブロンズ製の鍵を取り出した。

「理由はどうであれ、我々はこの電脳怪人を倒さなければいけない！ 陸！海！…今こそ電獣を使うときだ！」

「了解です！」

「了解！」

二人を背に、火車司令官はモニターの中央に隠された鍵穴にブロンズ製の鍵を差し込み、その（扉）を開放させた。

「まだ80%しか完成していないが 電獣空母・ボルトマンモスを出撃させる！」

司令室の扉の向こうは 広さ千メートルほどはある巨大な格納庫であつた。

「ボルトマンモス…ここまで完成していたのか」

巨大な格納庫の中には 脚の無い巨大なマンモスのような電獣が静

かに佇んでいた。

「よし！いくぞホエール！変身だ！」

「分かってる！変身！ボル ホエール！」

二人はボルトマンに変身し、格納庫の中で静かに起動した電獣空母ボルトマンモスの中に乗り込んだ。

「電獣空母ボルトマンモス！エネルギーフィールド展開！」

司令官の叫びに反応し、巨大な電獣空母 ボルトマンモスは浮上し、エネルギーフィールドを発生させた。

「ハッチ開放！出撃せよ！電獣戦隊！」

開放されたハッチの向こうは巨大エレベーターになっており、ボルトマンモスは瞬時に地上に移送された。

「こいつが スカイコンドル」

ボルコンドルは甲板の上を移動し、ボルトマンモスの体の上に格納されているハゲワシ型の電獣、スカイコンドルに乗り込んだ。

「マリンホエール…頼むぞ！」

ボルトマンモスの体の中に格納されている鯨型の電獣・マリンホエールに乗り込み、ボルホエールは息を呑んだ。

「…急いでくれボルトマンモス もう時間が無い！」

ボルトマンモスはバリアーによって空気抵抗を減殺させ、ガイアライガーを超える凄まじい速さで空中を突き進んだ。

「数キロメートル先に敵の戦闘機の反応アリ 自動迎撃システム稼働！」

電獣空母ボルトマンモスの人工知能は数キロメートル先を飛んでいく増援らしき無数の戦闘機を捉えた。

「ボルトマンモスの人工知能か、任せた！やってくれ！」

「了解、90ミリバルカン発射」

ボルトマンモスは無数の戦闘機に一気に詰め寄り、マンモスの顔を模した艦首に装備されているバルカン砲の雨を降らせた。

『デンデーン！』

『デエエン！』

戦闘機は火花を散らして爆発し、残骸も残らないくらいに粉々になった。

「目的地に着きました、スカイコンドル、マリンホエール、出撃してください」

人工知能の無機質な声が響くと、二体の電獣は震えるように起動し、出撃した。

「スカイコンドル発進！」

真紅の鋼で作られたハゲワシは飛翔し、旋回をしながらツメウイングレイザーに向かって加速を始めた。

「マリンホエール！ 出撃する！」

小型水陸両用艇であるマリンホエールは大地に降り立ち、ホバーによってビルの谷間を加速した。

『くくくく！ 来たか 電獣戦隊 ボルトマン！』

ボルトマンモスはバリアーによって空気抵抗を減殺させ、凄まじい速さで空中を突き進んだ。

「数キロメートル先に敵の戦闘機の反応アリ 自動迎撃システム稼働！」

電獣空母ボルトマンモスの人工知能は数キロメートル先を飛んでいる増援らしき無数の戦闘機を捉えた。

「ボルトマンモスの人工知能か、任せた！やってくれ！」

「了解、90ミリバルカン発射」

ボルトマンモスは無数の戦闘機に一気に詰め寄り、マンモスの顔を模した艦首に装備されているバルカン砲の雨を降らせた。

『デンデーン！』

『デエエン！』

戦闘機は火花を散らして爆発し、残骸も残らないくらいに粉々になった。

「目的地に着きました、スカイコンドル、マリンホエール、出撃してください」

人工知能の無機質な声が響くと、二体の電獣は震えるように起動し、出撃した。

「スカイコンドル発進！」

真紅の鋼で作られたハゲワシは飛翔し、旋回をしながらツメウイングレイザーに向かって加速を始めた。

「マリンホエール！ 出撃する！」

小型水陸両用艇であるマリンホエールは大地に降り立ち、ホバーによってビルの谷間を加速した。

『くくくく！ 来たか 電獣戦隊 ボルトマン！』
燃え盛る街の中央に、そいつはいた。

「ウイングレイザー！それがお前の お前の望んだ姿だったのか？
！」

炎の中でせせら笑う巨大電脳怪人の周囲を旋回するスカイコンドルのкокピット内で、ボルコンドルは叫んだ。

『ああそうだ…！しかし…今の私は ウイングレイザーではない！』
翼を展開させたその悪魔は、一気に地上から離れて炎が立ち上る空へと飛翔した。

『大幹部 ツメウイングレイザーだ！』

ツメウイングレイザーは飛行しながら巨大な腕を振り上げて、加速しているスカイコンドルに向かって一気に振り下ろした。

「なっ？！ツメウイングレイザーだとっ？！うがああっ？！」
スカイコンドルは振り下ろされた腕の衝撃波により吹き飛ばされ、大地に叩きつけられそうになった。

「アフターバーナー点火！レーザービーム発射！」
大地に接触する寸前に翼をはためかせて姿勢を制御し、スカイコンドルは瞳の部分から高熱のレーザーを放射した。

『くくくっ！ははははッ！効かぬわッ！』

ツメウイングレイザーの巨大な両腕が生み出す衝撃波はレーザーすらも滅殺させた。

「なにっ?!」

「ホエールミサイル 発射！」

マリンホエールの腹部から数十発のミサイルが放射され、空を駆けるツメウイングレイザーに雨のように降り注いだ。

『効かぬッ！効かぬッ！ 効かぬわああああッ！』

ツメウイングレイザーは両腕でミサイルを受け止め、瞳から熱線を放射した。

「くっ 当たるっ?!」

ボルホエールが叫び、マリンホエールは熱線の光に包まれた

「があああっ?!」

熱線はマリンホエールの特殊塗料によって滅殺されたが、それでもマリンホエールは衝撃により吹き飛ばされた。

『はははははッ！終わりだ！ 電獣戦隊！』

「まだだっ！」

ツメウイングレイザーが鋼の鯨に追撃を試みようと羽ばたいたその瞬間、戦場と化したその大地に 奴の声が響き渡った。

「スカイコンドル マリンホエール ガイアライガー 電獣は三体で真の力を発揮できる…」

ビルの屋上に立つ黄色いマスクの戦士 ボルライガーは叫び、電獣携帯を天に翳した。

「電獣携帯起動 来い！ガイアライガー！」

電獣携帯から発射された指示を受け、空を駆ける電獣空母ボルトマンモスの体は2つに開き、内部から鋼の獅子 電獣ガイアライガーが現れた。

「ガオオオオッ！」

鋼の獅子は雄叫びと共にボルトマンモスから飛び降り、人型形態への変形をしながら落下した。

「ガイアライガー！搭乗！」

ボルライガーは轟音を響かせて大地に降り立った人型形態のガイアライガーに乗り込み、コクピット内に電獣携帯をセットした。

「ボルライガー！ ツメウイングレイザーは桁違いのパワーだ！合体して対抗するしかない！」

ボルコンドルはスカイコンドルを旋回させながら、ガイアライガーへ接近した。

「分かってるって！ボルホエールは大丈夫か？！」

「大丈夫だ！いつでもやれるぜ！」

ガイアライガーからの通信を受け、ボルホエールは鋼の鯨を二体の電獣へと接近させた。

「よし！電獣合体だ！セミオートコントロール！」

『なっ！何をする気だ？！』

ボルコンドルが叫び、三体の電獣は一斉に駆け出した 天空電獣・大海電獣・大地電獣の動力源が唸りをあげ、三つの電獣は飛び上がった。

「見せてやる ツメウィングレイザー！これが俺達の 団結の力だ！」

炎を纏って空へと飛翔したスカイコンドルの中で、ボルコンドルは叫ぶ

勝つために

平和を守るために。

人の心と、命を守るために。

今、三つの電獣が一つになるのであった。

【次回予告】

鋼の巨人が大地に降り立ち、鋼の武具が宙を切り、稲妻の一撃が嵐を呼ぶ。

喰いちぎれ、打ち砕け、悪を切り裂く剣となれ。

【第九話 大電獣、起動】

戦え、ボルトマン。

炎となった大電獣は 無敵だ。

第八話 三十分二十七秒の決戦！（後書き）

ついに次回は巨大ロボット戦です。

果たして 電獣戦隊は勝利することができるのでしょうか

第九話 大電獣、起動（前書き）

大電獣。

それは人型形態のガイアライガーをベースに、スカイコンドルとマリンホエールを合体させた戦闘用合体ロボットである。

鋼の武具で敵を裂くのだ。

第九話 大電獣、起動

三つのコクピット内は、ジェットコースターのように激しく振動していた。

「マリンホエール！チェンジ！」

ボルホエールが起動認証コードを発音すると、鋼の鯨の体は真ん中から頭と体に分裂した。

「コネクトだ！」

ボルライガーは振動するコクピットの中でブレーキを踏みながら、素早くコンピューターのボタンを押した

「ああ！やるぞ！」

その難解な一つ一つのプロセスの一つでも欠くと合体が失敗してしまうとあって、ボルホエール・海の表情は強張っていた。

「よしっ！次はスカイコンドルだ！」

マリンホエールの頭と体部分を肩アーマーとして装備したガイアライガーは躍動し、頭部であった獅子の顔は胸部分に可動した。

「スカイコンドル！ファイヤーコネクト！」

ボルコンドルのかけ声と共に、炎を纏った鋼のハゲワシがガイアライガーの首部分に合体し、目と放熱ダクトを出現させ合体ロボットの（頭）の部分となった。

「エネルギーチューブ直結、バリア装甲展開 武器射出システムと連動」

合体ロボットの肩アーマーとなったマリンホエールの中で、ボルホエールは複雑な操作を冷静にこなしていた。

「完成！大電獣！ボルトカイザー！」

その合体ロボット ボルトカイザーは大地を踏みしめて、一気に駆け出した。

『ぐっ！合体しただっ？！』

ツメウイングレイザーは驚いた、かつて人間であった頃に見たテレビで見たような、そんな合体であった

「すごい！こいつの馬力 ガイアライガーの三十倍以上の馬力だ！」

ボルライガーは驚きながら、無数のコンピューター類を操作した

「倒せる このボルトカイザーなら 倒せるぞ！」

ボルホエールは振り切れていくメーターを見つめ、冷静に出力を制御していた。

「ボルトマンモス！！ボルトメーザーを射出してくれ！」

ボルコンドルが叫ぶと、空中にスタンバイしていた電獣空母ボルトマンモスがその声に反応して、体部分の格納庫から日本刀 ボルトメーザーを射出した。

「よしっ！いくぞツメウイングレイザー！」

ボルトカイザーは射出されたボルトメーザーを片手に跳躍し、飛翔するツメウイングレイザーに向かって接近した。

『なっ？！なんてジャンプ力だ！』

「でえええい！」

肉迫し、ボルトメーザーの一撃を繰り出すボルトカイザー その一撃はあまりにも速く、重かった。

『うぐああっ?!』

ツメウイングレイザーは巨大な翼を全面に展開してボルトメーカーの一撃を防いだ だが。

『うがあああっ?!』

その一撃はツメウイングレイザーの分厚い翼を切り裂き、その胸には刀傷が残った。

『ぐあっ!』

翼を失ったツメウイングレイザーは炎に包まれていく大地に落下し、凄まじい轟音が響き渡った。

「ボルトコンドル!今のうちに火災を止めるぞ!冷凍光線ボルトフリーザーを使え!」

ボルトホエールはエネルギーをボルトカイザーの肩アーマーと化したマリンホエールにエネルギーを収束させた。

「ああ分かつてる!ボルトフリーザー!」

ボルトカイザーはマリンホエールの顔部分である左の肩アーマーを取り外し、その口部分から冷凍光線を街に向かって放射させた。

「すげえ 街中の火が消えていくぜ!」

次々と消えていく炎を見つめて、ボルトライガーは大電獣ボルトカイザーの力に驚いた。

『ぐっ 戦闘中に消火活動とは!』

しかしその背後では倒れていたツメウイングレイザーが起き上がり 巨大な腕を振り上げていた。

『私を バカにしているのかああ!』

振りおろされた腕から発生した衝撃波は大地を削りながらボルトカイザーの背中へと加速した。

「ボルコンドル！後ろがから空きだぞ！」

ボルホエールの叫びと共に、三つのコクピット内にけたたましい警告音が鳴り響いた。

「くっ！ボルティック・シールド！」

衝撃波を感知したボルトカイザーはマリンホエールの頭を肩に戻し、ボルトマンモスから射出された盾を構えて反転した。

「エネルギー返し！」

ボルティックシールドが受け止めた衝撃波のエネルギーは中央部分に収束し、ツメウイングレイザーに向かって放たれた。

「ぐああっ?!」

「今だ！ボルトメーザー、エネルギー最大！」

よろめくツメウイングレイザーに向かってボルトメーザーを構えるボルトカイザー、その刃の刃先には分子一個分の薄さの高密度エネルギーが収束しており、切れないものは無い。

「くらええええっ！」

体勢を立て直したツメウイングレイザーに向かって振り下ろされた刃、鋭い刃先の光を見つめた彼は 生まれて初めて（死）を感じた。
『なああああ？私が 死ぬ?!』

しかし次の瞬間、ボルトマンにとっても ツメウイングレイザーに

とっても予想外の事態が起こった。

『危ないデンノー！ツメウイングレイザーさまあああつ！』

『なにっ?!』

突如現れた巨大な電腦怪人　ハチデンノーはツメウイングレイザーを突き飛ばした。

『ツメウイングレイザー様　無事でよかった　ぐはア！』

レーザーにより切り裂かれ、大量の血を噴出しながら倒れるハチデンノー　その姿にツメウイングレイザーは驚き、駆け寄った。

『なぜだ　なぜだハチデンノー！なぜ　こんなことをした！』

ふるふると震え、まさしく（虫の息）状態のハチデンノーをツメウイングレイザーは激しく叱責した　罪悪感のようなものを感じながら。

『ツメウイングレイザー様…いや　先輩は人間だった頃から　こんなどうしようもない俺の上司だった　だから　役に立ちたかったです　！』

ハチデンノーとウイングレイザーは人間の頃、同じ会社の上司と部下であった　しかし会社は半ば詐欺のような交渉により買収され彼らは職を失ってしまい、ドクター・ソスに勧誘されたのであった

『くっ　ハチデンノー！　ハチデンノおおおおッ！』

電腦怪人が涙を流した…

血も涙も無い作戦ばかりしていた彼らであるが、同胞の後輩の突然の死によりツメウイングレイザーの感情は爆発した。

「ハチデンノー お前！」

ハチデンノーの壮絶な死に様を見て、ボルコンドルは叫んだ 説得に応じなかった彼が まさかこんな形で死を迎えるとは思っていなかったたのであろう。

「くっ！ あんな惨い作戦をしてきた電脳怪人が 人間を語るな 電脳怪人があ！」

ボルホエールはエネルギーを再チャージを開始させ、ボルトメーザーを再び構えさせた。

『電獣戦隊ボルトマン！…よくも よくもやってくれたなああああ あ！』

ツメウイングレイザーは亡骸を飛び越え、怒りを込めて拳を構えながら走った。

『これが ハチデンノーの仇だああッ！』

ツメウイングレイザーの拳はハチデンノーの亡骸からエネルギーを吸い取り、ギラリと光り輝いた。

「ボルトメーザー！」

パキンという音が響き、ツメウイングレイザーの拳にボルトメーザーが突き刺さった。

「なにっ?! ボルトメーザーが!」

ツメウイングレイザーは腕に突き刺さったままのボルトメーザーをボルトカイザーから奪った。

『この刀が この刀がハチデンノーを殺したのか! 愚直でミスばかりだったか それでも真面目だった奴を!』

ツメウイングレイザーは両方の腕に力を込め、光を失ったボルトメーザーを叩き折った。

「な?! ボルトメーザーが折れた?!」

驚くボルトライガー、当たり前である 発出撃のボルトカイザーの必殺剣が折られてしまったのだから…

「ボルトメーザーはボルティック合金製の刀の刃先に分子一個の高密度エネルギーを通したものだ エネルギーが切れたボルトメーザーなら そりゃ折れるさ」

ボルホエールはモニターに映し出された映像とボルトマンモスのデータを元に、まだ使用できる武器を選択した。

「ボルコンドル! ボルピックランスを使え!」

ボルトカイザーは駆け出し、ツメウイングレイザーの攻撃をかわして走った。

「わかった! ボルトマンモス! ボルピックランスを射出してくれ!」

ボルトカイザーは跳躍し、空中に浮遊しているボルトマンモスからボルピックランス射出された長槍を受け取った。

「ボルピックランス!」

「死ねえええいッ！」

長槍を振り回しながら大地に降り立ったボルトカイザーを前に、ツメウイングレイザーは怒りに身を任せて突進した。

「ツメウイングレイザー　なぜ　なぜ部下を想う優しさをもったお前が…　悪魔に魂を売り渡したんだ！」

ボルトカイザーによって投擲されたボルピクランスはエネルギーに包まれて加速し、防御を試みたツメウイングレイザーの腕に突き刺さった。

「ぐっ…貴様には　わかるまい　貴様には！」

腕に突き刺さったボルピクランスの勢いは止まらず、両腕を貫通して胸へと突き刺さった。

「がああっ！」

ツメウイングレイザーは爆発と共に光を放ちながら消失し、ボルトカイザーはその光を背に歩き出した。

「強い　相手だった」

ボルコンドルはシートにうなだれながら瞳を閉じた。

「奴ら　勝手なことばかり　言いやがって！」

コクピットの壁を叩きながら、ボルホエールはダメージチェックを始めた。

「あっ！みんな！まだ街で火災があるぜ！」

ボルライガーがモニターを見ると、そこにはまだ燃え盛る炎が揺れていた。

「よし…消火活動を再開する…」

「了解、ボルトフリーザーを再発射させる」

遂に起動した大電獣。

そして上司を守るためにその身を盾にしたハチデンノー…。

そして、光と化したツメウイングレイザー…

なぜ、善良だった彼らはドクター・ソスの元へと走ってしまったのだろうか。

そして、ツメウイングレイザーの独断行動を黙認したドクター・ソスの真の狙いとは一体何だったのであるのか…

様々な人々の想いを紡ぎながら、戦いは続く

果たして、電獣戦隊とは何なのであるのか。

ボルコンドル、ボルホエール、ボルライガーの各武器や必殺技、電獣の機能や武器を徹底解説。

そして 全てが始まる。

【第十話 電獣戦隊のすべて（総集編）】

それは、終わりの始まり。

第九話 大電獣、起動（後書き）

次回は電獣戦隊の説明になります。
そして、話が進んでいきます。

等身大戦闘が減らないようにしなければ
（汗）

第十話 電獣戦隊のすべて（総集編）（前書き）

（注）今回は総集編なので、ストーリー的な進展はありません。

第十話 電獣戦隊のすべて（総集編）

電獣戦隊：それは、防衛組織GONが日本防衛隊（自衛隊のようなもの）の精鋭を集めて結成した組織である

（電獣）というものは人類が作り上げた機械の獣であり、宇宙でしか採取することができない鉱石から作れないボルテック合金製である。

人口知能が備わっており、ある程度自律して戦うことが可能である（電獣は、動物と模した間接とこの人口知能により野性的な動きが可能である）。

電獣戦隊の隊員達はボルスーツに身を包んで戦う。

このボルスーツというのはボルテック合金が多く含まれており、大型トラックに牽かれても中の人間は無傷である（吹き飛ばが）。

武器は変身アイテムでもある電獣携帯（銃に変形する）。

ボルコンドルはボルテック合金製の日本刀を専用を持っているが、GONでは現在、他の二人の専用武器も開発しているようだ。

（どんな武器がベストなのかわからない状態ではあるが）

【ボルトボール】

電獣戦隊の等身大時の最強必殺技。

三人が蹴り合うことにより内部にエネルギーを凝縮させ、敵の欲するものに変形して相手が油断しきった時に爆発させて敵を粉碎する。苦手なものになる時もある（一話参照）

【十文字 空矢】

ボルコンドルに変身する男性。

元航空防衛隊員、真面目で責任感が強い。

バスフィッシングが趣味であるが、全く釣れない。

【西川 海】

海上広域防衛隊出身、クールな性格であるが、仲間を思いやる気持ち強い。

その反面、電腦怪人を恨む気持ちは誰よりも強い。

趣味は泳ぐことと家庭菜園である。

【大門 陸】

元陸上防衛隊員。

活発な男であり、感情的になりやすい。カレーが好物である。

趣味は玩具収集であるが、他の隊員には内緒である。

【火車 広】

GON関東支部の司令官にして、電獣戦隊の設立者。

駄菓子屋（磯八）の店長でもある。

【巽 勇】

GONの関西支部でガイアライガーのテストパイロットをしていた少女。

高卒ですぐさまGONに採用されたのは、彼女が天性の努力家であ

るからである。

一人称はボク、語尾にはスが着くことが多いが、場所を弁えることも可能だ。

趣味はぬいぐるみ収集。

【天空電獣スカイコンドル】

決戦兵器一号。

レーザーが主武装であるが、一応バルカンも付いている。

また、恐るべきはその加速力で、バリアーを展開すれば亜高速飛行も可能である。

また、ボルトカイザー時には頭部に変形している。

【大海電獣マリンホエール】

決戦兵器二号。

消火作業も可能である水陸両用戦闘艇。

無数の対電脳怪人用ミサイルを装備しており、消火作業用のフリーザー光線で敵を凍らせることも可能である。

ボルトカイザー時には肩アーマに変形する、

ボディが顔の部分とヒレから尻尾の部分に分離し、ミサイルが積んであったスペースに人型形態のガイアライガーの肩を挟むといった簡単な変形である。

【大地電獣ガイアライガー】

噛みつく、引き裂くなどの攻撃を得意とする決戦兵器三号。頭部である獅子の顔の口部分からバリアーを発生させて加速する。

人型形態に変が可能で（顔面は獅子だが）汎用性と戦闘能力は極めて高い。

武器は牙、爪、そして尻尾が変形した長槍ライガージャベリンである。

大電獣のボディを構成しており、構造的に堅牢である。

【大電獣ボルトカイザー】

全長56m

スカイコンドル・マリンホエール・ガイアライガーの三体の電獣が合体した無敵のスーパーロボット。

強力なクローを用いた格闘戦を主体に、多彩な武器を母艦から取り出して戦う。
ボルトマンモス

【基本携帯武器】

スーパーバルカン

クロー

イナズマレーザー

ライガーバイト

【特殊携帯武器】

ダガー

ボルトメーザー

ボルトシールド

ボルピックランス

チエーンボルト

ボルトアックス

ボルトライフル

【必殺技】

ボルトメーザー

【電獣空母 ボルトマンモス】

三体の電獣を輸送する巨大な空母。

マンモスを模した頭部と体で構成されており、体部分にガイアライガーとマリンホエールとボルトカイザー用の武器を、体部分の甲板にスカイコンドルを搭載する。

まだ80パーセントの完成度で、脚部にあたるパーツが無い。

武装はバルカンのみである。

以上が電獣戦隊の情報である。

この光が人の心と命を守り、世界を照らしてくれることを切に願う。

【次回予告】

光が世界に生まれた時、闇が生まれたのか。

それとも。

闇が世界に生まれた時、光が生まれたのか。

電脳軍イレイズ。

この闇が世界にもたらすものは、何なのであろうか。

未だに意図のわからない残虐行為を繰り返す、彼らの真の目的とは

【次回 第十一話 その闇、電脳軍】

そして、始まる

第十話 電獣戦隊のすべて（総集編）（後書き）

次回は狂気の電脳軍イレイズの解説になります。

はい（苦笑）総集編です

第十一話 その闇、電脳軍（総集編）（前書き）

今回も総集編です。

電脳軍イレイズの作戦・電脳怪人・謎を総特集してみました。

第十一話 その闇、電腦軍（総集編）

【電腦軍イレイズ】

道を誤った狂気の博士ドクター・ソスが作り上げた秘密組織。

通常の人間に強化型電腦を移植して誕生する【電腦怪人】が戦闘を担当する。

その中でも最も知性と戦闘能力が高いウィングレイザーとキバレイザーが幹部であり、前者は作戦を、後者は電腦怪人の練成を担当している。

【電腦怪人 大百科】

【電腦怪人】

陸上戦車を超える装甲と汎用性、空中へりを超える速度と機動力を誇る（かつて、人間であったもの）。

感情が爆発したり、莫大なエネルギーを注入されると巨大化する。

【フネデンノー】

船の頭部をもつ電腦怪人。

船のように水上を加速する。

【武器】特になし。

【参加作戦】大型タンカー強奪作戦（物資強奪）

【死因】ボルトサイクロン・氷山の一角に直撃して死亡した。

【ハチデンノー】

ススメバチと人間を足して2で割ったような形をしているが、スマートではない。

右手にススメバチの腹と尾状の武器があり、毒針を発射する。かつて人間であったころには会社員であつたらしく、ウィングレイザーの部下だつたらしい。

電獣戦隊が変装したデンデンにジュースをおごるなど、部下には優しい。

【武器】毒針

【参加作戦】宗教勧誘作戦（怪人生産）

【死因】

巨大化後、ボルトメーザーからツメウィングレイザーを守って死亡。

【カラスデンノー】

大量に作られた電脳怪人。

【武器】嘴・鋭い羽・手投げ式大型爆弾。

【参加作戦】東京大爆破作戦（大量殺戮）

【死因】ボルトサイクロン・生ゴミを食べ、内部から破壊された。

【ケイタイデノノー】

巨大なコンピューターと連携することで全国のアドレスを探索することが出来る個人情報保護法違反の電腦怪人。

槍でボルコンドルの日本刀を圧倒していたので、戦闘力は高いと言えると思う。

今のところ、電獣戦隊が等身大で戦った最後の電腦怪人。

【武器】三つ叉の槍

【参加作戦】死ぬ死ぬメール送信作戦（大量殺戮）

【死因】ボルトサイクロン・電子レンジの中で破壊された。

【シンカンセンデノノー】

新幹線の頭部をもった電腦怪人。

地上での加速力は高く、民間人を精神的に追い詰めて電脳軍の構成員になるように脅迫する残虐な性格の持ち主。

しかし、強きに弱く、作戦が失敗したらいきなり恐怖に脅える情緒不安定な電腦怪人。

【武器】目から破壊光線を放つ。

【参加作戦】新幹線大脱線作戦（大量殺戮及び人員の勧誘）

【死因】ガイアライガーの鉄拳・ボルトブレイカーにより爆発。

【作戦参謀 ウィングレイザー】

他のB級電脳怪人とは一線を画すA級電脳怪人。

様々な作戦を発案する知能をもち、ドクター・ソスによって比較的初期に作られた電脳怪人である。

彼が懲罰室に籠もっていた時の作戦も、彼が温めていた作戦である。

人間であつたころから責任感が高く、責任をとるために独断で実験室のカプセル内に封印されていたツメレイザーを取り出し、融合を果たした。

【武器】両刃の剣

【参加作戦】宗教勧誘作戦

【死因】この姿では死んでいない。

【戦闘員養成担当 キバレイザー】

伸縮自在の鋭い牙をもつ強力な電脳怪人、ウィングレイザーよりも戦闘能力が高い。

【武器】斧 刀 鎖 槍 銃

【参加作戦】無し

【死因】死んでいない。

【轟腕幹部 ツメウイングレイザー】

ウイングレイザーがツメレイザーと融合した姿。
東京タワーのエネルギーを吸い取り巨大化した。
巨大な腕による攻撃が強く、衝撃波で遠くの敵も粉碎する。

【武器】腕 牙 羽

【参加作戦】無し

【死因】

【戦闘員 デンデン】

最も多くの作戦に参加している戦闘員。

多彩な武器を持っているが、使いこなせないでいる。

【武器】様々

【参加作戦】様々

【死因】様々

【戦闘機】

どこで入手したのかは不明だが、ツメウィングレイザー戦にて現れた戦闘機。

デンデンが操作している。

【武器】バルカン

【参加作戦】無し

【死因】バルカン

【地中要塞 ドリルガイア】

電脳軍イレイズの第二の基地。

戦闘機と同じく、イレイズがどこで手に入れたのかは不明である。要塞部分よりも巨大なドリルが装備されている。

【総統 ドクター・ソス】

常に冷ややかな笑顔の仮面を被った男、常人の1、4倍の身長をもつ巨人でもある。

電脳怪人は彼の指示の元に動き、残虐非道な作戦を実行する。

移動機能、ミサイル発射機能とバリアー機能をもった椅子に座っており、万が一の事態にも対応している。

…
…

電腦軍イレイズの目的は何なのであるうかは以前不明である、残虐行為を繰り返す彼らの真の目的とは…一体

ツメウイングレイザーが倒され、電獣戦隊が強大になっていく今、電腦軍は揺れている。

それが分かる日は、近いのかもしれない

【次回予告】

同胞を失ったキバレイザーは地球に落下した彗星を既存の電腦怪人と融合させ、スイセイデンノーを作り上げた。

スイセイデンノーの必殺技のスーパーマイナスイオンが炸裂する時、一つの学校が崩壊した。

電獣戦隊とスイセイデンノーの激しい戦いのさなか、スイセイデンノーを呼ぶ声が響く…

遠い故郷の宇宙から響く

【第12話 彗星に愛をこめて】

星の光は宇宙の宝か、はたまた悲しみの墓標か

第十二話 彗星に愛をこめて（前書き）

宇宙をさまよう彗星にも…様々な想いが込められている

時にそれは人を傷つけ

時にそれは人を癒やす

第十二話 彗星に愛をこめて

【お詫び】

電獣戦隊ボルトマン、【第十二話 彗星に愛をこめて】は電腦怪人カードの表記に端を発した諸問題によって【欠番】とさせていただきます。

これからも、【電獣戦隊ボルトマン】をよろしくお願いします。

【次回予告】

それは、不幸な出来事……だったのかもしれない。

瀕死状態でデンデンに回収されたツメウイングレイザーは、創造主により

「不要」

と一蹴されてしまった。

彼は思考の末、研究室で眠っていたもう一体のA級電腦怪人と融合

ツノレイザー

し、更にキバレイザーを打ち負かし、最強の電腦怪人となる。

だが……それは悲劇の始まりでもあった、

【第十三話 創造主は死んだ】

怒りの瞳に映るものは

-

.....

.....

.....

.....

第十二話 彗星に愛をこめて（後書き）

みなさんすみません、色々な意味で。

第十三話 創造主は死んだ（前書き）

…そして、悲劇は連鎖する……

第十三話 創造主は死んだ

…わた…私は 生きているのか

『ぐう…ぐうはあ！』

その四肢を失った丸焦げの（何か）は吐血し、蠢いた。

『…ぐ…どこだ ここは』

殆ど無くなってしまった視界には、夜の空を突くようにビルが建っていた。

『…地獄…か』

『デン！？ デンデン！』

何かが叫んだ、しかし分からない もう私はだめかもしれない

「…何を する ！？」

誰かが私を抱えあげた 私はどうなるのだろうか 解剖でもされるのか

『デン…！』

車の中に入れられ、私はひんやりとしたどこかに連れられた。

『…ここは どこだ？！』

『ドリルガイアーの中だ、ツメウィンググレイザーよ』

この声は…創造主の　ドクター・ソス様の声だ…私は助かったのか…

声を出したいが　もう呻くことしかできないようだ…なんと悲しき
ことか

『もういいデンデンよ、ツメウイングレイザーを火葬する　こいつ
はもう使えぬ』

…ん…何だと…火葬だと　？

『デン…デン?!』

『早く火葬してやれ…苦しんでいるではないか』

私は…死ぬのか…いや…何故だ…私はまだ死にたくは無い

『ぐっ!がっ!』

嫌だ、死にたくは無い…私は絶対に死にたくない　!

ここまで力を手に入れたのに死にたくは無い

『…まだ　動けたか』

ドクター・ソス様……いや、今私を殺そうとしている男の声が響いた
ふざけるな ふざけるな ふざけるな！

『あがああああああッ！』

叫んだ、もう意味など無かった……私は体を動かした まだ、指が千切れていた右腕が付いていた。

『デンッ?!』

恐れをなしたそいつ……デンデンを後目に、私は残された腕と反対側の肩を使って這い出した……思ったより 速く走れるじゃないか。

『あがあああああ！』

這った、恐ろしく速い速度で 基地の中の冷たい床の感触ももう感じていなかった。

……生きてやる

……生きて……全てに復讐を

……そのためには（力）が必要だ

『……』か……あ
『』

研究室……ここに……ここにあるはずだ……ツノレイザーが……

机やカプセルなどにぶつかり血が吹き出た：構わない　もう痛くは無い

☞
：
が
あ
あ
ッ
☞

一際巨大なカプセルがあった……私と同じ匂いをする

ぶんツ！

殴りつけて砕いたその中に……そいつはいた

…ツノレイザー

155

巨大な腕でそいつを掴むと、私はそいつを喰らい始めた… 電腦は…

あつた

： 電脳を自らの脳天に入れた： 常人であればもう、死んでいるであ
ろう痛みだ

『があああつ！』

もう…意識が保てなかった…私は生まれ変わるのだ…死にはしない
！！

『私は…私は！』

眩い光がツメウイングレイザーを包み込んだ…その死体のよう
な体はボコボコと変質を始め、更なる異形の姿へと変わっていく

『私は…！！…我は…我が名は…！！』

『ツメウイングレイザー？！ お前…生きてたのか？！！』

光と共に嵐が巻き起こる研究室内に入り込み叫ぶキバレイザー、し
かし 次の瞬間。

『ぐあつ！何をするっ？！ツメウイングレイザー！？』

『…その名で 我を呼ぶな！』！

変質していく（それ）から伸びた大木のような腕がキバレイザーの
体を掴み、じわじわと吸収していく

『我はサタン！…サタン・イレイズ！』

（それ）は完全にツノレイザーとキバレイザーを吸収していた…

…サタン…神への反逆者

『くくくっ！力が…力が漲るぞ！』

基地の廊下を歩くサタン・イレイズ…それはあまりにも荘厳で、凶悪な波動を放っていた…

『…お前は…ツメウイングレイザーなのか…？』

総統室には、ドクター・ソスだけが玉座に座っていた…

『ついに…この時が来たのか』

その呟きは、誰にも聞こえなかった。

『我はサタン！ サタン・イレイズ…！今、創造主を超え……人に世界に 全てに復讐を果たすのだ！』

『ぐっ！何をつ！』

ドクターソスは玉座のボタンを押し、その内部に搭載されている無数のミサイルを発射させた。

『がははははっ！効かぬ！効かぬわ！』

無数のミサイルはサタン・イレイズの放つ波動によって誘爆し、虚しく炸裂した。

『消えろ…ドクター・ソスよ！』

『ぐっ？！』

サタン・イレイズの両腕がドクター・ソスの体を掴み、万力のように潰していく

『電腦軍イレイズは我に任せろ…わけの分からなかったお前より…上手くやってみせるさ！』

ドクターソスの体は玉座ごとミンチのように潰され、常に冷ややかな笑顔であった仮面が剥がれ落ちた…

『…人間だったか』

生首と化したそれは、人間のものではあった…

『…次は…電獣戦隊ボルトマンを消さなければな…奴らは我の復讐の邪魔だ…！』

翼をはためかせたサタン・イレイズは総統室の中で思案を始めた既に彼は、ドクター・ソスを超える力と頭脳を携えていた。

生首を蹴り上げ、サタン・イレイズは再び研究室内へと歩き出した。

『…まずは…組織の改革が必要だな…』

廊下を歩くサタン・イレイズの横を、デンデンが横切った。

『デンデンっ！？』

『デンッ？！』

己を凝視したデンデンを掴み、サタン・イレイズは研究室内に入った。

『…一つの体に電腦を2つ…更には3つ移植すれば 電腦怪人は遙かにパワーアップができる』

サタン・イレイズは一体のデンデンの脳天をかち割り、内部から電腦を掴みだした。

『デンっ？！』

サタン・イレイズは同胞の壮絶な死を前に戦慄するもう一体のデンデンに電腦を差し込み、ほくそ笑んだ。

『…見ている電獣戦隊…我は貴様達を完全に粉碎し…全ての人間に恐怖と苦しみを与えてやる ！！』

変質していくデンデンを前に悪魔が吼える…力を手に入れた彼が欲するのは…邪悪で凶暴、かつ忠実な下部であつた…

『我が作り出す新たなイレイズ……………（ネオ・イレイズ）…を率いて！』

サタンイレイズはボルトマンの三色の戦士のもがき苦しみ死んでいく姿を想像し、堪えきれずに笑った…

『ははははっ　！はーっはっはっは！』

狂気の博士を超えた悪魔、サタン・イレイズの繰り出す軍政　ネオ・イレイズに、電獣戦隊は勝てるのであろうか？！

例え相手が強大であろうとも

人の心と命を守れ！

電獣戦隊ボルトマン！

【次回予告】

創造主を手にかけた悪魔が叫ぶ。

全てが憎い、全て死ねよ、と。

平和を愛する戦士が叫ぶ。

命を捨てても全てを守る、と。

狂気と愛がぶつかり合う狭間で、無垢な命が散っていく…

【 次回 第十四話 サタンの恐怖 】

サタン・イレイズの飲む薔薇の紅茶は苦い

第十三話 創造主は死んだ（後書き）

次の更新は二週間後を予定しています。

これからも電獣戦隊ボルトマンをよろしく願います。

作品のご感想やご質問も参考になりますのでお待ちしております。

第十四話 サタンの恐怖！（前書き）

混沌をもたらす闇。

希望をもたらす光。

新たなる闇と三つの光が激突する。

その時は、今。

第十四話 サタンの恐怖！

ドリルガイアー内

あの惨劇から…既に、二週間が経とうとしていた

『さて…そろそろだな』

暗い実験室の中 新たなイレイズを率いるサタン・イレイズは、その巨大な腕の腋から生えている手で新たな電脳を製造していた。

『サタン・イレイズ様！今回の作戦は どのようなものなのでしょう？』

サタン・イレイズの背後で跪く高僧のような風貌の男 彼はサタン・イレイズの電脳移植によって誕生した電脳怪人の幹部^{ゾール}である。

『ゾールよ、焦りすぎではないか？ まず挨拶をせねばならぬ』

サタンイレイズは振り向きもせず、無数の小さな機械をピンセットと電気メスで小さなボールの形にしてい

くと、申しますと？』

察しの悪いゾールは、首を傾げた。

『電獣戦隊だ、奴らにまず新たなイレイズの力を誇示する必要がある！』

サタン・イレイズは完成した電腦を右手に持ち振り返り、その電腦を天井に翳した。

『…これが 力だ！』

光り輝く電腦を片手に歩き、跪くを横切るサタン・イレイズ…その先には 筋骨隆々といった感じの成人男性が実験室に縛られていた。

『 この男は戦艦を造船して排出された廃液で汚染された魚を食べ、後遺症が残り、今は 植物人間状態だ 』

サタン・イレイズは男の顔を見つめて目を細めて笑った。

『 その男の怒りの思念と、新たな電腦 それが新たなる力なのですね、サタン・イレイズ様！ 』

感嘆の声をあげるゾール、サタン・イレイズは成人男性に近づき、その脳天を裂き、電腦を移植した。

『 その通りだゾールよ ！ さあ…新生せよ人間！ 重電腦怪人第一号 センカンデンノーとして！ 』

男の体はムクムクと変質を始め…その無骨な顔は戦艦のような形に変化した

『 デンノー！ この体…力が 力がみなぎるぜ！ 』

センカンデンノーは拳を振り上げて叫び、お尻のスクリューを回転させた。

『 さあ行くぞ！ ゾール！ センカンデンノー！ 今こそ世界への復讐 』

を果たすのだ！」

『ははっ！』

ゾールは紫色の数珠を握り、歩き出したサタンイレイズの仰々しい背中を追った。

『デンノー！』

センカンデンノーも後に続く、その拳は人間への憎悪に震えていた。その直後に地中要塞ドリルガイアーは地上への移動を始めた。

『さあ 復讐の時だ…！』

要塞内に響く邪悪なる叫び声…今、新たなイレイズの戦いが始まる。

GON基地 事務室内

「ふああ 平和だなあ…」

書類を束ねる陸、二週間近く戦闘が無かったため、暢気な欠伸が洩れた。

「だが この二週間の間 電脳軍の動きが全く無いなんて…返って気味が悪いな」

空矢はソファーに座り、ルアーのロッド（竿）を静かに振っていた。

「全くだ、何かあると考えた方が自然だな」

海はコーヒーを片手に腕時計を見つめた、もう午後の三時を回っていた。

「あ…そういえば、ボルトカイザーのメーザーは直ったのかな？」

陸は書類を持ち上げ、二人を見つめて首を傾げた…

『早急に修復が開始されたと聞いたが…よくは分からないな』

ロッドを壁に立てかける空矢、先の戦闘で破壊されてしまったボルトメーザーはボルトカイザーの決定打であるため、電獣戦隊の誰もが気にしていたのであった。

「そうだったのか」

「あんなに簡単に折れちまうなんて 必殺剣じゃねえよお」

陸はため息を漏らしながら部屋を後にした。

「ボルトサイクロンで巨大化される前にとどめをさせばいいだろうが…別に必死になって電獣を使う必要ないぜ」

海は含み笑いをしてマグカップを洗い始めた。

「そりゃ…そうなんだけどな」

空矢は自らの椅子に座り、机に向かって書類を書き始めた 海の言うことは正しい、ただボルトサイクロンには決定的な弱点があった…

「…ボルトサイクロンか」

それを気にしているのは皆も同じではあるが

中関造船所は海上防衛隊で運用されている戦艦のエンジン部分を作る工場であり、最近になって工業廃液や不法投棄が問題視されてきたという、きな臭い会社である。

「よし、休憩にしようか」

「そうだな…」

洋服タンスよりも巨大な戦艦のエンジンを前に、中関造船所の技術者達はタオルで汗を拭き休憩を始めた。

「菓子でも食うかな…」

技術者達は工業区画を後に、給湯室へと向かおうとしていた…その時であった。

『デンノー！』

「なっ！なんだ？！」

工業区画の天井ガラスを砕き、センカンデンノーが巨大なエンジンの上へと降り立った。

『お前らさえ！お前らさえいなければ！』

「ばっ！化け物？！」

「助けて 助けてくれえっ！」

「ひいいッ？！」

異形なる怪人を前に恐怖に震える技術者、センカンデンノーは震える拳を振り上げて叫ぶ。

『デンノー！我が痛み 思い知れ！貫通弾！』

センカンデンノーは戦艦の形をした頭部の砲台から数発の弾丸を发射した。

「ひいあつ！」

「あぎやああつ?!」

弾丸は技術者の体を撃ち抜き、黒ずんだ血の雨を振らせた。

「ひつ!...警察に　いや...防衛隊に連絡しなければ!」

『...死ね　死ね　死ねえデンノー!』

「ひいいつ?」

次弾を装填し、エンジンから降り立ったセンカンデンノーは技術者を睨みつけた。

『待てセンカンデンノー、皆殺しにしては電獣戦隊は現れない　教えて生かせ　通報させるのだ』

黒き影が天井からエンジンの上へと降り立ち、逃げようとした技術者を撃ち殺そうとしたセンカンデンノーに語りかけた。

『デンノー、了解しました』

センカンデンノーは動きを止めて生き残った技術者を睨みつけた。

「ひいいつ　!はあああつ!?!」

技術者は腰を抜かしたようで　動けないようであった。

『　前言撤回だ、通報できない奴を生かしておく必要は　無い　!』

飛来した影　サタン・イレイズはエンジンの上で翼をはためかせて

大木のような腕を広げて笑った：それはとてつもなく邪悪で、恐ろしかった

『了解：　だ、そうだデンノー』

『ひいいつ?!』

技術者の男は手をバタバタと振りながら虚しい抵抗をした

『うぎゃあああああつ!』

『工場一つ破壊すれば　流石に奴らも来るだろう　くくくッ　!ははははははッ!!--』

陰惨なる悲鳴をかき消すように　工場内にサタン・イレイズは邪悪な笑いが木霊する

GON司令室

電獣戦隊の三人の戦士達は、緊迫した空気の流れる司令室に召集された。

「先程、東京都中関造船所で大規模な爆発が起こった　一刻を争う事態だ」

火車司令官はモニターに被害地域の地図を映し出し、三人の顔を見

回した。

「司令官、それは電腦軍イレイズが起こしたことなのですか？」

真剣な表情の空矢に質問され、火車司令官は頷いた。

「その可能性は非常に高い」

司令官は鍵を大型モニターの中央に差し込み、。

「ボルトマンモスは起動させてある 電獣戦隊出動せよ！」

「了解！」

空矢は火車司令官に敬礼すると赤いジャケットから電獣携帯を取り出した。

「電獣携帯！ボル コンドル！」

電獣携帯のボタンを押し、赤き空の戦士への変身を完了させ走り出した。

「許さないぜ イレイズ！」

海は目を細め、怒りに震える手で電獣携帯を取り出した。

「電獣携帯！ボル ホエール！」

海は電獣携帯のボタンを押し、青き海の戦士への変身を完了させ走り出した。

「ちつくしょう！ やっぱりなんかあったのか！」

陸は悔しさに震えながらもジーンズのポケットから電獣携帯を取り出した。

「電獣携帯！ボル ライガー」

陸は電獣携帯のボタンを押し、黄色い陸の戦士への変身を完了させ、駆け出した。

「ボルトマンモス、フルオートコントロール、エンジン全開、緊急発進！」

「助けてくれええええ！」

「ひいああああ！」

『逃がさん 逃がさんデンノー！拡散弾頭発射！』

逃げ惑う技術者と整備員達 しかし、その殆どが新たなる電脳軍の重電脳怪人・センカンデンノーによって狩られていく

『センカンデンノー 素晴らしい力ですな、サタン・イレイズ様！』
新たなるイレイズの幹部、ゾールは惨劇を前にして嬉々たる声を出した。

『早く来い電獣戦隊！早くしないと この罪深き者どもが全滅するぞ！はははははッ！』

サタン・イレイズは腕を組みながらその惨劇を静観していた、センカンデンノーは彼らの目の前で次々と人間達を刈り取っていく。

『死ねデンノー！』

センカンデンノーの砲頭が再び火を噴いたその時、天井から飛来した一本のダガーがその一撃を防いだ。

「待ていッ！」

雄々しい叫びと共に、穴の開いた天井から三人の影が光に照らされて飛来した。

『来たな 電獣戦隊！』

「ボルコンドル！」

「ボルホエール！」

「ボルライガー！」

三人の戦士達は叫びと共にアスファルトの床に着地し、腕を構えた。

「もう好きにはさせないぞ！電脳軍イレイズ！」

『地獄の一丁目によっこそ電獣戦隊！』

漆黒の翼を広げて電獣戦隊の前に飛来する悪魔…サタン・イレイズ

「なっ！なんだお前は！？イレイズの新しい幹部か？！」

ボルライガーは凶暴なフォームをもった見慣れぬサタン・イレイズを指差し、叫んだ。

『なんて失礼な口を聞く！このお方は新たなる電脳軍イレイズの総帥！サタン・イレイズ様である！』

仁王立ちするサタン・イレイズの横で跪くゾールが電獣戦隊を一括した。

「新しいイレイズだと？！」

叫ぶボルコンドル、そして首を傾げるボルライガー。

「お前はなんなんだよハゲ？！」

『私は裁きの大幹部・ゾールだ！ハゲでは無い！』

ゾールは怒りに立ち上がり、釈刺を振り回した。

「ハッ　！たかが幹部が増えたくらいで　お前らイレイズが俺たち電獣戦隊に勝てるかよ！」

ボルホエールは腕を組み、首を傾げてイレイズの電脳怪人を挑発した。

『電獣戦隊！この我が率いる新たなイレイズと、この我に倒された創造主が率いていたイレイズを比べるな！　行けい！センカンデンノー！』

サタン・イレイズは腕を振り上げて重電脳怪人センカンデンノーに指示を出した。

『デンノー！ぶち殺してやるぜえッ！』

センカンデンノーは両腕を振り上げてボルトマンの三人の戦士達に向かって走り出した。

「なにっ！創造主　ドクター・ソスを倒しただと？！」

ボルコンドル達は衝撃の真実に驚愕しながらも自らの武器を構え、迫り来るセンカンデンノーを睨みつけた。

「ボルコンドル！お喋りしてる余裕はないみたいだぜ！」

叫ぶボルホエールに向かって、高僧のような風貌の大幹部・ゾールが迫った。

『ハッハッハッ！貴様の負けは喋らなくても確定している！諦めろ

！
」

ゾールは錫杖を振り回し、鋭い一撃でボルホエールを突き飛ばした。
「ぐっ 強いっ！」

ボルホエールは立ち上がり、力強く両腕を構えた。

『ボルホエール！貴様の相手はこの私だ！』

必殺の両腕ホエールバイトと錫杖がぶつかり合い、ボロボロの工場内に凄まじい火花が散った。

「大丈夫かホエール！ぐああっ！？」

ボルライガーがホエールの身を案じた一瞬、その黄色いボディにセンカンデンノーが肉迫した。

『よそ見をしている暇があるのかデンノー！』

センカンデンノーはボルライガーの胸に自らの砲頭を密着させ、二ヤリと邪悪な笑みをこぼした。

『貫通弾頭！発射デンノー！』

「ぐあああああっ？！」

ボルライガーのボル強化服は強力な貫通弾頭のエネルギーを減殺させるために、そのエネルギーを全て着弾した一点に収束させた。

「ボルライガー？！」ボル強化服は全てのエネルギーを使い果たして消失し、陸は生身のまま壁に突き飛ばされた。

「うぐああっ！」

『はははっ！とどめだ！貫通弾頭！くらえデンノー！』

センカンデンノーは次弾を頭部の砲頭に装填し、壁にもたれる血ま

みれの陸に一気に発射した。

「秘剣・鷲の嘴ッ！」

発射された貫通弾頭はボルコンドルの日本刀によって真っ二つに切り裂かれ、壁と床にめり込んだ。

「ぐっ　ボルっ　コンドル　逃げる」

「陸をやらせはしない！」

ボルコンドルは日本刀を鞘に収めて居合い斬りの姿勢をとった。

『くくくっ！くはははっ！デンノー！』

あざ笑うセンカンデンノーが指差したも　それは鞘に収められたボルコンドルの日本刀であった。

「何がおかしい！秘剣・鷲の爪ッ！」

ボルコンドルはセンカンデンノーに向かって走り、日本刀を一気に抜刀した　しかし次の瞬間。

「なにっ　？」

ボルコンドルが抜刀した日本刀は真っ二つに折れており、小さくなったセンカンデンノーの一步前の宙を切った。

『俺の貫通弾頭はお前の刀の三倍以上の硬度　折れて当然だデンノー！』

「くっ！ボルウィング！」

ボルコンドルは深紅の翼を腋から腰にかけて展開させた。

『やらせるか！バルカン発射デンノー！』

センカンデンノーの頭部のバルカンが飛び立とうとした深紅の翼を

撃ち抜き、ボルコンドルを落下させた。

「…ぐうつ！こいつ 強い！」

センカンデンノーの背後で巨大なる悪意、サタンイレイズが満身創痍のボルコンドルをあざ笑った。

『くくくくつ 惨めだなボルコンドル 守るべき命も守れず…倒すべき敵も倒せず そして死ぬのだ！』

『サタン・イレイズ様！とどめは是非ともあなた様のその一撃で！』

アスファルトの床に着地してよろめくボルコンドルにバルカンを放ちながら、センカンデンノーは背後のサタン・イレイズを見つめた。

『気が利くではないかセンカンデンノー…くくく 終わりだなボルコンドル…やはりこの世界は（力）が全てだったな』

「…くつ…そんなことは そんなことは 無い！」

サタン・イレイズは右腕を天にかざし、その拳にエネルギーを凝縮させた。

『死ね… ボル コンドル』

「ホエールバイトっ！」

『魔刃烈風脚！』

ボルホエールの拳はゾールの蹴りによって弾かれ、よろめいた隙に錫杖による突きに直撃した。

「ぐああっ！」

『終わりだな…ボルホエール!』

ゾールは倒れ込んだボルホエールを鼻で笑い、錫杖を床に突き刺して拳を構えた。

『剛拳流奥義：光刃・一閃!』

ゾールの拳は緑色に光り輝き、その眼孔にはボロボロのボルホエールが映し出されていた…

「くっ…命を捨てても全てを守る…!くらいやがれ…血も涙も無い悪魔めええええい!」

ボルホエールはよろめきながらも立ち上がり、拳を構えて一気に走り出して加速した。

「ホエールバイトお!」

『滅!』

ぶつかり合う拳と拳…そして…

「ぐああああっ!」

…

…

…

…

【次回予告】

新たなる電脳軍の強大な力の前に、電獣戦隊は敗れ去った。

しかし、彼は立ち上がる。

みんなの心を守るため。

小さな命を守るため。

そして、あの日誓った約束のために…

【第十五話 電獣 一つの誓い】

そして男は、再び飛び立った。

第十四話 サタンの恐怖！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第十五話 電獣 一つの誓い（前書き）

電獣戦隊に、未曾有の危機が訪れる。

第十五話 電獣 一つの誓い

「ぐあッ！」

大幹部・ゾールの光輝く拳はボルホエールの蹴りを跳ね除け、その腹に渾身の一撃を与えた。

「ぐああああッ?!」

その衝撃はスーツ越しに体や神経を襲い、海に気が狂いそうな痛みを与えた。

『…終わったな…!』

ボルホエールのボル強化服は拳の衝撃波エネルギーを拡散させ、消失した。

「…ぐうつつ…!」

圧倒的な（力）にねじ伏せられ、倒れる電獣戦隊…もはやこれまでかと思われた、その瞬間であつた。

「みんな！一旦帰投するんだ！」

工場の上空に待機していたボルトマンモスから司令官の叫び声が響いた。

「司令官！」

「ボルトマンモス！オートコントロール… チェーンマジックハンド展開！」

上空で待機していたボルトマンモスから三つの鎖が投下され、絶対絶命のボルトマンの三人を先端のマジックハンドで捕まえた。

「ぐつ……ごはあッ！」

「がはっ！…ぐへえ！」 生身の陸と海は吐血しながらもチェーン

によって上空の母艦へと引かれていった。

『なっ！逃げるのか？！ボル コンドル！』

「くっ！サタン イレイズ！」

マジックハンドに掴まれて母艦に引き寄せられたボルコンドルは、サタン・イレイズの腕の衝撃波をすんでのところで回避した。

『…行っただか…電獣戦隊 』

サタン・イレイズは踊る穴の開いた天井の間から見える、粒子を展開させて飛び去っていく巨大な空母を見つめた。

『サタン・イレイズ様！今すぐに追撃いたしましょう！今なら電獣戦隊を滅ぼせますぞ！』

興奮して上空を見つめるゾール、サタン・イレイズはその姿を見て首を横に振った。

『いや、今日はここまでだ…ゾール、センカンデンノー、一旦帰還しろ』

サタン・イレイズは肩の埃を払いながらセンカンデンノーに指示を出した。

『なぜですサタン・イレイズ様？！今追撃すれば電獣戦隊を壊滅させられ…！』

サタン・イレイズ駆け寄ってきたゾールは言葉を呑んだ。

『今は（あの作戦）の準備をしなければならぬのだ ゾール、帰還せよ 』

サタン・イレイズはゾールを睨みつけた、それは（帰還しなければ殺す）という意味を含んだ最終警告であった。

『ははっ！サタン・イレイズ様！』

ゾールは一礼し、アスファルトに突き刺さった錫杖を取り、歩き出した。

『…さあ 無力なる電獣戦隊よ 新たなるイレイズの作戦によって地獄を見るがいい！くくくくッ！ははははっ！』

サタン・イレイズは翼を広げて工場内を後にした。

ボルトマンモス 通路内

「うっっ… ごはぁッ」

ボルトマンモスの格納庫内に、満身創痍の空矢と陸、そして海がチエーンによって格納庫の隅の三つのベッドに運ばれた

「しっ 司令官！電獣を出撃させて下さい！… 奴を サタン イレイズを野放しにできません！」

空矢は傷だらけの体を起き上がらせようと、ベッドの柵を握った。

「お 俺達は… まだ まだ戦える！」

海は腹を押さえながら起き上がろうとしたが、そうする度に意識が朦朧として、思うように体が動かなかった。

「長官… 戦わせて下さい！長官！」

「馬鹿を言うな！今のお前たちは戦える状態じゃない！帰還しろ！」
格納庫内の大型通信機から司令官の怒りの声が響き、三人の戦士は戦えない真実を実感し、動きを止めた。

「… しかしイレイズが」

「イレイズも撤退し、戦闘は終了した… だからお前達はひとまず休むんだ」

司令官の言葉は、三人の予想とは違った真実を伝えていた。

「なっ！撤退？！」

「あんだだけ… 優勢だったのに！？… ぐはっ げほっ」空矢と陸は驚きながら少量の吐血した、海は既にその横で静かに眠りについていた。

「とりあえずもう喋るな、休むんだ」

司令官の言葉と同時に、空矢と陸の倒れているベッドの下から何か

の霧が噴射された。

「げほっ！ぐほッ！長官！何をつ！」

「ごほッ！」

陸と空矢は謎の霧を吸い込み、その意識は混沌の中に消えていった

：

それは、今よりも少し昔のことであった。

『ぶち殺してやるデンノー！』

空矢は電腦怪人に追われながらも力の限り走った。

「くっ…なんなんだ！こいつは！」

航空防衛隊時代の空矢は、一度だけ電腦軍と遭遇したことがあった…

「空矢！早く逃げる！ 基地内は殆ど制圧された！早く！ 早く逃げろ！」

航空防衛隊の基地内に響き渡る警告音、通路内は次々と隔壁で覆われ 空矢は力を振り絞り、外へと走った。

「くっ！ こうも人の命が簡単に奪われるなんて ！あいつらは一体 なんなんだ！」

空矢は航空防衛隊の基地の外へと飛び出した しかし。

『デンノー！お前が 最後の一人か！』

『狩りも飽きたぜ！早く殺そうぜデンノー！』

『殺す殺す殺す殺す殺すううッ！デンノー！』

三体の異形なる電腦怪人が雨が降り注ぐ基地の外で待ち構えていた 挟み撃ち状態であった。

『やっと追いついたぜ！さあ…終わりだ！』

「…くっ ここまでなのか？！」

空矢は舌打ちし、手元の武器を見つめた…それは、小さな拳銃であった。

「畜生！」

『デンノー・挟み撃ちアタック！』

バスンという銃声と共に、四体の電腦怪人が各々の武器を振り上げて空矢に牙を剥いて飛びかかる…

（…し…死ぬっ！？）

空矢の放った銃弾をはねのけ、四体の電腦怪人は空矢に向かって武器を振り下ろした

『ぐああああっ！』

吹き飛んだのは、異形なる電腦怪人の方であった。

『ぎゃあっ！』

『なあッ?!』

『うぐわッ!?!』

四体の電腦怪人は吹き飛び、その爆発を見つめる空矢は何が起こったのかも分からずに驚いた。

「なっ?!何が起きたんだ!」

雨が降り注ぐアスファルトの上…そこにいたのは、黒いマスクとスーツに身を包んだ謎の戦士であった。

「あんたが やったのか!?!」

黒いマスクは深く頷き、空矢の背後を見つめた。

「…な?!」

謎の戦士の視線を気にして空矢が振り返った先にいたのは、巨大な角をもった電腦怪人と、大木のように巨大な腕をもった電腦怪人であった。

『よくも俺達の部下を殺してくれたな!』

鋭い角をもった電腦怪人、ツノレイザーは槍を振り回して怒りを露わにした。

『許さん!許さんぞ!』

巨大な腕をもった電腦怪人…ツメレイザーは腕を振り回しながら怪

光線を両目から放出した。

「…ドラゴン・ガン」

黒いマスクの戦士は右手を用いて灰色のメカニカルな銃を腰から取り出し、標準内に二体の電脳怪人を捉えた。

「ドラゴン・エッジ」

その黒いマスクの戦士は雨に打たれながらも左手でメタリックな小太刀を構え、二体の電脳怪人に向かって走り出した。

『なっ！速いつ?!』

ツノレイザーは戸惑った、それはあまりにも敵が速かったからである。

「…くられ！」

『ぐあああ?!』

黒い戦士の小太刀がツノレイザーの体を引き裂き、撃ち込まれた弾丸がその裂け目に炸裂した。

「…次…」

ツノレイザーの体は吹き飛び、変質していた内臓が飛び出た。

「…速い…速すぎる」

謎の戦士に次々と倒される異形の怪人…空矢は目の前に広がる光景がまるで仮想であるかのような感覚に陥った…

「俺は…なにもできないのか」

しかし、仲間を失ったこの痛みは現実であつた。

『よくもツノレイザーをッ！ぶつ殺してやるッ!』

ツメレイザーの巨大な腕による鉄槌が黒い戦士に炸裂し、雨の降り注ぐアスファルトに肉片が飛び散った。

「なっ?!」

啞然とする空矢、ツメレイザーは血しぶきを浴びた顔で高笑いをしながら腕を振り回した。

『がははははッ！ツメレイザーよ見たか！仇はとつたぞ!』

「熱光学プロジェクター、解除」

次の瞬間、アスファルトに散らばった肉片は残像となって消え、ツメレイザーの背後から黒い影が襲いかかった。

『ぐああああっ?!』

「ドラゴンエッジ・ファイナル!」

影は黒いマスクの戦士に変わり、振り下ろされた小太刀はツメレイザーの背中の脊椎部分に突き刺さった。

「…終わったか…」

黒いマスクの戦士は武器をしまいながら、空矢の元へと近づいた。

「怪我は無い?」

黒いマスクの戦士は雨によって水浸しになった空矢を見つめた。

「あ…ああ」

空矢は震えながら静かに頷き、歩き出した。

「そう…よかった」

「あんたは一体誰なんだ…! あいつらは一体 なんなんだ…! 教えてくれ!」

黒い戦士に質問する空矢、仲間を失った悲しみと無力感が彼を突き動かしていた。

「…それを知って…どうするの?」

首を傾げる黒い戦士、空矢は必死に戦士の肩を揺らした。

「俺は…さつき守れなかったような命を守りたい! だから…戦いたいんだ! こんなことをする…奴らと!」

「……」

黒い戦士は空矢の瞳を真っ直ぐに見つめ、その腕を突き放した。

「…誓える…？…最後まで全力で戦い、人の心と命を守ることを…」

「……ああ！誓う！俺は命を賭けてでも戦う！」

腕を突き放された空矢は黒い戦士のX字のゴーグル部分を見つめて頷いた。

「…そう…」

黒い戦士はマスクを脱ぎ、二十代半ばと思われるその端正な顔と長い黒髪を露わにした。

（…女？）

「私はボル ドラゴン…」

その男を包んでいた黒いスーツは消失し、男は電獣携帯を黒い制服のポケットに入れた。

「電獣戦隊へ入りなさい、そこがあなたのいるべき場所よ」

「…電獣…戦隊…」

その黒髪の女性との運命の邂逅を果たした空矢は、電獣戦隊への入隊を決意したのであった…

GON基地 休憩室内

長い眠りから目覚めた空矢の視界には白い天井が広がっていた。

「GON基地 戻ってこれたのか 俺は…」

空矢はベッドから起き上がり、部屋を見回した

比較的大きな休憩室にはベッドが五つ、そしてテーブルが2つ置かれており、空矢の体に貼ってある湿布と消毒液の匂いがしていた…

「……やっと、起きたみたいね…」

空矢はハツとして振り返った、空矢のベッドの背後には…長い黒髪が美しい女性が立っていた。

「…なっ?! どうしてここに?!」

空矢は驚きながらベッドから起き上がろうとしたが、肋骨の部分に痛みを感じて呻いた。

「いつつ …!」

「心配だった、って理由だけじゃ不満かしら？」

その女性は意地悪っぽく微笑み、テーブルの上の籠の中から赤いリソゴを取り出した。

「食べる？」

「あ…ああ」

空矢は頷き、ベッドに胡座をかいて女性を見つめた。

「そっいえば…海と陸がいないな？」

部屋のベッドは足りているのに、確かに陸と海の姿は無かった…

「…もう行っただわ…」

「どこに？」

またも意地悪っぽく微笑む女性に、空矢は首を傾げた。

「陸と海は長官と一緒に 地獄ヶ原に行っただわ…」

「…地獄ヶ原」

椅子に座り、リンゴの皮をスルスルと器用に剥きながらその女性は部屋の壁を見つめた

「…あれを着て、ね…」

空矢は女性が見つめた壁にかかっていた赤いジャージを見た。

「…重金属ジャージを…？」

それは重金属で作られたとてつもなく重いジャージであり、本来ならば三つある筈なのだが、今は一つだけになっていた。

「…」

空矢はベッドから立ち上がり、靴を履いて歩き出した。

「…行くのね」

女性はリンゴの皮を部屋のゴミ箱に捨て、果物ナイフをテーブルの上に置いた。

「…ああ、電獣一つの誓い…忘れてないからな 行ってくる！」

空矢はTシャツの上に重金属ジャージを羽織り、ジッパーを上げた。

「行つてらっしゃい空矢」

リンゴを片手で放り、女性は手をひらひらと振った。

「ああ！」

投げられたリンゴを受け取る空矢、もう迷いは無い 戦っただけである。

人の心と命を守る。

電獣 一つの誓いの元に、男は走り出した。

【次回予告】

命を捨てることは美德では無い。

しかし、彼らの向かった地獄は死と隣り合わせの暗黒地帯。
そう、彼らは死に行ったのでは無い。

生きるために、生きとし生きる全てのために。
決死の大特訓に望むのである！

【第十六話 苛烈、決死の大特訓】

蘇れ電獣戦隊、不死鳥の如く。

第十六話 苛烈、決死の大特訓（前書き）

人は、守りたいものがある時。

最大の力を発揮する。

第十六話 苛烈、決死の大特訓

地獄ヶ原

地獄ヶ原とは、関東のある山の麓にある樹海のあだ名であり、有名な自殺のスポットでもある。

（…入隊試験の日以来だな ここに来たのは）

うねりをあげる植物をかき分け、重金属ジャージに身を包んだ海と陸…そして、アタツシケースを持った火車司令官は薄暗い獣道を歩いていた。

「もういい、止まれ」

アタツシケースを開いた火車司令官の一言を聞き、陸と海は茂みの中で歩くのを止めた。

「陸、海、お前達は今から私がこのリモコンで操作するデンデンを生身で倒すのだ」

司令官はアタツシケースの中からコントローラーを取り出し（ファミコンのものに似ている）、セレクトボタンを押した。

『……………！』

ガサツという音と共に、大木の上から白い何かが落下した。

「…これは デンデンなのか？！」

陸はその白いデンデン デンデンを見つめて驚いた。

「…デンデンをろ獲して、改造したのか…」

海は無言のデンデンを睨みつけて呟いた…例え、ろ獲したものだ

しても イレイズの戦闘員は憎いのであった。

「では大特訓を始める」

司令官はコントローラーのボタンを押し、デンデンを茂みの中に走らせた。

「いくぜ海！」

「…分かつてる！」

陸は海の頷いた顔を確認し、茂みの中へと走り出した。

「…行つたか……」

火車司令官はアタツシケースが空中に投影している映像を頼りに、コントローラーを操作し始めた。

「はぁ！はぁ！… 司令官！遅れてすみませんでした！」

司令官の背後で物陰が動いた、それは赤いジャージに身を包み、汗をかきながら息を切らしている空矢であった。

「空矢、私の操作しているデンデンを生身で倒してみろ、それが特訓だ」

空矢は、振り向きもしない司令官が見つめる映像を見つめた…

「…生身で…デンデンを？」それは、司令官が操作しているデンデンからリアルタイムで送られてきている映像であった。

「了解です、行つてきます！」

空矢は考えるよりも先に走り出した、陸と海と合流して対策を考える、まずはそれからである。

（まずは海や空矢に俺の存在を知らせなくては… ん?!）

空矢は視界を流れていく木々の中央に何かのマークがあることを知り、立ち止まってそのマークを凝視した。

「…これは」その木には、^{くちくち}嘴をもった動物のようなものが幹に刻まれていた。

「陸と海が刻んだのか…？これは…コンドル？俺のことか？」
陸と海が残したメッセージ、と受け取るのが妥当であろうと思い、
空矢は再び木々の間を走り出した。

「待つてろよ陸、海…！」

…

空矢の少し先の茂みを走る陸と海は、周囲の安全を確認しながらコントロールされたデンデンを倒す方法を考えていた。「あのメッセー
ージ 空矢に分かるかなあ」

陸は首を傾げて背後を確認した、しかしその視線の先には空矢のよ
うな人影は無い。

「分かるさ、あいつなら」

先頭を走る海は湿気の多い草むらを踏み抜き、周囲を見渡した

「！…危ない！陸！」

海が陸を突き放す、刹那の差で頭上から何かの白い影が飛来した。

「……………！」

飛来した影はリモートコントロールされた白きデンデンであった。

「でえいっ！」海は陸を突き飛ばした後、足蹴りによって飛来した
デンデンの蹴りを相殺し、後退した。

「大丈夫か 陸！」

海は突き飛ばした陸を確認して更に後ろに後退した、相手との距離
をとらなければ重金屬ジャージによって動きが鈍くなっている海達
に勝ち目は無い。

「大丈夫だ！おりゃあぁッ！」

陸は海に向かって走り始めたデンデンに肉迫し、鉄拳を繰り出した。

「……………！」

鉄拳は宙を切った、無言のデンデンは陸の鉄拳の動きを完全に先読みして、体を後退させた。

「うごあつ?!」

踏み込んだ陸の腹に蹴りを入れるデンデン、白き脚部が腹筋に直撃し、直りきつていない体に衝撃を与えた。

「くっ！陸！…仕方ない！…一旦退くぞ！」

海は地を転がり飛ぶ陸の腕を掴んで立ち上がらせ、デンデンを背に走り出した。

「くっそー！体が重いぜえっ！」

立ち上がった陸は重金属ジャージに体をとられながらも海の背中を追って走り出した。

「…」

…

「空矢、陸、海…」

火車司令官はリモコンを操作し、モニターを通して三人の戦士を追った。

「ボル強化服は人体に力を付加させているに過ぎない…最終的には、お前達の力が頼りなのだ…」

リモートコントロールされているデンデンとはいえ、生身でしかも重金属ジャージを着ながら倒すという特訓を用意した司令官は、静かに操作を続けた

「…だから勝て 勝つてみせろ！空矢！…陸！海！」

AボタンとBボタンを連打して叫ぶ司令官の親指には、既にボタン拑が出来上がりつつあった…

…

「でえいつ！」

赤い影が、白きデンデンに迫る。

「……！」

赤い影 空矢の蹴りにより、デンデンはのけぞった。

「……陸！海！俺は……俺はここにいます！」

空矢はすつくと立ち上がるデンデンを前に拳を握りしめ、信頼する仲間の名前を叫んだ。

「……！！！」

デンデンは手刀を振り上げ、拳を構える空矢に向かって走り出した。

「……！」

「でえええい！」

空矢はデンデンの手刀を白刃取りし、その腕に膝蹴りを繰り出した。

「……！」

デンデンの腕に空矢の膝がめり込み、その骨はへし折れた。だが。

「……！！！」

デンデンの足蹴が空矢の膝に直撃し、空矢は吹き飛んだ。

「うぐああああッ！」

「大丈夫か！空矢」

「聞こえたぜ！空矢！お前の声が！」

大地に伏した空矢の元に海と陸が駆けつけ、両腕を構えてデンデンを威嚇した。

「陸！海！ やってやろうぜ！俺達の力で！」

「ああ いくぞ！」

「コンビネーション攻撃でいこうぜ！空矢！海！」

三人はは叫ぶ 体は疲労し、傷口は再び開きそうにもなり激痛が体を支配していたが それでも、彼らは走り出した。

「でえい！」

空矢はデンデンを正面から殴りかかったが、デンデンの蹴りによって相殺された。

「今だ！おりやああッ！」

蹴りを繰り出し、姿勢が不安定になったデンデンのもう片方の足に海の足払いが炸裂した。

「今だッ！」

倒れ込んだデンデンの腹に、陸の鉄拳が炸裂した。

「これで チェックメイトだ！」

『！』

空矢は足蹴を繰り出しデンデンの顔に装備されている広域カメラを破壊した。

「司令官はこのカメラを通して俺達を見ていた…もう動けないはずだ」

空矢は靴の裏に刺さったレンズや機械の破片を見つめて呟いた。

「…はあ 疲れたぜ」

海はその場にあつた岩に腰掛け、緑で埋め尽くされた周囲を見回した。

「…あれ ?こいつまだ動くぞ?!」

陸はカメラを破壊されたデンデンがビクビクと動いているのを確認し、拳を構えた。

「なにっ?!」

「チッ！しつこいぜ！」

『…』
空矢と海も拳を構えるが、デندنはビクビクと振動するだけで立ち上がるうとはしなかった。

『よくやった空矢、陸、海、…明日も午後から同じトレーニングをするつもりだ、今日はゆっくり休め』

デندنから放たれた火車司令官の言葉を聞き、三人は耳を疑った…

「…この模擬戦闘を毎日やるのか まさか？」

空矢は滴り落ちる汗を拭きながら、沈み行く太陽を見つめた…その炎の星は、静かに、しかし燦然と人々を照らしていた…

「…やってやるさ 電腦軍を倒せるなら やってやる」海は拳を握りしめ、大地に伏した白いデندنを睨みつけた。

「あゝあゝ…早くカレー食いたいぜ…」

陸は軽い整理運動をしながら、深いため息を漏らした。

『ポイント203で合流する、今夜はそこで野宿だ』

司令官の声はそこで途絶え、デندنは完全に動きを止めた。

「…了解、いくぞ陸、海」

「…ああ」

「了解」歩き出す三人、彼らはこの大特訓が正に命がけであることを今更ながらに知るのであった

【次回予告】

ついに、戦いの時が来た。

命を賭けた大特訓により復活した電獣戦隊は三体の重電腦怪人の前に、燦然と立ち向かう。

ぶつかり合う力と力、果たして 勝利者は。

【第十七話 闘志、燃えて】

電獣戦隊に二度目の敗北は、無い。

第十七話 闘志、燃えて（前書き）

凶悪なるサタン・イレイズの刺客の前に、電獣戦隊が燦然と立ち向かう！

炸裂せよ、ボルトサイクロンを超えた新必殺！

その名も……！

第十七話 闘志、燃えて

電獣戦隊が大特訓を開始してから、既に二週間の月日が流れていた。

ドリルガイアー 給湯室内

『…まだか まだなのか！早く殺したいデンノー！』

イレイズの地底要塞であるドリルガイアーの巨大な給湯室内では、サタン・イレイズが新たに創造した二体の重電脳怪人が狂気の唸りをあげていた。

『折角得た力を使えずに…待機命令なんて！キレそうだデンノー！』

プロテイン茶漬けの入った茶碗を壁に投げつけ、戦車のような頭をもった重電脳怪人は両腕のカッターを振り回した。

『俺を迫害した世界を！人間を！皆殺しにしたいデンノー！』

畳の床に地団太を踏み、戦闘機のような頭部と翼を持ったセントウキデンノーはテーブルの上のテレビデオを叩いた。

『…ほう それほどまでに暴りたいのか、センシャデンノー、セントウキデンノー』

『ひっ！ひゃあ！』

『サ！サタン・イレイズ様！』

セントウキデンノーの叩いたテレビは起動し、サタン・イレイズの悪魔のような顔が映し出された。

『…どうなのだ センシャデンノー、セントウキデンノーよ』

サタン・イレイズはテレビデオの前の二人を睨みつけ、腕を組んで威圧した。

『…サタン・イレイズ様…我々は…憎き人間どもを皆殺しにしてやりたいのですデンノー』

センシャデンノーは拳を握りしめながら悪意を主張し、テレビデオのモニターに映るサタン・イレイズを見つめた。

『俺もです！早く殺したくて殺したくて 欲求不満になりますデンノー！』

セントウキデンノーは指先をくねらせながらサタン・イレイズを見つめた。

『そうか…ならば…今こそ、その怒りの力で人類の希望を打ち砕くのだ！』

テレビデオに映し出されているサタン・イレイズは拳を突き出し、その掌に黒い炎を発生させた。

『センシャデンノー！セントウキデンノー！お前達はセンカンデンノーと共に電獣戦隊を血祭りにあげるのだ！』

サタンレイズを映し出していたテレビデオの画面は砂嵐を映して消え…悪魔のような声だけが小さく響いていた

『電獣戦隊！噂には聞いていたぞ！あんな雑魚どもッ！くくくくかかかかッ！地獄送りだデンノー！』

センシャデンノーは悪意に満ちた笑い声と共に頭の砲台を上下させ、給湯室から退室した。

『電獣戦隊など…抹殺だ！抹殺だ！皆…抹殺だデンノー！』

セントウキデンノーはミサイルをしこたま背中 of 翼に装備させると、給湯室から飛び出して行った

東京都A43地区

『デンノー！皆殺しにしてやるデンノー！』

重電脳怪人センカンデンノーは人口が密集している街中に現れ、頭の砲台を振り回した。

「なっ！なんだ？！」

「きゃあああっ！」

センカンデンノーは道行く人々を頭の砲台で殴りつけ、血の雨を降らせていた。

『現れる電獣戦隊！現れなければ東京は血の海となるデンノー！』

「ひいっ！」

センカンデンノーは倒れ込んだツルピカ頭の会社員の首を掴み、絞めあげた。

『俺を恨むなデンノー！すぐに駆けつけなかった電獣戦隊を恨むんだな！』

絞めあげられた会社員の肉付きのいい顔が、青ざめていった…

「そこまでだ！センカンデンノー！」

高らかな叫びと共に、センカンデンノーの腕にビームが直撃した。

『ぐああッ！』

高熱のビームが腕に直撃し、センカンデンノーは絞めあげた会社員を離してしまった。

「ぜえはあ…！」

会社員は苦しみながらもバタバタと逃げ出した。

『来たな…電獣戦隊…！』

振り返るセンカンデンノー、その視界の先の二階建てビルの屋上に太陽を背にした三つの影が現れた。

「ボル コンドル！」

赤きマスクの戦士は腋から腰にかけて展開する翼をはためかせ、アスファルトの大地に降りたつた。

「ボル ホエール！」

青いマスクの海の戦士は腕を振り上げ、大海を行く鯨のように跳躍し、大地に降りたつた。

「ボル ライガー！」

黄色いマスクの陸の戦士は跳躍し、回転をしながら灼熱の大地に着陸した。

「人の心と、命を守る！」

大地に降りたつた三人の戦士はその鍛え上げられた拳を合掌し、センカンデンノーに向かって歩き出した。

「電獣戦隊！ボルトマン！」

三人の声は重なり合い、背後で赤・青・黄色の爆炎が立ち上る、それはセンカンデンノーを威圧した。

『ふん！我々イレイズに一度負けた電獣戦隊など！俺の敵では無い！』

センカンデンノーは右腕を振り上げ、パチンと指を鳴らした。

『来てくれ！センシャデンノー！セントウキデンノー！』

センカンデンノーの叫びは大地に響き、二体の重電腦怪人を呼び寄せた。

『デンノー！言われなくても！』

重電腦怪人、センシャデンノーは足のキャタピラーを用いて高速で駆けつけた。

『皆皆皆皆殺にしてやるデンノー！』

セントウキデンノーは背中 of 翼を用いて、ジェット噴射をしながら大地に着地した。

『さあ…電獣戦隊！今度こそお前達を抹殺してやるデンノー！』

センカンデンノーは現れた二体の重電腦怪人と共に電獣戦隊を威嚇した。

「今までの俺達だと思ふなよ！センカンデンノー！」

一度はセンカンデンノーに大敗を喫したボルライガーであったが、もう彼は過去に囚らわれてはいなかった。

『なっ！何をッ？！』

センカンデンノーはその強気な発言がしゃくに触ったのか、耳を疑い拳を握りしめた。

「地獄に行くのはお前達の方だ！イレイズ！」

ボルホエールはセントウキデンノーを睨みつけ、腕を構えた。

『その言葉！数秒後に後悔させてやるデンノー！』

セントウキデンノーは挑発に乗り、怒り心頭といった感じで腕を振り回した。

「ホエール！ライガー！コンビネーション攻撃でいこう！電獣ダッシュだ！」

「ああ！見ていやがれイレイズめ…特訓の成果を…見せてやる！」

「よっしゃあッ！燃えてきたぜ！」

ボルコンドルの叫びと共に、ボルホエールとボルライガーは一気に走り出した。

『なにっ?!』

センカンデンノーは驚愕した、それは迫り来る三人の戦士達があまりにも速かったからである。

「秘剣・鷲の翼ッ！」

ボルコンドルは日本刀を構え、すれ違いざまにセンカンデンノーに居合い斬りを繰り出した。

『ぐああああっ！』

鍛え上げられたボルコンドルの烈火の如き斬撃はセンカンデンノーの片腕を一瞬にして切り落とした。

「電獣ジャンプ！」

走るボルライガーは大地を蹴って八メートルほど跳躍した。

「ライガー高速スピッキング！」

ボルライガーは空中で回転し、片腕を失ったセンカンデンノーに向かって垂直キックをお見舞いした。

『あがあああああつ?!』

腹に雷光の如き一撃を受けたセンカンデンノーはアスファルトの上を回転しながら吹き飛んだ。

『なっ…ぐはっ！なんだッ！…こいつら…本当に前と同じ電獣戦隊なのかッ?!ごぼあッ!』

吹き飛ばされたセンカンデンノーは片腕で起き上がり、吐血した。

「終わりだ！ホエールバイト！」

ボルホエールは起き上がったセンカンデンノーの首を掴み、万力のように絞め上げた。

「うおおおおっ！鯨投げッ！」

ボルホエールはセンカンデンノーの首を絞め上げたまま、一気に宙に放り投げた。

『あぎやあああつ！』

噴水に打ち上げられたように宙を吹き飛ばすセンカンデンノー、しかしその更に上に一つの影が現れた。

「これで終わりだッ！電獣・兜割り！」

吹き飛ばしたセンカンデンノーの体に、飛翔したボルコンドルの兜割りが炸裂し、センカンデンノーの体は真つ二つに斬り裂かれた。

『…なんだ奴らは…噂では俺達には勝てない雑魚だって話だったが！どういうことだ！話が違うデンノー！』

センシャデンノーは初めて見た電獣戦隊の、噂とは違ったあまりの強さに完全に脅えきっていた。

『ひいっ！これじゃあ抹殺されるのは俺達だデンノー！いやだああっ！いやだあっ！』

重電脳怪人の二人には、先程の電獣戦隊の連携攻撃は確かに見えていた。いや、見えてはいたのだ。

「初めから言ってるだろう！抹殺されるのは…お前達の方だ！」

叫ぶボルホエール、重電脳怪人ですら入り込む余地の無い連携攻撃を繰り出し、意気揚々と手首を回していた。

『慌てるでない！選ばれし重電脳怪人よ！』

完全に取り乱していた二人の重電脳怪人を一喝した声、その主はサ

タン・イレイズの右腕である大幹部・ゾールであった。

『ゾール様！どうしてここにデンノー？！』

『俺達はどうすりゃいいんだデンノー！』

二体の重電腦怪人は不安にかられて叫んだ。

『流石だな電獣戦隊！ボルトサイクロンよりも隙の無いコンビネーション攻撃を作り出すとは…』

尚も落ち着きの無い二体の重電腦怪人をよそに、ゾールは真っ二つに斬り裂かれたセンカンデンノーの死骸の元へと歩いた。

「何をする気だ！ゾール！」

ボルコンドルは落ち着いた様子でしゃがみこんだゾールを指差し、叫んだ。

「センシャデンノー、セントウキデンノーよ！今こそ一つになり、更なる力を得るのだ！」

ゾールはセンカンデンノーの損傷した電腦を腕に掴み、立ち上がって錫杖を振り上げた。

『さあ！センカンデンノー、センシャデンノー、セントウキデンノー！電腦合体せよ！イレイズデスサエム！イレイズデスサエム！』

片手で錫杖を振り回して念仏のようにイレイズデスサエムと唱えるゾール、すると、重電腦怪人は震えだした。

『イレイズデスサエム！イレイズデスサエム！電腦合体せよ！』

『ぐああっ！なんだっ！？何が起きるッ！？』

センシャデンノーはふらつき、セントウキデンノーに抱きついた。

『イレイズデスサエム！イレイズデスサエム！』

『なっ？！電腦合体だっ！？があああっ？！』

ゾールの念仏をバックに、セントウキデンノーの体とセンシャデンノーの体が溶け合い、一つとなっていく…

「なにが起こっているんだ？！」

ボルライガーはその異様な光景に驚き、半歩後退した。

「…二体の重電腦怪人が合体しているだっ！？」

ボルホエールは血まみれの腕を構えて、その光景を見つめた。

『二体だけでは無い！センカンデンノーよ！再び生まれ変わるのだ！』

ゾールは掴んでいたセンカンデンノーの電腦を、今もなお融合を続けているセンシャデンノーとセントウキデンノーの中に放り投げた。

『イレイズデスサエム！イレイズデスサエム！電腦合体せよ！』

「三体の重電腦怪人を…融合させると言うのか！」

ボルコンドルは更に融合していく重電腦怪人を前に、日本刀の鞘に手を添えた。

『さあ！…今こそ誕生せよ！』

ゾールは錯乱したように体を動かし、錫杖を天に翳した。

『重電腦怪人ハガネデンノー！』

ゾールは錫杖を地面に突き刺すと、重電腦怪人は融合を終え、今度はムクムクと巨大化を始めた。

『グッグッ…ウガアアアアッ！ハガネデンノー』

一気に50メートルほど巨大化したその重電腦怪人ハガネデンノーはその足を振り上げて雑居ビルを粉砕した。

『くつくつくっ！はっはっはっ！はーっはっはっは！…この力！これならば電獣戦隊に勝てるデンノー！』

ハガネデンノーは豆粒ほどにも見える電獣戦隊を踏み潰そうと歩き出した。

『さあ、行くのだハガネデンノー！電獣戦隊を抹殺せよ！』

ゾールは錫杖を振り上げて巨大なハガネデンノーに指示を出すと、物陰に隠れながら撤退を始めた。

「待てゾール！逃げるのか！？」

ボルホエールは自分を負かした憎きゾールを指差し、追いかけてようとした。

『貴様達に付き合っている時間は無い！さらばだ電獣戦隊！』

ゾールは錫杖を地面に突き刺し、煙幕を張って逃げ出した。

「くっ！…逃げ足の早い！」

「ゾールに構っている時間も無いようだ、大電獣で巨大重電脳怪人を迎撃する！」

舌打ちするボルホエール、そしてボルコンドルは腰のベルトに装備されていた電獣携帯を取り出し、高々と天にかざした。

「来い！ボルトマンモス！」

「確かに…あんな奴に踏まれたくは無いからな！」

ボルホエールも渋々電獣携帯を取り出し、天にかざした。

「三人の力を合わせれば…あんな奴すぐ倒せるはずさ！」

ボルライガーは巨大なハガネデンノを睨み、電獣携帯を天にかざした。

『はっはっはっ！もう何をしても無駄デンノー！皆殺したデンノー！』

ハガネデンノーは巨大な足で三色の閃光を天に放つ三人の戦士を踏み潰そうとした、しかし。

「待たせたな！コンドル！ホエール！ライガー！ボルトマンモス、到着だ！」

ハガネデンノーを突き飛ばす巨大な物体、それは戦闘エリア周辺で待機していた電獣空母・ボルトマンモスであった。

「燃える電獣戦隊！人の命と心を守るために、今！」

ボルトマンモスから火車司令官の叫び声が響き、その巨大な体から三体の電獣が投下された。

「よし！行こうぜホエール！ライガー！人の心と 命を守るために！」

「ああ ！やってやろうぜコンドル ！」

「絶対勝とうぜ！コンドル！ホエール！」

電獣一つの誓いを胸に、三人の戦士は空母から投下され降下してい

く三体の電獣の元に向かって走り出した。

今、電獣戦隊の闘志が燃え上がる。

……

…

その一連の戦闘の光景を、高層ビルの屋上から見守る人影があった。

「…電獣戦隊は今まで以上に強くなったわ…」

その人影は清涼スーツに身を包んでいるらしく、腕を組みながらボルトマンモスから投下されていく三体の電獣を見つめた。

「試作スーツゼロや0号機も…無用の長物かも知れないわね」

その人影は、少し自嘲したようにも見えた。

「…私も そろそろお役目御免かしら…」

【次回予告】

人の心と、命を守るために。

真昼の太陽が照らす街中を、大電獣が疾駆する。

そして、激突する力と力、火花散る巨大ロボットの戦闘を見守るあの女は誰だ。

【第十八話 必殺剣を見よ！】

繰り出せ！必殺の一撃を！

第十八話 必殺剣が来た！（前書き）

鋼の獣が哮る。

彼らが信じるものは、勇気、仲間、友情。

その三つが重なり合った力、狂気の怨鎖を打ち砕く。

「…見せてやる 鍛え上げた電獣戦隊の力を！」

彼らの力が一つになった今、必殺剣が来た。

第十八話 必殺剣が来た！

「スカイコンドル発進！レーザー発射！」

真紅の鋼で作られたハゲワシは飛翔し、旋回をしながらハガネデンノーにレーザー熱線を放射した。

「フン！何か当たったかデンノー？！」

ハガネデンノーは体を振動させ、直撃した熱線を拡散させた。

「マリンホエール！出るぞ！」

小型水陸両用艇であるマリンホエールは大地を走破し、ホバーによってビル谷間を加速した。

「ガイアライガー！ゴー！」ガイアライガーは獅子形態のスピードと機動力を活かし、ハガネデンノーと距離をとった。

「ホエール！ライガー！電獣合体だ！」

ボルコンドルが叫び、三体の電獣は一斉に駆け出した

「ああ 一気に決めてやろうぜ！」

スカイコンドル・マリンホエール・ガイアライガーの動力源が唸りをあげ、鋼の獣がビル群の一ヶ所に集合した。

「やってやろうぜ！ガイアライガー、トップギアだ！」

ガイアライガーは唸りをあげ、獅子の頭部をもった人型形態へと可変した。

「見せてやるハガネデンノー！これが俺達の切り札　大電獣だ！」

機体各部のバーニアを噴射させ三つの電獣は飛び上がった。

三つのコクピット内は、宇宙ロケットのように激しく振動し、コンドル達に衝撃を与えた。

「マリンホエール！チェンジだ！」

ボルホエールが起動認証コードを発音すると、鋼の鯨の体は真ん中から頭と体に分裂した。

「ホエールいくぞッ！」

ボルライガーは合体プロセスを入力し、ガイアライガーとマリンホエールの軸を合わせた

「ああ！　やってやろうぜ　！」

ボルホエールは手際よく合体プロセスを入力し、出力計算を始めた。
「コンドル！来いっ！」

マリンホエールの頭と体部分を肩アーマーとして装備したガイアライガーは躍動し、頭部であった獅子の顔は胸部分に可動した。

「スカイコンドル！ファイヤーコネクト！」

ボルコンドルのかけ声と共に、炎を纏った鋼のハゲワシがガイアライガーの首部分に合体し、目と放熱ダクトを出現させ合体ロボットの（頭）の部分となった。

「エネルギーチューブ直結、バリア装甲展開　ボルトマンモスの武器射出システムと連動、No1～7、及び8～15を承認　並びに必殺」

合体ロボットの肩アーマーとなったマリンホエールの中で、ボルホエールは複雑な操作を冷静にこなしていた。

「完成！大電獣！ボルトカイザー！」

三体の電獣が合体した大電獣・ボルトカイザーは雑居ビルの谷間に降り立ち、ハガネデンノーの前に燦然と立ちふさがった。

「大電獣だろうが何だろうが　電脳合体した俺達には勝てないデンノー！」

ハガネデンノーはその鋼鉄の体を走らせ、背中に背負った巨体なキヤノン砲を腕に構え、強力な貫通弾頭を発射した。

「そんなもんは　合体じゃねええッ！」

ボルライガーが叫ぶ、疾駆するボルトカイザーはボルトマンモスの開放された格納庫から射出された盾　ボルトシールドで貫通弾頭を防いだ。

「教えてやろうハガネデンノー！合体とは 心と心を重ねることだ！」

電獣空母から射出された巨大な斧ボルトアックスを振り上げ、ボルトカイザーはハガネデンノー迫った。

『ほざけっ！我々のこの力！この力こそ絶対なのだ！人類を抹殺する最強の力だ！』

ハガネデンノーは両腕を振り上げて叫び、全身の砲台を起動させた。

『ハガネデンノー・フルバースト！』

飛び交う無数の弾丸、ハガネデンノーは全身から弾幕を張り、ボルトカイザーを寄せ付けない。

「ぐっ！なんて弾幕だ！こんなじゃ近づけないぞ！」

ボルホエールは無数の弾丸をセンサーで捉え、ボルトカイザーを後退させた。

「電腦怪人め 勝手なこと言いやがって！どうするコンドル？！」

ボルライガーが困惑しながら叫ぶ、しかし特訓の成果からか、その表情にはまだ余裕が見られた。

「大丈夫だライガー！でえいっ！ボルトアアアアックスッ！」

ボルコンドルはレバーを引き、ボルトカイザーは盾を構えたままボルトアックスを投擲した。

『ぐええッ！なにをつ！』

投擲されたボルトアックスはハガネデンノーの体に直撃し、激しい火花を散らした。

「ナイス！コンドル！ よし、ボルトマンモス！ブーメラン、ジャベリンを出してくれ！」

ホエールは計器類を確認してボルトマンモスに指示を出した、ボルトマンモスは格納庫を開放し、ボルトカイザーの周囲に指示された武器を射出した。

『まだまだやらせんデンノー！デンノージェット！』

ハガネデンノーは戦闘機のもののような翼を展開し、飛翔した。

「一斉攻撃だ！ボルティックブーメラン！」

ボルトカイザーは大地に突き刺さったブーメランを抜き、空中を飛んで迫り来るハガネデンノーに向かって思い切り投げつけた。

『ぐつつッ?!』

「ボルティックジャベリン！」

コンドルは更に叫ぶ、ブーメランに鋼の翼を斬り裂かれて落下するハガネデンノの腹に、ボルトカイザーが投擲した長槍・ボルティックジャベリンが突き刺った。

『うざいいあつ！』

噴射する赤黒い血、腹のボルティックジャベリンは鋭く光り、その体から離れない。

「今だコンドル！電獣剣を使え！」

ホエールは電獣携帯にコマンドを入力し、ボルトカイザーのエネルギーを解放させレバーを引いて叫んだ。

「必殺剣だ！決めてくれよコンドル！」

ボルライガーは電獣携帯にコマンドを入力し、グッドサインを出した。

「ああ！やってやる！ボルトカイザー、パワー全開！」

ボルコンドルはその様子をモニターで見つめ、いつそう強くレバーを握りしめた。

「来い！電獣剣！」

ボルコンドルが叫び、コクピットにセットされた電獣携帯のエンターキーを押すと、ボルトカイザーは天空に右手を振り上げた。

『なっ！？…何をしようと…俺達は負けない！お前達の力など…！』

ハガネデンノーは胸に突き刺さったボルティックジャベリンを抜き取ると、天空に手をかざしているボルトカイザーに向かって走り出した。

『お前達の力など認めないデンノオオオオッ！』

一気に加速するハガネデンノー、その瞬間、ボルトカイザーが天空にかざした手に鋭く太い両刃の剣が飛来した。

「電獣剣！盛者必衰斬り！」

三人の叫びがそれぞれのコクピット内で重なり合う。

何故か現れた沙羅双樹の木々を背に、ボルトカイザーは電獣剣を構え、その翡翠のような光を放つ剣を円月殺法の要領で半回転させた。

『滅殺！抹殺！皆殺しデンノオオオオッ！』

自らの血が刀身から滴り落ちるボルティックジャベリンを振り上げ、ハガネデンノーはボルトカイザーに向かって疾駆した。

「でええええいつ！」

振りおろされた光り輝く両刃の刀身はボルティックジャベリンごとハガネデンノーの体を両断し、真っ二つに切り裂かれたその重電脳怪人から噴水のように赤い血が噴出した。

『ぐぎゃあああああつ！！！』

ハガネデンノーの断末魔を背に、ボルトカイザーは電獣剣を大地に突き刺し、両腕を胸の前に突き出した。

「…盛者…必衰！」

ボルトマンの三人の戦士とボルトカイザーが合掌した瞬間、沙羅双樹の花々は枯れ、真っ二つに切り裂かれた重電脳怪人は火柱をあげて大爆発した。

「……………やったぜ！重電脳怪人を倒せたぜ！」

爆煙を見つめ、ボルライガーはコクピット内でガッツポーズをとって無邪気に喜んだ。

「…特訓の成果だな、まあ…あれだけやって倒せないんじゃ洒落にならないが」

ボルホイールは披露した自らの肩を揉み、深呼吸をした。

「よし、撤収しよう、あ…そうだ…海、陸、今日は焼き肉にしよう！」

ボルコンドルはボルトカイザーの合体解除コードを入力しながら、モニターに映る沈み行く真っ赤な太陽を見つめた。

「ああ！今日は付き合ってやる、早く帰ろうぜ」
ボルホエールは計器類の異常が無いかを確認し、ホッと胸をなで下ろした。

「焼き肉かあ！なんかひつさしぶりだなあ！」

ボルライガーはレバーを操作し、街中に散らばっていた武器群をボルトカイザーに回収させた。

「…俺達…やったんだよな…」

見た沈み行く太陽は、膝をつく巨人を赤く照らし、彼らの努力と健闘を讃えていたようにも見えた…

…
…
…

高層ビルの屋上にいた影は、前々回の話で空矢を見舞いに来た、黒い長髪の女性であった。

「…本当に強くなったわね…電獣戦隊…」

長髪の女性は双眼鏡を目から離し、パツチリとした目を細めた。

「…かつての私に追いついた…ってところかしら…」

『それはないな、冷泉』

長髪の女性が振り返って撤収しようとした瞬間、その背後に巨大な（何か）が現れ、鋭い鉄拳が飛んできた。

「！」

長髪の女性は瞬時に跳躍し鉄拳をかわすと、その巨大な何かを踏み台にして跳躍し、着地と同時に。

『腕は…落ちていないようだな』

「…あんたは…あんたが噂の新総統ね…」

まるで新体操のような女性の軽やかな動きを前に、その巨大な何か…悪魔のようなサタン・イレイズは冷ややかに笑っていた。

『いかにも、我はサタン・イレイズ…』

サタン・イレイズは悪魔のような翼を広げ、女性を静かに威圧した。

「…サタン・イレイズ…」

『貴様に殺された、ツノイレイザー、ツメイレイザーの新たな姿だ
冷泉！』

サタン・イレイズは腕を振り下ろし、冷泉れいせんと呼びつけた女性に向かって衝撃波を飛ばした。

「…使うしかないわね…この状況じゃ…」

冷泉はビルの屋上を削って迫り来る衝撃波の前に、清涼スーツの胸ポケットから黒い電獣携帯を取り出した。

「電獣携帯！ボル ドラゴン！」

長髪の女性が右手に持った電獣携帯に変身コードを入力し、赤く染まる天にかざすと、その電獣携帯の竜の刻印が光り輝き、女性の周囲を包み込んだ。

「！」

電獣携帯が放つ黒い光に包まれた冷泉と呼ばれた女性に直撃する凄まじい衝撃波、凄まじい爆発が起こり屋上のコンクリートが砕け散り、黒煙が立ち上った。

『まさか…これで終わりではあるまい?! 冷泉…いや…ボルドラゴン!』

…果たして、サタン・イレイズに狙われた長髪の女性の正体とは

そして、空矢も回想にも登場したボル ドラゴンとは一体…

【次回予告】

それは、漆黒の世界から飛来せしもの。

それは、かつて光であつたもの。

黒と赤に染められたボディは狂気に染まり、夜の街を破壊する。

迎え撃つは、袂を分けた三人の兄弟。

【第十九話 奪われた0号機】

鋼の竜が、アスファルトの大地を蹂躞する。

第十八話 必殺剣が来た！（後書き）

この作品のご意見・ご感想をお待ちしております。

第十九話 奪われた0号機（前書き）

ボルドラゴン、冷泉薊の戦いは激しいものである。

しかし今、電獣戦隊のその力が人類に向けられようとしていた。

第十九話 奪われた0号機

凄まじい爆音が響き、薄暗い闇が支配するビルの屋上に黒煙が立ち上った。

『！！』

サタン・イレイズは黒煙の中から飛来する光線を閃知し、跳躍した。

「……ドラゴンガンが当たらないなんて……」

黒煙を断ち切り、女性の声が響く、その声は低く澄んでおり、殺気がこもっていた。

「ドラゴン・エッジなら……！」

その声の主、黒いマスクの戦士 ボル・ドラゴンは小太刀を構え、跳躍した悪魔の巨体を捉えた。

『くくくくつ！面白い！面白いぞ！ボルドラゴン！お前が こんなに小さく見えるとはな！』

サタン・イレイズはボルドラゴンの目の前に着地し、巨大で野太い腕で鉄拳を繰り出した。

「ぐうつつ！つつ……強い？！」

サタン・イレイズの腕はボルドラゴンの小太刀を叩き折り、その黒の戦士を吹き飛ばした。

『ははははっ！ボルドラゴン！抵抗してみせろ！でないと詰まらないか！』

サタン・イレイズはビルの屋上の床に叩きつけられながら吹き飛ば
ボルドラゴンを追いかけて、更に蹴りをかました。

「ぐうっ！ つっ…速いつ…?! このボル強化服0号でも追いつけ
ないなんて…！」

ボルドラゴンは凄まじい衝撃を受け、ビルの端まで吹き飛び、力な
く倒れた。

「もう終わりかボルドラゴン…あの時の強さはどこへ行った？」
サタン・イレイズは眉をひそめて、その巨大な足でボルドラゴンの
腹を踏んだ。

「…ぐっ…ぐうっ！ ああああっ！」

「最後は電獣戦隊の戦士どもの前で盛大に公開処刑をしてやるのか
?!」

呻き声をあげる黒の戦士の腹を、サタンイレイズは執拗に踏み潰し
た。

「どんな処刑がいい？ ボル・ドラゴン」

乾いた轟音が響いた、それは、サタンイレイズの足がビルの屋上の
床を踏み抜いた音であった。

「チッ！ 往生際の悪い！」

「強い…サタン・イレイズ！ このままじゃ電獣戦隊は…勝てない
！ぐふはっ！」

サタン・イレイズの一撃を回避したボルドラゴンは、肩で息をして、吐血しながらビルの谷間を落下していった

『… 逃げ足の速い だが、逃げても無駄だ』

黒い戦士を見失ったサタンイレイズは巨大な腕を組むと、すっきりと暗くなった夜空を見上げた。

「… 奴と電獣戦隊には 死よりも辛い地獄を味わわせてやる… そう、【あの計画】でな！」

サタンイレイズは黒き天を指差し、殺意に満ちた瞳を細めた。

翌日・GON基地 司令室

電獣戦隊の隊員用の三色の制服を着た空矢と海と陸が、早朝に収集された。

「長官、今日はなぜこんな朝早くから俺達を呼んだのですか？」

空矢は長官に向かって質問した、長官は彼らを呼び出したきり無言であり、物々しい雰囲気醸し出していた。

「大電獣の戦闘記録なら、昨日書いて提出したし… なんだろうな？」

「もう特訓は当分いらないぜ…」

眠そうな表情の陸と海をとりあえず無視し、長官は重い口を開いた。

「昨夜、GON関東支部特別諜報員、冷泉 薊あざみが、サタンイレイズと交戦し、負傷した」

三人は耳を疑った、そして冷たい空気が司令室内に流れた。
「なっ？！なんだって？！」

陸は目を大きく見開いて驚き、自らの坊主頭に手を添えた。

「薊さんが…？サタンイレイズめ…許せねえ…！」
海は頭を掻きながら怒りを表出させた。

「…そんな…薊が…サタン・イレイズと…？！」

空矢は頭の中が真っ白になった、と同時に基地内の治療室へと走り出そうとした。

「待て空矢！彼女は今、絶対安静だ！行くんじゃない！」

空気は司令官の叫びを聞き、足は止めた…しかしその体は小さく震えていた。

「…そんな…！何で…！何でなんだ！」

空気は司令室の壁を思い切り叩き、血が滲んだ手を握りしめた。

「サタンイレイズの攻撃を受けたダメージもつよいが…ボル強化服0号を使った衝撃がひどいようだ」

火車司令官は室内のモニターを起動させ、薊のレントゲン写真を映

し出させた。

「ボル強化服0号…ボルドラゴンになったのか…無茶しやがって…
あんなもん 人間が使うもんじゃねえ！」

海は舌打ちをした、彼の言う通り、ボル強化服0号は最強の力を発揮する反面、人間では耐えられないほどの負担を装着者に掛けるのである。

「…彼女は自らの意志で電獣携帯を持ち、戦っている、それを止めることなど 私にはできなかった」

火車司令官は目を伏せ、三人に背を向けて俯いた。

「……長官、俺、ちよつと行ってきます！」

空矢は再び走り出した、何かが吹っ切れたかのような表情で、彼は部屋を後にした。

「ちよ！ちよつと待てよ空矢！どこ行くだよ！？」

陸の静止も虚しく、司令室には再び静かな空気が流れた。

「…畜生…畜生 畜生！」

基地の出口から駄菓子屋に出た空矢は、怒りと悲しみをこらえて、あてもなく走っていた。

地底要塞ドリルガイヤー 総統室内

『サタン・イレイズ様、ついに…ついに（あの作戦）の準備が整いました！』

高僧の風貌をした大幹部・ゾールは暗黒の玉座に座ったサタン・イレイズの前で錫杖を振り上げた。

『よくやったゾールよ…よくぞ、三体の重電腦怪人で時間を稼いでいる内に、全ての準備を進めた』

サタン・イレイズは玉座に座ったまま、眼下のゾールを見下ろした。
『光栄でございます』

ゾールは錫杖を床に突き刺し、サタン・イレイズに向かってスキンヘッドの頭を下げた。

『しかし、ここからが本番だ！作戦の要である重電腦怪人を呼ぶのだ！ゾールよ！』

サタン・イレイズは巨大な腕を組み、瞳を見開いて叫んだ。

『ははっ！…現れよ！重電腦怪人ホリエデンノーよ！』

ゾールが錫杖を床から引き抜き振り上げながら叫ぶと、総統室の扉が開き、小柄なシルエットの重電腦怪人が現れた。

『ホリエデンノー！』

その重電腦怪人は、有名なジブリ映画である【紅○豚】の主人公のようなシルエットをもったホリエデンノーであった。

『宇宙への夢敗れた野心家よ！今こそお前の夢を叶える時だ！』

ゾールは錫杖を振り、ホリエデンノーを激励した。

『さあ行くのだ！貴様が夢焦がれた世界に… 今こそ！』

サタン・イレイズは玉座の腕かけのボタンを押し、地底要塞ドリルガイヤーを地面の上へと移動させた。

『ははっ！では、出撃するデンノー！』

ホリエデンノーは総統室内から飛び出し、ドリルガイヤーの廊下を走り出した。

『くくくっ！ホリエデンノー、彼の資金力で作り上げた有人ロケットを用いて電獣戦隊を壊滅させる計画…… 我ながら最高のプランよ！』

サタン・イレイズは束になった計画書を握りつぶし、悪意に満ちた笑みをこぼした。

『ホリエデンノーが人間であった頃 捕まる前に隠しておいた隠し財産と有人ロケット計画に目をつけるとは、さすがサタン・イレイズ様』

ゾールはサタンイレイズの手のひらで握りつぶされた計画書を見つめて呟いた。

『ゾールよ、貴様も早く有人ロケットに搭乗するのだ！この計画には貴様が 人間に近い形の重電脳怪人も絶対に必要なのだぞ！』

サタンイレイズは玉座に座ったまま、組んだ腕を離してゾールを一喝した。

『ははあっ！ゾール、参ります！』

ゾールは深く頭を下げ、錫杖を片手に走り出した。

『……………』

その背中を見つめて サタンイレイズは立ち上がった。

『…そろそろこのドリルガイアーも地上に浮上する頃だな』

サタン・イレイズの言うとおりである。

ドリルガイアーは幾層もの岩盤を砕いて地上に到達し、その仰々しい姿を現した。

『…さあ…行くのだ！ホリエデンノー！ゾールよ！』

サタン・イレイズは前に手を突き出して叫ぶ。

それと同時にドリルガイアーの上部に設置されている格納庫のシャッターが開き、巨大な深紅のロケットが姿を現した。

ドリルガイアー 格納庫内

『…くくく…私の夢がやっと やっと叶うデンノー！』

ホリエデンノーは格納庫の端に立ち、開放されていく天井から差し込む光と、その陽光に照らされていく巨大な深紅のロケットを見上げた。

『感慨に耽っている場合かホリエデンノー！今すぐ発射するぞ！』

ゾールは紫色の宇宙服に身を包み、梯子を登ってそそくさとロケットの中に入ってしまった。

『分かっていますデンノー！置いていかないでデンノー』

ホリエデンノーはゾールの後を追いつ、ロケットのコクピット内に移動した。

『…エネルギー注入完了、これでよし、ホリエデンノーよ！発射するぞ！』

比較的広いコクピット内で、ゾールはコンピューターを操作していた。

『了解ですデンノー！』

ホリエデンノーは敬礼をしながらシートに座り、その太い腕で無数のコンピューターを操作した。

『この作戦でイレイズは勝利し、人類の希望は消える』

電脳手術の際、そう彼はゾールに言い聞かされていた
だが彼は、自分の夢が叶う、それだけで心が躍っていた

『…俺は…俺の夢を叶えるデンノー…馬鹿な人間が何人泣こうか…知らないデンノー…!』

ホリエデンノーはカバーで覆われた赤ボタンを押し、野太い足でアクセルを踏んだ。

『…最終安全確認よし…ライブロケット発射だデンノー!』

「エネルギー臨界点、ライブロケット発射」

凄まじい衝撃がコクピット内を揺らす。

シートベルトをうっかり閉め忘れたゾールはシートから放り出されて壁にぶつかった。

『ぬぐうつ?!』

ゾールは予想以上の衝撃に驚きながら呻き声をあげるが、なんとか自力でシートに座り、シートベルトを閉めた。

『全く!なんて衝撃だ!』

ゾールは舌打ちをしながらモニターに映し出されている青い空と真空のボディが突き破る白い雲を見つめた。

『…ゾール様、あと数十分で目標地点に到達しますデンノー』

ホリエデンノーはメーターを確認し、燃料タンクの切り離し作業の準備をした。

『…くくく…そうか…ならば私もそろそろ準備しなければな…!』

ゾールは含み笑いをしながら再びモニターを見つめた。

『…全く…一人の男の夢が人間どもの夢を打ち砕く 皮肉なことよ
ホリエデンノーという電腦怪人の夢を利用し、イレイズの作戦を行
う。

自分がその作戦に参加していることが、ゾールにとっては愉快であ
ったのだ。

『…ようやく…宇宙に行けるデンノー！』

既に地上は見えなくなっており、ロケットは二次加速を始め、地球
の成層圏に近づいていた。

…重電腦怪人ホリエデンノー…
大幹部ゾール…

彼らは如何なる手段で電獣戦隊を倒そうとしているのであろうか

軌道衛星 ボルライトブリッジ内

軌道衛星ボルライトは防衛組織GONが初期に作り上げた直径18
0メートル級の衛星基地である。

「小型偵察機03帰還、この画像から判断すると 地上から迫る物
体はロケットだ！」

ボルライトは有人の衛星であり、その内部には数十名のGON隊員
が宇宙服を着ながら働いている。

「ロケットだと?! 何かの発射実験なのか?」

GONが誇る超技術によって作られた数々のメカニック（超超高感度対地カメラ・総合通信システム等）があり、地上で戦っている電獣戦隊を影ながらサポートしていた。

「おい! どうなってやがんだ?!」

比較的広く、人工重力のあるブリッジ内で緊急事態を示すけたたましいサイレンの音が響く。

その密閉された空間の中で、数十名の隊員達が焦りながらコンピューターを操作していた。

「仕方ない、ボルトレーザーの準備をしてくれ、それと 地上の電獣戦隊にも連絡をとるんだ」

ボルライトの責任者である男、山魅 一郎は冷静に対処し、隊員達に指示を出す。

それもまた責任者に必要な能力であり、彼が責任者に選ばれた理由の一つである。

「りよ! 了解! 迎撃システム起動! ボルトレーザーの砲台起こします!」

女性隊員がコンピューターを操作し、武器システムを起動させる。因みに、ボルライトの隊員が武器システムを使うのは演習以外では初めてである。

「システムW、ボルトレーザーを起動させて、出力は最大レベルで」

「システム起動、ボルトレーザー発射準備完了、標準合わせに必要な時間は三分 45秒」

ボルライトの巨大なボディから一門のレーザー砲がせり出し、ブリッジ内のコンピューターが機械音の声で現状を報告した。

「火車司令官！聞こえますか！？緊急事態です！ボルライトに正体不明のロケットが迫っています！最悪の 最悪の状況です！」

通信班の隊員の一人が通信システムを起動させ、GONの東京支部に連絡をとった。

「なんですって？今は司令官は今、関西支部で会議中なのに…」
通信が繋がった東京支部は司令官が不在らしく、同じく通信班の人間が呼びかけに答えていた。

「兎に角、電獣戦隊に宇宙戦力は無いのでこのロケットには対処できないかもしれませんが もしロケットやこのボルライトが地上に落下するようなことがあったら…その時は 迷わず撃破して下さい！」

「分かりました、とりあえず司令官と連絡をとってみます」
通信班が要件を言い終え、通信を切った瞬間、衛星内に衝撃が走った。

「そんな 有り得ない！」

「ボルトレーザーが弾かれた?!」

正体不明のロケットが、ボルライトが数回発射したボルトレーザーを弾いたのだ。

「ボルトレーザーエネルギーダウン、予備エンジン起動」
機械音が絶望的な現状を報告する、要塞内は静まり返った。

「仕方ない、格納庫を破棄し、退避する、脱出ポッドを用意するんだ」

責任者である一朗は瞳を細めた、彼にとって初めての苦汁の決断であつた。

「了解です 脱出ポッド、N o 1 から N o 4 7 までに酸素を注入、サバイバルシステム起動！」

隊員は脱出ポッドのシステムを起動させ、脱出の準備を始めた。

1分1秒を争う事態に、皆の顔は強張り、その指先は震えていた。

「正体不明のロケット、第三次加速を始めました！この軌道は 確実にこのボルライトが目標地点です！」

オペレーターが更に悲しい事実を伝える、皆はありつたけの酸素ボトルを宇宙服に装備し、退避の準備を完了させていた。

「第一格納庫切り離し作業終わりました、これより宇宙に破棄します」

彼らは無数の特殊合金で形成された格納庫を破棄し、その巨大な四角形の鉄の塊は漆黒の世界に放たれた。

「格納庫は脱出ポッドから遠隔操作で爆破する、みんなは脱出ポッドまで移動するんだ」

責任者である一朗の頬を一筋の冷や汗が落ちる。

彼は息を呑み、そして隊員達一人一人の顔を見回し、長かった月日を回想した。

「了解！」

隊員達は脱出ポッドを起動させ、速やかにブリッジから退避を始めた。

「…なんなんだあのロケットは…！突撃で　ボルライトを破壊しようとしているのか？！」

隊員達は不安と悲しみに包まれながらも、次々と脱出ポッドの中に入っていった。

「…すみません…火車司令官…」

数十人の隊員達は涙をこらえながら、その衛星に向かって敬礼をした。

ライブロケット　コクピット内

『デンノー！さあ、ゾール様！今から突貫するデンノー！』

ロケットのコクピット内では、加速の衝撃に耐えホリエデンノーが舵をとっていた。

『わかっておる！…少し黙っておれ！』

コクピット内の通信機からゾールの叫び声が響く、しかしそこにゾールの姿は無かった。

『りょ！了解ですデンノー！』

宇宙服を着たゾールはロケットの甲板の上で座禅を組み、瞳を細めて広大な宇宙を見つめた。

『…まだ見えぬ…』

ロケットは加速する、もう肉眼でも衛星は見えている。
いや、もう視界はあてにならない。

宇宙空間では遠近感が鈍る 感じるしかない。

…閉じかけた視界に脱出ポッドのようなものが見えた…

『ゾール様！通過してしまうデンノー！』

宇宙服にホリエデンノーの声が響く、とりあえず無視した。

『…今だ そこに そこにある！』

ロケットが巨大な衛星に接近すると、ゾールは瞳を大きく見開いて立ち上がり、錫杖を振り上げた。

『でえええいッ！』

ゾールは鎖付きの錫杖を投擲し、衛星から分離していく、黒く巨大な四角い物体に突き刺した。

『とらえたッ！』

ゾールはロケットの甲板から飛び上がり、右手に持った鎖を手繰って錫杖が突き刺さった黒く巨大な物体に向かって移動した。

『ふはっはっはっ！ サタン・イレイズ様！私は 私はたどり着き

ました！」

ゾールは黒く巨大な物体に接近すると、突き刺さった錫杖を引き抜き、物体の表面にあった人間サイズのシャッターをこじ開けた。

『情報によれば…この格納庫の中のはずなのだが…』

ゾールはこじ開けたシャッターを宇宙へ放り、その四角い巨大な物体の内部に潜入していく…

「…情報通りならいいが…」

その四角い巨大な物体は、衛星　ボルライトから分離した格納庫であつた。

『…暗くて見えんな…　電気をつけてみるか』

ゾールは薄暗い格納庫の中で壁伝いに移動し、やっと見つけたボタンを押し、格納庫内の明かりをつけた。

『……………！』

眩しい明かりが照らされた瞬間、ゾールは眼前に黒く巨大な物体があることに気づいた。

『これが…電獣戦隊が最も初期に作り上げたという…鉄の竜か！』
くろがね

それは明かりに照らされて黒光りする、巨大な鋼の竜であつた。

……

電獣戦隊には、電獣が三体存在している。

電獣1号機・スカイコンドル。

電獣2号機・マリンホエール。
電獣3号機・ガイアライガー。

そして電獣空母であるボルトマンモス。

…しかし、今、ここにある電獣は、この四体の電獣の雛形である最も最初に作られた電獣…その名も…

『…電獣0号機…スペースドラゴン…』

ゾールがその鉄の竜…スペースドラゴンの腹の下に移動し、コクピットに乗り移ると、エンジンが起動し、その黒いボディの各所から蒸発した冷却水が噴射された。

『よし、まずはコンピューターを制圧せねば…』

ゾールはコクピット内の電源を起動させ、モニターにパスワード画面が現れた。

『…ぬうつ…』

ゾールが眉をひそめて四苦八苦していると、コクピット内の通信回線が勝手に開いた。

『ゾール様！スペースドラゴンのコンピューターは私がハッキングしておいたデーンノー！』

格納庫の周囲の宇宙で動きを止めたロケットから通信が入る。

ホリエデンノーは自らの特殊能力であるハッキングを発動させ、スペースドラゴンのコントロールを奪っていた。

『でかしたぞホリエデンノーよ！後は最初の計画通りしてよいぞ！』

ゾールは再びモニターを凝視し、複雑なコンピュータをなんとか操作し、スペースドラゴンを完全に起動させた。

『わかりましたデンノー！さようならゾール様！サタン・イレイズ様　ありがとうございますでしたデンノー！』

ホリエデンノーの歓喜の声と共に、スペースドラゴンのコクピット内の通信が切れ、通信回線からは砂嵐のような音が響いた。

『……　行っただけ』

電獣奪取の最初の計画はスペースドラゴン奪取後、ホリエデンノーはそのままロケットによる宇宙航行に出るというものであった。

『……さあスペースドラゴンよ……今こそお前の力で電獣戦隊を滅ぼすのだ！』

ゾールは瞳を見開き、スペースドラゴンのレバーを握り、思い切りペダルを踏んだ。

「ギャアアイイイイ！！」

鋼の竜の叫び声が宇宙に響き、その黒い巨大が躍動すると、一瞬にして格納庫は粉碎された。

『全速前進！　大気圏突入準備　！』

ゾールはスペースドラゴンを加速させ、地球の引力圏へと移動させ

た。

『見ていて下さいサタン・イレイズ様！ 電獣戦隊は私が地獄送りにしてやりますデンノー！』

…

東京都 ビル群

既に日本は、夜になっていた。

夜の街は活気に満ち、人々は疲れきるまで眠らないようにも見えた。

「…なっ！てめえっ！ふざけんなよ！」

「んだとコラ！殺したるか？！」

ビルが立ち並ぶこの区域には若者やサラリーマン、様々な種類の人間が行き交っていた。

「…おい…君達！やめないか！……ん！！？」

若者同士の喧嘩を仲裁する夜回り先生、しかし…その視線はすぐに天空へと注がれ、彼は空を指差した。

「なんだよジジっ ……な！！？」

喧嘩を仲裁されている若者は夜回り先生の指先を見つめて、口をポツカリと開けた。

「…なんだよ……………ありゃあ…！」

彼らは度肝を抜かされた、喧嘩は中断された。

と、言うより、そんな状況では無かった。「なんだ！？あれは！」眼鏡を掛けたサラリーマンが空を指差す。

そこには、黒い夜空を背に吼える巨大な黒い竜が飛行していた。

『…人間どもよ恐怖せよ！貴様らの希望であつた電獣戦隊は今日、死ぬのだ！』

迫り来る黒い竜から悪意に満ちた声が響く。

「ギャアアイイイイイッ！」

その声は竜の雄叫びと重なり合い、街の人々を恐怖させた。

GON基地 司令部

「状況は…状況はどうなってるんですか？！司令官！」

電獣戦隊の三人の戦士は電獣携帯により緊急召集を受け、私服のままでGON基地へと急行した。

「落ちて着け空矢、今から状況を説明する」

GON基地内では、電獣戦隊の三人の戦士が壁のモニター通信を用いて不在である火車司令官の指示を受けていた。

「スペースドラゴンは現在、東京中心部を目指してビル街を進んでいる、…死傷者もかなりの数だ」

状況を説明している司令官は難しい顔をしながら、モニター越しに三人の戦士を見つめた。

「スペースドラゴンが奪取されるなんて イレイズめ」
海は舌打ちをしながら拳を握りしめた、三人の中でも人一倍イレイズへの敵意が強い彼の瞳は怒りに燃えていた。

「…機動戦士ガリダムじゃあるまいし、なんでそんな簡単に奪われちゃうかなあ」

陸は誰にも聞こえないように静かに呟き、拳を握りしめた。

三人はそれぞれ思い思いのことを考えているようであったが、全く予期していなかった事態のために三人とも共通して緊張しているようであった。

「空矢、海、陸、ボルトカイザーでスペースドラゴンを捕獲、もしくは破壊するんだ」

火車司令官の指揮の元、三人の戦士達はモニターに敬礼した。

「… 了解！電獣戦隊出撃します！」

空矢は敬礼を終えると、モニター中央のボタンを押した。

「電獣空母ボルトマンモス、発進準備よし 搭乗せよ！電獣戦隊ボルトマン！」

「よし ！いこうぜ！空矢！海！」

巨大なモニターは左右に開放され、内部の巨大格納庫への入り口へと変化し、電獣戦隊の三人は格納庫内のボルトマンモスへと走り出した。

「変身するぞ！陸！海！」

空矢は陸と海を見つめてズボンのポケットから電獣携帯を取り出した。

「ああ！… スペースドラゴンを… ぶっ潰してやろうぜ ！」

海はスーツの胸ポケットから電獣携帯を取り出し、素早く変身コードを入力した。

「奪い返すくらいの気持ちでいこうぜ 空矢！」

陸はジャージのポケットから電獣携帯を取り出すと、手早く変身コードを入力した。

「ああ！」

（ボルドラゴンが乗るはずだったスペースドラゴンがイレイズに奪われたなんて 薊が知ったら、あいつ また無茶しやがるだろうかな）

空矢は焦っていた。

電獣スペースドラゴンはボルドラゴン・冷泉薊が駆るはずであった機体である。

そのスペースドラゴンがイレイズに奪取され、街を破壊しているこ

とを彼女が知れば悩むに決まっているからだ。

「電獣携帯！ボルコンドル！」

だからこそ、彼は負けられない。負けるわけにはいかないのだ。

「待つてろよスペースドラゴン！お前は必ず奪い返してみせるぜ！」

ボル強化服に身を包んだ三人の戦士はボルトマンモスに搭乗し、電獣の格納庫へと走った。

敵となったスペースドラゴンはボルトカイザーの兄弟機である。

その強大なる力に、勝利することができるのであろうか。

続く

【次回予告】

大電獣ボルトカイザーとスペースドラゴンの激しい戦闘が始まった。

砕け散る鋼と鋼、そして必殺技がぶつかり合い、火花を散らす。

そして、激しい戦いの中で大幹部ゾールの体に異変が

【第二十話 死を呼ぶ大電竜】

何かを犠牲にしなければ、人は力を手に入れることができないので

あろつか

第十九話 奪われた0号機（後書き）

改訂版です。

第二十話 死を呼ぶ大電竜（前書き）

イレイズのスペースドラゴン奪取計画は、最終段階へと移行した。

電獣対電獣の最悪の戦いが始まったのである。

第二十話 死を呼ぶ大電竜

ボルトマンモスから発進した三体の電獣は電獣合体し、スーパーロボット・ボルトカイザーへと姿を変えた。

「完成！大電獣 ボルトカイザー！」

ボルトカイザーは闇夜の街を加速し、その漆黒の闇と鼠色のビルの間を向こうでから迫り来る鋼の竜の熱源を感じた。スペースドラゴンは、東洋の龍のような鋭い爪をもった小さな三本指の腕が四本あり、ドリルのような太い尾を持っていた。

「コンドル！ボルトライフルを使い！」

ボルホエールはコクピット内で電獣携帯を操作し、ボルトマンモスから電柱ほどのライフルを射出させた。

「先手必勝だぜ！コンドル！」

ボルトライザーはボルトカイザーを跳躍させ、頭上に射出されたライフルを握らせた。

「ああ！一気に追い詰める！ライフルセット！」

ボルトカイザーはアスファルトの大地に着陸しライフルを構えて走った。

ビルは複雑に建ち並んでいたが、機動力と瞬発力に秀でたボルトカイザーの障壁にはならなかった。

「標準セット いけるぜ コンドル！」

ライフルの十文字の標準が熱源の中心を捉えた。

向こうからは反撃はできないはずである。

迫るスペースドラゴンはまだ遠く 二十キロメートル程度の距離があったからである。

コンドルはモニター内の標準を真つ直ぐに見つめて、レバーの親指の場所に位置する赤色の引き金を引いた。

「ボルトライフル！ いっけええい！」

ボルトカイザーは立ち止まり、大地を踏みしめてボルトライフルの引き金を引いた。

罅の入る足元のアスファルト。

その直線的で無骨な形をしたライフルのバレルは長く展開し、発射された銀色の弾丸は暗闇を引き裂き、ビルの谷間をすり抜けて一気に加速した。

『来たか 電獣戦隊 だが！』

街中を加速し迫り来るスペースドラゴンは角の映えたその竜の顔で弾丸を睨みつけると、機体各部のバーニアを噴射させて一気に旋回した。

「なにっ？！ 乗っているのはゾールか？！」

その声に驚き叫ぶ陸、まさか幹部が乗っているとは思わなかったのであらう。

『今日こそこのゾールと このスペースドラゴンの力で完全に粉砕してくれるわ！』

旋回したスペースドラゴンの太い尾は回転しながら弾丸を弾き、旋回を終えたその竜は無数のビルの上に体に乗せた。

「ボルティックドリルで弾いた?!」

コンドルはスペースドラゴンのその俊敏な動きに驚き、ボルトカイザーを再び走らせ敵との距離を詰めた。

『中距離武装を開放するのだ! 我らイレイズの手に落ちたスペースドラゴンよ!』

ゾールは武装開放コードを口頭で入力し、黒いレバーに埋め込まれた赤いボタンを押した。

『エネルギー収束高熱火球弾! 発射!』

ゾールの低い声がスペースドラゴンによって拡声され夜の街中に響き渡る。

スペースドラゴンの展開された口にマグマのように光を放つ火球が現れ、その鋼の竜の瞳が赤く光り輝くと同時に一気に放射された。

「マズいぜこりゃあ! ボルトシールドっ!」

焦りながらレバーを引くライガー。

次の瞬間ボルトカイザーはライフルを投げ捨て、ボルトマンモスから射出された盾を受け取り右腕で構えた。

「くっ…さすがに二発目に当たったらアウトだぜ…! どうする…?」
舌打ちをするホエール。

火球は盾にめり込み、その熱はボルトカイザーの右腕の指の装甲を溶かした。

「ドラゴンブレスはチャージに時間がかかる…危険だが接近して戦うしかない! ボルトメーザー!」

コンドルは右のレバーを引いた。

ボルトカイザーは迫る黒き竜に歪んだ盾を放り投げると、ボルトマンモスから射出された日本刀のような刀、ボルトメーザーを握りしめた。

『スペースドラゴンよ！人型形態へと可変せよ！接近して叩くのだ！』

ゾールは口頭で可変コードを入力した。

すると鋼の竜は迫る盾を牙で盾を受け止めると、無数のビルの上から体をどけ、巨大なバーニアを脚部に變形させ巨大な体を大地に立たせ變形を始めた。

「見るよホエール！ゾールの野郎！スペースドラゴンを帝竜變形させてやがるぜ！」

ライガーはモニターを見つめながら驚いた。

まさか敵がこんなにも電獣を乗りこなせているとは思わなかったのであらう。

「なぜだ！？なぜレイズの幹部が近距離戦に合わせてスペースドラゴンを人型形態に！帝竜王に帝竜變形させられるんだ！」

ホエールはガウォークのような形態から腕を内部に格納させ可変していくスペースドラゴンを睨みつけた。

二人が驚くのは無理も無いことである。

スカイコンドル・マリンホエール・ガイアライガーの人型形態への合体（電獣合体）やスペースドラゴンの人型形態への變形（帝竜變形）やはGON内でも機密扱いであるからである。

「變形が終わる前に倒すんだ！ボルトブレイカー！」

コンドルは好機を見逃さず、2つのレバーを同時に引いた。

可変していく鋼の竜に向かつて一気に走るボルトカイザーの腕は数千万ボルトの雷を運び、その電撃はボルトメーザーへと収束した。

「ボルトメーザー・サンダーロケッター！」

ボルトカイザーは雷を運びたボルトメーザーを天に翳し、変形を終えようとしているスペースドラゴンへと投げつけた。

『遅かったな！変形は完了させてもらったぞ！…電獣戦隊！』

スペースドラゴンは人型形態への変形を完了させ、その尾が可変した右腕のドリルで雷を運びて迫り来るボルトメーザーを弾き飛ばした。

「帝竜変形を 完了させたのか？！」

固唾を呑むコンドル。

変形を完了させたスペースドラゴンの左腕のドリルはボルトメーザーを弾いた衝撃で砕け散り、その内部から人間と同じ手が出現した。右腕は宇宙竜形態の際に頭部だった部位であり、竜の顎が開かれており、狂暴な牙が煌めいていた。

『…やはりこの形態は…格闘戦が主体のようだな』

ゴーグル状のカメラアイが光り輝くと共に、放熱ダクトから蒸気と化した放熱剤が放射された。

「これが…帝竜王 ドラゴンエンペラーか！？」

ホエールは実戦で初めて見るその人型のスペースドラゴン…ドラゴンエンペラーを前に驚いた。

『…ほう…この形態はドラゴンエンペラーと言うのか…！』

ゾールは帝竜王のコクピット内で邪悪な笑みをこぼした。

『まあ 名前など どうでもよいがああッ!』

ドラゴンエンペラーはボルトカイザーの間合いに踏み込み、さらに一步踏み込んで右腕のドラゴンの顔面で鉄拳を繰り出した。

「好き勝手放題やらせるかよ ボルトアックスで 潰してやる!」

ホエールはレバーのボタンを押し、ドラゴンエンペラーを睨みつけた。

「でええええいッ!」

ボルトカイザーは射出された斧を振り上げ、黒き帝竜王に向かって一気に振り下ろした。

『馬鹿めボル ホエール! ロボットに乗っても……間合いが……!』

ボルトカイザーの振り下ろした腕は震えながらそれ以上は動かなかった。

「なにっ?!」

ボルトアックスはドラゴンエンペラーの右腕の竜の牙によって受け止められ、その顎は万力のようにボルトアックスを締め付けた。

『間合いが遠いわあッ!』

ゴキリという音が鳴り響きボルトアックスは折れ、ボルトカイザーはその枝の部分だけとなった斧を手放した。

「くっ! 何をッ!」

ホエールはゾールの叫びを聞き、怒りに腕が震えた。

「まずはあの口を塞ぐ! ボルトチェーン!」

コンドルは武器射出コードを入力し、右のレバーを引いた。

ボルトカイザーはボルトマンモスから射出された鎖の長いヌンチャクのような武器を持った。

「当たれえっ！」

ボルトカイザーの握りしめたボルトチェーンは再び鉄拳を構えるドラゴンエンペラーに向かって振り下ろされた。

『次はヌンチャクか よくもまあ武器が出て来る！』

ドラゴンエンペラーは右腕の顔を射出し、その口にボルトチェーンの鎖を挟ませて吹き飛ばした。

「ボルトチェーンが?!」

『漢^{おん}は刀で 充分であろう?!』

明後日の方向へと吹き飛んでいく竜の頭部をよそに、ドラゴンエンペラーはボルトカイザーとの距離をとり、脚部に搭載された二本の長大なダガーを握りしめた。

「くっ！イレイズに…悪魔に魂を売った時点で…漢でも人間でもねえ…てめえは…てめえらは化け物なんだよッ！」

ホエールは怒りに燃える瞳で計器類を確認すると震える指先で装置を操作し、ボルトカイザーの全てのエネルギーを収束させていく

「全エネルギー解放！コンドル もうボルトカイザーも限界だ！電獣剣で一気に決めてくれ！」

ホエールは、モニターを通してコンドルに通信をり、コクピットにセットされた電獣携帯のエンターキーを押した。

「あ ああ！他の武器も通用しそうにないしな 電獣剣で倒す！」
コンドルはいつも以上にヒートアップしている海に圧倒されながらも、力強くペダルを踏み、それと同時にボルトカイザーは大地を力強く立った。

「来い！電獣剣！」

ボルコンドルが叫び、コクピットにセットされた電獣携帯のエンターキーを押すと、ボルトカイザーは黒き夜空に右手を振り上げた。

『終わりだ！電獣戦隊！ボルトカイザー！ 豪拳流・剣技 最終奥義！』

ドラゴンエンペラーは両肩を水平に横に降り、その二つの刀身に全てのエネルギーを収束させた。

その瞬間、ボルトカイザーが天空にかざした右手に鋭く太い両刃の剣が飛来した。

「電獣剣！盛者必衰斬り！」

三人の叫びがそれぞれのコクピット内で重なり合う。

現れた沙羅双樹の木々を背に、ボルトカイザーは電獣剣を構え、その翡翠のような光を放つ剣を円月殺法の要領で半回転させた。

『二刀旋風・大激斬！』

一方、ゾールの叫びと共に、ドラゴンエンペラーは回転を始め、水平に構えられたダガーはかまいたちを発生させてそのボディを包み込んでいく。

『滅！壊！消！』

ドラゴンエンペラーは螺旋の旋風となり、一気にボルトカイザーへと迫った。

「でええええいつ！」

振りおろされた光り輝く電獣剣は旋風と化したドラゴンエンペラーとぶつかり合い、凄まじい衝撃が周囲のビル群を崩壊させていく

『うがああああッ！』

旋風はボルトカイザーの首を切り裂き、ボルトカイザーの頭は吹き飛んだ。

「コンドル？！うがあああッ！」

ホエールは吹き飛んだ頭部のコクピット内のコンドルに呼びかけたが、凄まじい衝撃で通信は途絶していた。

『があああつ！さ サタン・イレイズ様に逆らうものは あ 悪だ！悪は 自らの力で 滅ぶが いい！』

ドラゴンエンペラーの旋風は天にも届くような力で更に勢いを増し、盛者必衰斬りを続けるボルトカイザーの左肩部分を切り裂き、肩ごと腕を吹き飛ばした。

「ホエール！ちっ 畜生！」

頭部と左肩ボルトカイザーのボディは勢いを失っていく旋風によって吹き飛ばされ、一気に全身の装甲が砕け散った。

「ぐはっ！」

吐血するライガー、吹き飛ばされたボルトカイザーは巨大なビルにめり込んでいた。

「…ボルトカイザーが 大破した…」

コンドルはコクピット内でレバーを握りしめたまま息を呑んだ。既にボル強化服の赤きマスクはモニターの破片が刺さって割れ 血も少し混じった汗だくの顔が露出していた。

「…畜生…畜生……！」

思い切り吹き飛ばされたボルトカイザーの頭部と肩部は瓦礫の中に埋もれており、身動きのとれない状況であった。

瓦礫の中からボロボロのボルコンドルとボルライガーが現れ、ライガーと同じく拳を構えて巨大なドラゴンエンペラーを睨みつけた。

数秒後、歩いていたドラゴンエンペラーは大破したボルトカイザーとぶつかり、前のめりに転倒した。

「…死んでるわね…あれは…」

三人の電獣携帯から聞き慣れた女性の声が響く。その発信コードは、ボルトマンモスから送信されているものであった。

「そ…！その声は…薊… 薊なのか？！」

驚くボルコンドルをよそに、ホエールは倒れたドラゴンエンペラーを前に瞳を細めた。

「ぐっ … 封印されるほどのドラゴンエンペラーの強い負担と… 自らの必殺技の負担に耐えきれなかったのか… ゾールは …」
ホエールはパタリと倒れ、静かに瞳を閉じた。

「…勝った … とはい言難いな… あああ… … カレーが … 食いたいなあ」

簡単に言い捨てると、ボルライガーもパタリと倒れた。

既に疲労は陸の体の限界を越えていたのである。

「…薊… なんて お前… … 絶対安静じゃなかったのかよ …」

ボルコンドル…空矢は瓦礫の上にバタリと倒れながらも、途切れかけた意識を集中させ、その女性…冷泉薊に呼びかけた。

「…悪いわね空矢、私に倒れている時間は無いのよ…私は…ボルドラゴンなんだから…」

電獣携帯からは、決して元気には聞こえない薊の音が響いていた。
「……………なん でだ……………薊」

空矢は絶対安静のはずの薊を戦場に出させてしまう無力な自分と、今でもボル ドラゴンという力への対価を支払っているであろう薊の境遇に、静かに泣き そのまま眠りについた。

なんでいつもそうやって自分一人で抱え込もうとするんだ？

という一言を薊に言えなかったことが、空矢にとってとても心残りであり、無念でもあった。

【次回予告】

ツチノコ。

それは幻想か、はたまた現実の動物か。

ツチノコとは、一体何なのであろうか…

そして、ツチノコ爆弾とは一体…

【第二十一話 ツチノコ爆弾を拾うな】

まあ、爆弾だから爆発するんだろうね…

第二十話 死を呼ぶ大電竜（後書き）

次回はドラマメインの話で一話完結します。

最近ロボットばかりだったので新鮮な気持ちで頑張ります。

第二十一話 ツチノコ爆弾を拾うな（前書き）

ツチノコ爆弾、それは残虐非道な殺戮兵器である。

第二十一話 ツチノコ爆弾を拾うな

群馬県 森林内

少し都会から離れた、田舎の山。
ここでは現在、地元の中学生や地方自治体によるゴミ収集活動が行われていた。

「あゝあゝやってらんないよなあゝこんなにゴミ拾ってんのになんにももらえないんだぜ」

中学二年生とおぼしき少年が保護者の男性と共に、歩道の横にある木々がアンバランスに生えた傾斜のゴミを拾っていた。

「まったく、お金のことしか言えないのかお前はあ……」
眩しい日差しを手で防ぎながら、保護者の男性は泥のついたアダルト雑誌をちらちら見ていた。

「……うわっ……きつたねえ」
少年は呆れる保護者を無視し、木の根元にある汚い空き缶を拾い上げた。

「ん…？なんだ…？！」

少年は近くの草むらから響いた物音に気づき、空き缶を放って駆け寄った。

「つつツチノコ？！まさか……！」

少年はびっくりして口をあぐりと開けた。

「なにっ？ツチノコだって？！」

驚く保護者をよそに、少年は草むらの中で蠢く長いツチノコをよく観察した。

「弱ってるのかな…？」

少年は木の棒でツチノコをつついてみた。

ツチノコは弱っているようで、反応が鈍く、瞳を閉じていた。

「よし　つかまえてやる！一攫千金だ！」

少年は意を決して、両腕を草むらに伸ばしツチノコを捕獲しようと試みた。

「よし！やったぞ！これで俺も億万長者だ！」

少年は物差しほどのツチノコを両腕で捕らえると、天に掲げて眩しい日差を浴びせた。

「……ん……？…なんだこいつ　？！」

その瞬間であつた、凄まじい閃光が周囲を包み込んだのは

G O N 基地　司令室

先の電獣奪取事件から3日が経過したG O N基地の司令室内には、火車司令官とG O Nの制服に身を包んだ冷泉薊しかいなかった。

「群馬県南部の森林内で謎の爆発物による死傷事件が多発している」

関西支部から帰還した火車司令官は怪訝な顔をしながら、司令室内のモニターを起動させた。

「被害者は現在21人 死体や金属片の鑑定の結果、いずれも高性能爆薬による爆発であることが分かった」

司令室内のモニターに被害者の死体の画像が映し出された。数秒間隔で移り変わる画像に写った死体は、そのどれもがもうミンチ状態であった。

「イレイズの仕業 というわけですか？ 火車司令官」

黒いスーツの女性 冷泉薊は画像を静かな瞳に映し、司令官に質問をした。

「それを確認して欲しい」

火車司令官は苦しい顔をしながら冷泉を見つめた。

「電獣戦隊がいない今 君だけが頼りだ、頼んだぞ冷泉」

司令官の言うとおりであった。

電獣戦隊の三人は先の戦いの傷が癒えていないので治療室内にて治療を受けている状態なのである。

「了解、冷泉薊 行動を開始します」

冷泉薊は司令官に一礼すると、部屋を後にして基地内を走り出した。

（…まずは 現場に行ってみないと…）

薊は基地から出ると、駄菓子屋（磯八）で数個の駄菓子（うまい棒）を二本買い、駐車場に停車してあった黒い装甲車に乗った。

「…だいぶ…壊されたみたいね」

装甲車を操作しながら。

視線の横を流れ行く街並みは、先の戦闘でいたるところに傷ができており、人々の顔にも少し元気の無いようにも見えた。

（…次は 絶対こんなことにはさせないわ …絶対に…！）

薊の瞳の奥で静かに燃える炎、自分が乗るはずだった電獣が街を壊し 大電獣を大破させた…

彼女はそれが全て自分の責任であるかのように感じていた。

（私が…スペースドラゴンを乗りこなせていれば 封印されることもなかった…敵に奪われることも無かったはず…）

群馬県 森林内

「ここが爆発のあった場所ね…」

薊は粉々になつた金属片が散らばる草むらに立ち、道路脇に供えてある無数の花を見つめた。

「…もう これ以上犠牲者を出させはしないわ」

薊が振り返り、木々の奥に視線を戻すと、ガサツという物音が太木の太い幹の向こうから響いた。

「爆弾っ!？」

薊は竜の刻印が刻まれた黒き電獣携帯を構え、一瞬で戦闘体勢を整えた。

…しかしその物音は、爆弾というには大きすぎる音であつた。

「ええっ?!」

大木の幹の裏から出て来たのは、探検家のような緑の服に身を包み、バックを背負つた高校生くらいの少女であつた。

「あなたは…確か関西支部でガイアライガーのテストパイロットをしていた」

驚きながら話す薊の顔を見つめて、少女はキャップの帽子に手を当てて駆け寄つた。

「はい！ボクはGON関西支部所属のボルトマン候補生、巽 勇つ

ス！」

勇はニツコリと微笑みながら敬礼した。
年齢が分からなくなるくらい屈託のない笑顔に、薊は内心驚いていた。

「あなたも調査に来たの？」

首を傾げながら質問する薊に、真面目な顔で頷いた。

「はい、ボクも関西支部の司令官に言われたっス」

「なら、あなたも私と共に行動して、私は冷泉 薊、関東支部の人間よ」

冷泉は小綺麗な名刺を勇に手渡し、静かに微笑んだ。
それは勇とは対照的な微笑みであった

「了解です！ボク、頑張ります！」

「じゃあ、まず森の奥を探してみましよう」

勇は薊の指差す方角を見つめて頷き、その傍らで歩き出した。

「…速いわね、あなた」

薊は勇の足の速さに少し驚きながら、木々の奥へと歩いていった。

「足だけは…念入りに鍛えてるんっス、ボク…鍛えて 早く電獣戦隊に入って…みんなを守りたいんです」

冷泉は勇の言葉に反応し、真剣な顔つきで立ち止まった。

「命を捨ててでも 人の心と命を守る、あなたは…それができそう?」

薊は、電獣 一つの誓いを要約した言葉を投げかけた。

立ち止まり見つめ合う二人、静かな森の中を重たい空気が流れた。

「ボクが死ねば…親が 知り合いが悲しみます…だからボクは命を捨てるような事態にならないように鍛えます、それでも駄目なら…また鍛えるだけです！」

「そう…、なら 頑張りなさい、辛いとは思っけど」

薊は、その少女の真っ直ぐな瞳に圧倒されたような気がしていた。

「ありがとうございます！ボク 頑張ります！人の心と命を守るために！」

額の汗を拭きながら答える勇、その瞳の中の炎と決意は、誰にも否定できるものでは無かった。

（…よく見たら この子、重金属ジャージを服の中に着込んでるわね……）

かく言う薊も、服の下には重金属ジャージを着込んでいた。

それは ボル強化服の反動に耐えるためである。それが…戦う者の宿命でもあった

「…ん……?!」

木々の間に廃棄されている車が蠢き、凹んだドアがギリギリと開いた。

「なにっ!？」

「なにかありましたっすか!？」

薊が再び電獣携帯を構えると、その傍らに小銃を構えた勇が駆けつけた。

「今、その廃車から…何かが出たわ」

「そういえば…ガサガサ音がするっすね」

二人の眼前の草むらから響く、鉄と砂とがぶつかり合う音は次第に近くなり、静かな森林は緊張に包まれた。

「やるしかないわね 電獣携帯！」

薊は電獣携帯を広げて変身コードを入力した。

「ボル ドラゴン！」

電獣携帯の刻印は光り輝き、その閃光は黒い粒子となって薊の体を包み込んだ。

「…黒い ボルトマン?!」

勇が驚き、薊が黒きマスクの戦士、ボルドラゴンに変身すると、木々の影から一体の太い何かが飛び出した。

「ドラゴン エッジ！」

ボルドラゴンはメタリックに光り輝く小太刀で斬撃を繰り出し、迫り来る影を一刀両断した。

影は真つ二つに切り裂かれ、爆発することなく地面に落ちた。

「これが… 爆弾？」

ボル ドラゴンは地面に落ちた影 ツチノコのような形状の爆弾を見つめて不思議に思った。

「ツチノコみたいっすね、これ」

勇は真つ二つに切り裂かれたその爆弾に近寄り、訝しげな瞳で見つめた。確かに爆弾は幻の生き物に酷似していた。
ツチノコ

「ツチノコ？なんで爆弾がツチノコの形を？」

「拾った時に爆発するって仕掛けなんスカね…なんだか陰険な作戦っスね…」

勇がバックから取り出した特殊カメラで爆弾の様子を見ようとした瞬間、奇怪な笑い声が響いた。

『がはははッ！幻のツチノコを拾った歓喜と共に死ねるのだから…感謝してほしいものだデンノー！』

木々の向こうの暗闇から叫び声が響き、クナイのような何かが投擲された。

「おっと?!」
身を翻してクナイを避ける勇をよそに、ボルドラゴンはドラゴンエッジとドラゴンガンを構えてクナイが飛来してきた方向へと走り出した。

「…やるわね勇！けどもう帰りなさい！　すぐ終わらせる！」

「でっ！でも！」

勇はボルドラゴンを追いかけるために、バックを降ろそうとしていた。

「いいから言うことを聞きなさい！あなたじゃ まだ重電腦怪人は倒せないわ！私に任せなさい！」

ボルドラゴンは追いかけようとする勇を一喝し、走り出した。

「了解です！頑張つて下さいっス！」

ボルドラゴンは、敬礼をする勇を尻目に一気に走り出した。

「…一気に…仕留める！」

『っ速い？』

どこからともなく電腦怪人の驚く声が響く。

木々の間を駆け抜けるボルドラゴンの全身は光を帯びており、まさに光速に近い速さまで加速していた。

「ガンエッジ！」

ボルドラゴンはドラゴンガンのバレルの下にドラゴンエッジガンエッジを装着させ、銃剣のような形態に変形させた。

「…上手く隠れたつもりなら 滑稽ね！」

ボルドラゴンはガンエッジを振り上げ、大木の幹の上を垂直に走っ

て上を目指した。

『くっ！バレては仕方ない！よく聞け！俺こそ重電腦怪人 ツチノコデン ！』

木々の上で腕を振り上げてクナイを構える電腦怪人。
しかし次の瞬間、その身は真っ二つに切り裂かれた。

「ノ う ！？」

名乗りを終えて絶命するツチノコデンノー。

ボルドラゴンと戦う電腦怪人は常に、このような形で巨大化する前に抹殺されるのだ。

「……………」

木から降りて無言のまま変身を解除した薊は、少しせき込んで立ち止まった。

「…この重電腦怪人も…サタン・イレイズが人間を変質させたもの
」

薊は既に絶命しているツチノコデンノーを見つめて呟いた。

「そしてサタン・イレイズは…今は無きドクター・ソスが作り上げた…悪意と執念の塊…」

薊は息を切らしながら歩き出した、大地を踏みしめて

「…ドクター・ソス…冷泉 昂^{すはる}…あなたの作り上げた悪魔は…私が倒す！」

『そんなことさせないデンノー……!』

薊が歩道に上がろうとした瞬間、背後から黒い影が襲いかかった。

「んッ?!」

薊の意識は混沌の闇の中に消えていった…

【次回予告】

ついに決戦の時が来た。

囚われた薊を救うため、空矢が、陸が、海が吼える。

敵は、群をなす再生電腦怪人軍団。

そして今…電獣戦隊四人目の戦士が現れた！

【第二十二話 決戦！炎と燃えるフォアカード！】

人の心と、命を守れ。

第二十一話 ツチノコ爆弾を拾うな（後書き）

作者「ちゃんと52話で終わるか心配になってきました…」

第二十二話 決戦！炎と燃えるフォアカード（前書き）

ついに決戦の時が来た

敵は…再生電腦怪人軍団！

第二十二話 決戦！炎と燃えるフォアカード

GON 関東支部基地内 司令室

『くくく…二度は言わんぞ、ボルドラゴン 冷泉薊は我らイレイズが捕らえた……二時間後、地獄谷で処刑する……』

巨大モニターには、悪魔のような形相のサタンイレイズが映っていた。

その背後には無数の電腦が散らばっており、黒い煙が浮き上がっていてこの世のものとは思えないくらいに不気味であった。

「バカな……！？…冷泉が囚われただど？」

司令室内には司火車令官しかいなかった。
ボルトマンの三人は先の戦闘の傷が癒えるまで、待機命令が出ていた。

『…そしてその後…地獄のヒーローショーと（ボルドラゴンの死骸と握手会）を行う…来るがいい…電獣戦隊！』

サタンイレイズが画面越しに火車司令官を指差すと、司令室内の巨大モニターの電源は停止した。

「…くっ！まさか冷泉が囚われるとは……」

火車司令官は椅子から立ち上がり、机の上の通信機を握りしめた。

「…やむを得まい！」

…司令官はボタンを操作し、三人の電獣携帯へと緊急通信を入れた。

「電獣戦隊…緊急事態だ！地獄谷に急行せよ！場合によっては…【装備D】も使用し…戦ってくれ！」

高速道路

「…薊が…囚われたなんて…そんな！」

暗闇の中を、赤と青の二台のバイクと、黄色いスクーターが走っていた。

「まさか…薊さんが…イレイズめ…どこまでも汚い！」

青い巨大なバイク（ホエールバイク）を駆る海は、突き抜けていく風を感じることもなく…ただただ怒りに燃えていた。

「…俺達と一緒に戦っていれば…畜生！」

先の戦闘に参加できなかったことを悔やむ陸。それが影響しているのか、ライガースクーターのスピードも快調とは言い難かった。

「言つな陸！…悔やんでも始まらない…戦っただけだ！戦って…薊を助けるんだ！」

空矢は雑念を振り払い、バイクを加速させた。

夜の暗闇の中で、赤い光沢を放つ空矢の専用バイク…スピードコンドルは更に加速した。

海のバイクは少し減速し、陸のスクーターに接近した。

「火車司令官から【装備D】の使用許可が出ている……今まででは絶対に使わなかった装備だ………苦しい戦いになるだろうが……よろしくな、陸」

海が陸にだけ聞こえるように通信を入れた。
陸は首を傾げて海に通信を入れた。

「…何で俺だけに言うんだ？海」

陸の質問に、海はハンドルをきりながら答えた。
その瞳は、深海のように静かであった。

「薊さんのことになれば……奴は…空矢は言わなくても使うだろ…
【装備D】でも何でも…、似てるところあるんだよ…あの二人は」

「……」

陸は妙に納得し、頷いた。

「あと数キロで地獄谷だ！急ぐぞ！」

「了解！」

「いくぜッ！」

空矢の指示と共に、二人はバイクとスクーターを加速させた。

様々な思惑を含んだまま、三人は地獄谷に急行した。

地獄谷

説明しよう。

地獄谷とは、戦隊ヒーローや仮面ライダーなどの正義の戦士と悪の軍勢の相剋の歴史が刻まれている場所である。

30メートルほどある崖の上には、血で染められたかのように赤い二本の十字架が突き刺さっていた。

『ふははははッ！どうだ薙よ……　ここで貴様は　死ぬのだ　！』

崖の下から十字架を見上げてサタンイレイズが叫ぶ、彼の周囲には黒いマントと覆面に身を包んだ従者が跪いていた。

十字架には薊が縛られており、その体には痛々しい拷問の後が残されていた。

「…くっ」

両腕両足を十字架に縛られてしまった薊は唇を噛んだ。

（…ごめんなさい…空矢…海…陸…）

悔しかった…それ以上に…助けに来るであろう電獣戦隊の三人に申し訳ないと思っていたのだ。

『つまらないなあお前は…ちつとは怯ないのかデンノー？』

薊の縛られている十字架に近寄ってきた低い声の主は、イレイズの重電脳怪人である（ジゴクデンノー）であった。

『フンッ！』

ジゴクデンノーは黒衣に身を包んだ死に神のような重電脳怪人で、両腕で構えた巨大な鎌を薊の首に突きつけた。

「…」

あくまで気丈な態度を崩さない薙は、キリツとした瞳でジゴクデンノーを睨みつけた。

『ダンマリか…　つまらんなデンノー！』

その態度が気に入らなかったのか、ジゴクデンノーは巨大な鎌の束で薙の腹に突きを放った。

「…うぐッ…　！」

鈍い音が谷に響く。

『くくく…　いじめすぎたからか…？来るのが早いんだなデンノー
電獣戦隊は…！』

ジゴクデンノーは振り返り崖の下を見つめた。

その先には、専用バイクに乗りながら黒マントの戦闘員に突っ込んでくる三人の戦士達がいた。

「サタンイレイズ！　薙を　薙を返せ！」

生身の空矢は専用バイクであるスピードコンドルを駆りながら、迫

り来る戦闘員デندنを次々と牽いていた。

『デندن！』

スピードコンドルに惹かれ、吹き飛ぶデندن達。

「…許さんぞイレイズ！今日という 今日は！」

荒れ地を疾駆する専用バイクを駆る海は、生身のままで左右のレバーの中央部に電獣携帯をセットした。

「電獣携帯セット・いくぞ！ホエールバイク！」

海は電獣携帯にホエールバイク用の攻撃コマンドを入力し、デندنの群れに突っ込んでいった。

「ボルト スプラッシュ！」

ホエールバイクの先端から凄まじい水流が放射され、無数のデندن達を吹き飛ばした。

『デندن！』

水流によって吹き飛ばされた無数デندن達は大地に伏し、気絶した。

「今だ！陸！」

「分かった！ 電獣携帯セット！」

阿ウンの呼吸でライガースクーターを駆る陸が猛り、電獣携帯をセツトした。

「超機雷・投下！」

陸の叫びと共に、デンデン達の周りを旋回するライガースクーターの後部から無数の機雷が投下された。

「ライガーサンダーッ！」

『デンデンデーンッ！』

無数の機雷は爆散し、その破片と電撃はデンデン達を。

『…さらにできるようになったようだな電獣戦隊！…だが まだ甘い！』

「なんだとッ？！」

サタンイレイズは翼をはためかせて三人をあざ笑う。

それと同時に、サタンイレイズの周囲の黒いマスクの従者達が立ち上がった。

『さあ！ジゴクデンノーよ！……最強の重電脳怪人である貴様の力を見せてやれ！！』

サタンイレイズは崖の上のジゴクデンノーを指差した。

『ははッ！』

死に神のような姿のジゴクデンノーは改まって頷き、そして巨大な鎌を振り上げた。

『死んでいった電脳怪人の魂よ！今ここに蘇れ！！』

ジゴクデンノーの振り上げた鎌から放射された光弾は雲を裂いて天に打ち込まれた。

『電獣戦隊に復讐するのだあッ！』

ジゴクデンノーの叫びと共に、天から無数の赤い光が飛来する。

『…ウツ…ウゴオオオオオツ!!』

飛来した赤い光を受け止めた黒い従者達は唸り声をあげ、黒いマン
トとマスクを剥ぎ取った。

「なに……………お前達は?！」

バイクを停止させた空矢達は、その従者達の真の姿を見つめて驚い
た。

「…フネデンノー…シンカンセンデンノー…ケイタイデンノー…ハ
ガネデンノー…ふざけるなよ…！」

『くくくツ！ふざけてなどない！…我々は復活したのだ！』

海は驚愕し、叫ぶ。

そこには、彼ら電獣戦隊が倒してきた電脳怪人達が立っていたので
ある。

『完全に復活したのはハガネ・カラス・フネ・ケイタイ・シンカン
セン・ツチノコか…！さあ あと五分で十字架に電撃が流れる！間

に合うかな…電獣戦隊!』

復活した電腦怪人軍団に囲まれたサタンイレイズは飛翔し、暗闇の中に消え去った。

「こうなったら一点突破しかないぞ！空矢、お前があのジゴクデノノーを倒して薙さんを助ける！俺達は再生野郎を倒す…!」

海はバイクから降りて電獣携帯を握りしめ、決意を決めた瞳で空矢を見つめた。

「…だが…!」

空矢の言葉を、海が遮った。

「空矢 お前がリーダーだ!リーダーなら 仲間を助けるのは当然だろ!」

始めてであった。

海が空矢をリーダーと呼んだのは

それだけの事態であると、海自身が思っているのだ

「レッドなら…カッコ良く決めてくれよ!」

電獣携帯を天に翳した陸が、空矢に向かって微笑む。

彼が憧れていたレッド像を、今なら空矢が実現してくれる…と思っ

ているのだ…

「海……陸……俺は……俺達は電獣戦隊だ！」

この緊迫した状況の中で彼らは、再び一つであることを確認したのであった。

『ゴチャゴチャとうるさい奴らだデンノー！…このツチノコデンノ
ー様が相手だデンノー！…』

鞭のように長い右腕をもった再生ツチノコデンノーが、走り出した空矢に迫る。

「…おい…、その雑魚……少しは空気を読んだらどうだ？」

空矢に迫るツチノコデンノーの顔面に、青い拳が炸裂する。

『ぐふあッ！』

吹き飛ばすツチノコデンノー、そしてその鉄拳を放ったボルホエールは腕を組んで再生電脳怪人を睨みつけた。

「悪いが…地獄に戻ってもらうぞ…電腦怪人！」

駆け出した空矢を背に、ボルホエールは腰の中央部にセットしてあった電獣携帯を構えた。

「装備D、解除」

ホエールは電獣携帯に今までに入力したことのないコードを入力した。

それは、今までは使用が許されていなかった【装備D】の解除コードであった。

『ぐっ！何をッ！』

ツチノコデンノーはホエールに迫り、鞭のような腕を振るう。

「ふっ！はあッ！」

ボルホエールは身を翻し、その鞭を回避すると、ツチノコデンノーの体に再び鉄拳を繰り出した。

『ぐああッ！！』

「終わりだッ！」

鉄拳に直撃して倒れたツチノコデンノーを追撃しようと、拳を構えるホエール。

『隙ありいいいいデンノー！』

『くたばれええいッボル ホエール！』

しかし、その背後から血眼の再生フネデンノーと、槍を構えた再生シンカンセンデンノーが迫っていた。

「俺は こんな所で くたばらない ！」

その瞬間、ホエールの掌に光の粒子が収束した。

「…装備D…解除 完了！」

粒子は長い円柱状のミンチドリルと化し、ホエールはその武器を両腕で強く握りしめ、振り返った。

『うぐああッ！！』

振り向きざまに振り回した円柱状の武器が二体の再生電脳怪人を吹き飛ばした。

『ぶべらあッ?!』

二体の電腦怪人は上半身を一気に失い、爆発した。

「…さあ 覚悟しろ…電腦怪人!!」

所々に細かい肉片が挟まり、緑色の血が滴り落ちるホエールミンチを片手に暗闇の中を歩くホエール、その姿は…再生電腦怪人であるツチノコデンノーですら震え上がらせた。

『なんなんだデンノー…その武器はあッ!!』

ボルホエールはその武器 ミンチドリルを振り上げ、立ち上がったツチノコデンノーを睨みつけた。

「うおりゃああああッ!」

一閃。

必殺のホエールミンチの一撃がツチノコデンノーの頭部に炸裂し、その体を粉々に砕け散った。

「……ふっ くッ …!!」

腕に激痛が走り、痺れた。

「…司令官が使わせないわけだ…」

ホエールの掌からホエールミンチが抜け落ち、大地に轟音が響いた。

「…こいつは…強力すぎる…！」

大地に落ちたホエールミンチは量子化し、その場から消失した。

「ホエール！くっ…！装備D！…俺にも…使えるのか？！」

ボルライガーは電獣携帯に装備Dの解除コードを入力し、ハガネデンノーに向かって走り出した。

『くくくっ！ボルライガー！お前このハガネデンノーが…殺す！』

ハガネデンノーは巨大なライフルを構え、その標準内にライガーを捉えた。

「くっ！…装備D…来いッ！」

眩い光の粒子が掌の近くで出現し収束していく、だが。

『甘いデンノー！』

『ボルライガー！』

次の瞬間、ボルライガーの背後からケイタイデンノーとカラスデンノーが飛びかかり、体にまとわりついた。

「…なにッ…?!」

身動きのとれないライガーの掌の近くの光の粒子は、敵の存在を確認して消失した。

『終わりだ！ハガネキャノン！発射ッ！』

ハガネデンノーは巨大なライフルの引き金を引いた。それと同時に、銀色の弾丸が砲針から放たれ、轟音が薄暗い谷に響いた。

「…くっ…マジかよッ…！」

ジタバタするライガー、しかし二体の電脳怪人にまとわりつかれ、身動きが全くとれなかった。

「諦めないで下さいッ！先輩ッ！」

その瞬間、高らかな声と共にオレンジ色のクナイが平井した。

『なにッ?!』

クナイはライガーに向かって加速する弾丸に直撃し、爆発した。

「…なんだ…今の攻撃は…?!…それに…あの声…まさか！」

『うぐあッ!』

『デンノーツ!』

次の瞬間、ライガーにまとわりついていたケイタイデンノーとカラスデンノーの背中にクナイが突き刺さった。

「ボル リンクス！」

よろめいた二体の再生電腦怪人に向かって、突然出現したオレンジ色のマスクの戦士が鉄拳を繰り出した。

「ボルリンクス?!」

戸惑うライガーをよそに、ボル リンクスと名乗った戦士の怒涛の攻撃が、二体の再生電脳怪人に炸裂する。

鉄拳、蹴り、鉄拳、蹴り…ボルリンクスと名乗った戦士のその1つ1つの活発で躍動感に溢れた動きは、まさに野生の山猫リンクスのようであった。

「先輩!ダブルキックっス!!」

ボルリンクスがライガーに向かって叫ぶ。

何故かライガーは、その言葉と動作だけで、次にどうすればよいのが理解できた。

「ああッ!とうッ!」

『なにッ?!ぐぶっ!』

『やめろおおっ!』

満身創痍の二体の再生怪人を前に、ボルリンクスとライガーは跳躍し、交差した。

「ボルトマン・ダブルキック！」

『ぐざいいッ?!』

二人の声が重なり、跳躍から落下する力を加えた二人の蹴りが、二体の再生電腦怪人を粉碎した。

「やった！」

「浮かれるのはまだ早い!…奴がいる！」

喜ぶリンクスの前に立ち、ライガーが緊張した面持ちで武器を構える。

次の瞬間、ハガネデンノーが二人に向かって肉迫した。

『くっ!…何人増えようが…貴様達は死ぬ運命なのだ!』

ハガネデンノーは巨大な刀を振るい、ライガーに迫る。

「何をッ！」

その鋭い一撃を爪で受け止めたライガーは、ハガネデンノーの力に徐々に圧倒されてしまっていた。

「リンクスクローー!!」

ハガネデンノーの隙だらけの背後にリンクスの拳が炸裂する。鋭い爪が背中に刺さり、緑色の血が噴出した。

「今だっ!!…ライガー……クローツ!!」

ライガーは刀を受け止めていた爪を更に伸長させ、ハガネデンノーの胸元に突き刺さした。

『うぐっ!!』

2つの爪に胸を裂かれ、ハガネデンノーは唸り声をあげた。

「でえええええいッ!!」

「やああああっ!!」

リンクスの叫びとライガーの叫びが重なり合う。2つの爪は、ついにハガネデンノーの体を貫通した。

『ぐぬあがああがッ!!馬鹿……なああッ!』

次の瞬間、ハガネデンノーの体はダメージに耐えきれずに爆発した。

「…あとは…あの崖の上のだけっスね…」

ボルリンクスはヘルメットを脱ぎとった。

「…ふう…」

短い黒髪が汗で光る。

…そう、ボルリンクスは勇であつたのだ。

「…お前…やっぱり…お前が…!」

粗方の敵を倒したライガーはヘルメットを脱ぎとり、陸は素顔のまま勇を見つめた。

「はい、司令官に認められて…やっと正式に電獣戦隊に入れました! よろしくお願いします!」

勇は再びヘルメットを被ろうとすると、二人の間にボルホエール…海が駆け寄ってきた。

「…勇 だったか…？…まあいい…よく見ておくんだ… あれが俺達のリーダー…ボルコンドルだ！」

ホエールはヘルメットを外して、崖の方向を指差した。

「…ボル…コンドル…」

勇は指さされた方向を見つめた。

「くっ！ボルドラゴンを……薙を…返してもらっぞ！ジゴクデノ…！」

そこには、薙を助けるために飛翔する赤い戦士の姿があった。

『…返してほしくば…力づくで来い！ボルコンドル…！』

最強の重電脳怪人ジゴクデノーと、電獣戦隊のリーダーであるボ

ルコンドルの戦いの火蓋が、今切って落とされた。

続く。

【次回予告】

空也は戦う、今まで独りで戦ってきた女のために。

空也は怒る、今まで支えてやれなかった女のために。

女は戦う、命の尊さを再び思い出させてくれた男と、仲間のために。

…そしてついに、サタンレイズとの決戦が始まった…

【第二十三話 薊よ、俺の話を聞け】

今、5つの力が1つになる。

第二十二話 決戦！炎と燃えるフオアカード（後書き）

感想、ご意見を本当にお待ちしております。

第二十三話 薊よ、俺の話を聞け（前書き）

薊よ、俺の話を聞け。

今、お前に言いたいことがある。

第二十三話 薊よ、俺の話を聞け

男は、崖の上に立ち、ジゴクデンノーに向かって歩き出した。

「……」

「…待つてろ……薊」

無言の薊を横目に、男は日本刀を構えた。
短い髪が、風に揺れる。

『…最強の重電脳怪人である俺を……倒せるかな　クククッ』

嘲る、冷たき悪意。

男は戦う。

今まで全ての人のために、己を犠牲にしていた人のために。

「薊を…返せええええいッ！」

空矢は鞘を構えて一気に走り出した。
ジゴクデンノーとの距離は、約8メートル。

『貴様などッ… 地獄送りだデンノーツ!』

ジゴクデンノーは大鎌を横に構えた。

縦の攻撃よりも隙が生じにくい、と彼は思っている。

「ここまで来て…… 死ねるかよおおおッ!」

走りながら日本刀の束の部分に手を添える空矢。
怒号が空を裂く。

既にジゴクデンノーの鎌の間合いの、三步手前であった。

『フンッ!んなこと 知らぬわああアッ!』

二歩前進し、大鎌を横一線に払うジゴクデンノー。
その一撃は、まるで閃光のような一撃であった。

『……………なに?!』

鎌が風を切る。

既にそこには、空矢の姿は既に無かった。

「……………！」

空矢は既に跳躍していた。

二メートル近くは跳んでいた、まるで飛蝗のような跳躍であった。

『上か?!』

刹那の隙を、空矢は見逃さなかった。

「……………空・矢！」

一瞬であった、日本刀がジゴクデンノーの胸に突き刺さっていた。それだけのことであった。

『……………ぐフツ!!……………なんだ…?!』

それは、空矢が今まで封印していた必殺剣であった。

簡単に言えば、跳躍し、居合い切りの要領で刀を振り抜き、そのまま敵に向かって投擲する。

まさに、空を裂く矢、空矢であった。

「…おい…、電腦怪人」

空矢は電腦怪人を険しい顔つきで見つめた。
それは…怒りを通り越した表情であった。

「今の俺は……………倒せないぞ？」

『…な　んだとっつ…?!　ぐばああッ?』

よろめくジゴクデンノーから日本刀を引き抜く空矢。
緑色の鮮血を浴びながら日本刀を瞬時に鞘に収め、電獣携帯を構えた。

「電獣携帯、ボルコンドル」

素早く変身コードを入力し、光に包まれる空矢。

ヘルメットが赤く発光し、その体はゆらりと腕を前に突き出して構えた。

「……………」

『ぐっ……………ぐオオオッ!』

ジゴクデンノーの大鎌がボルコンドルに迫る。

「……………遅い」

全ての重電脳怪人を超えたはずの強力な一撃は、ボルコンドルが逆手で握った脇差しに防がれた。

そして、次の瞬間にはボルコンドルの蹴りがジゴクデンノーに炸裂していた。

『ぐっ… 早いッ?!』

右左の足の蹴りが交互に腹を穿つ。

まるで敵の動きの全てが見えているかのような空矢は、恐ろしいほどに的確に攻撃を直撃させていた。

『ぐっ!!… がッ!?!… 俺がッ!… 俺が… 圧倒されているだ?!』

よろめくジゴクデンノー、手から鎌がずり落ちる。

「ボルト ボールウツ!」

叫びと共に、ボルコンドルの右手に光が宿る。

ボルコンドルは電送されたドッジボールサイズのボルトボールを右手に持ち、思い切りジゴクデンノーに直撃させた。

『……………があああッ!』

炸裂するボルトボール。

『……う……ぐ……あ』

ジゴクデンノーの腹に巨大な風穴が空き、まるでマネキンのように立ち尽くした。

死んでいるかどうかは、定かでは無い。

「……ハアっ！」

ボルコンドルは日本刀を構えて唐竹割りを繰り出した。

一瞬であった、ジゴクデンノーの体は中央から真っ二つに裂かれた。

「……………」

爆風を背に、変身を解除する空矢。

日本刀を片手に十字架に向かって歩くその顔は、尚も険しかった。

「……空矢……………」

十字架に捕らわれていた薊が、悲しい瞳で空矢を見つめた。

「……なんでだ……薊……」

空矢は重苦しい口を開き、十字架の前に立って、薊を見上げた。

なんで、いつもそうやって一人で全てを抱え込もうとするんだ？

空矢の質問を察した薙は、静かに口を開いた。

「私は……ドクター・ソスの……娘なのよ！……だから私は……！」

「……だからって お前一人が抱え込む必要なんてないはずだ！」

激昂する空矢。

怒りの日本刀が薙を捕らえていた腕輪を粉々に砕き、薙は地面に着地した。

「……でも……これは戦いのよ？！」

今までに見たことのない表情と言葉に圧され、薙は困惑した。

「そんなことは分かってる！だが……」

空矢は薙のボロボロになった服襟を掴んだ。

「!!」

薊は驚き、目を大きく見開いた。

「なぜ自分の命を 心を大切にできない奴が他人の命と心を守ることをできると思う!!」

自分が今まで言えなかった 言うべきだった言葉を叫ぶ空矢、その瞳は真っ直ぐに薊を見つけていた。

「ねごとを言うな!」

パチンという頬を叩く音が響く。

薊は叩かれた頬に手を添えた。

「…私は…」

痛かった。

しかしそれは、不思議と暖かい痛みであった。

薊の頬に、暖かい涙が伝う。

「……私はっ」

たとえ一筋だけでも、涙を流すのも久しぶりであった。

「…薊…お前は…一人じゃない…」

空矢は崖の下を指差した。

崖の下には、真剣な眼差しで自分達を見つめる三つの戦士達がいた。

大門陸

西川海

巽勇

一部始終を見守っていた彼らを見つめて、薊は自らのポケットから電獣携帯を取り出した。

「…ありがとうみんな………」

薊は電獣携帯を操作すると、一筋の涙を拭いながら微笑んだ。それはとても不器用な笑顔であったが、彼女らしいとても美しい笑顔であった。

「ボルドラゴンのパワー設定を みんなと一緒にしたわ………」

「…薊………」

微笑み返す空矢。

薊は電獣携帯を再びポケットに入れると、自らの胸に手をあてた。

「そんなにすぐには変わらないかもしれないけど 私は私を大切に
できるようにするわ よろしく、空矢」

「ああ、よろしく 薊」

差し出した手を空矢は強く握りしめた。

固い握手が交わされ、崖の下の三人は何やら二人の様子を見て活気
だっていた。

朝日が登る空の下、電獣戦隊は一つになった。

……

『…つまん…つまんぞ！！そんなこと…認めんツ！！』

朝日が登る空を紫色の雲が埋め尽くした。

大地は再び闇に包まれ、電獣戦隊の戦士達は驚き、身構えた。

『…貴様達がなれ合いなど…もう見たくない！消え去るがいい！電
獣戦隊！！』

紫色の雲を裂いて、（それ）は出現した。
雷鳴が轟き、豪雨が吹きすさぶ。

「サタン…イレイズ!!」

薊は叫ぶ、その表情にはもう迷いは無かった。

「…お前を倒せば全てが終わる……勝負だ！サタンイレイズ!!」

毒々しい紋章に乗り、悪魔のような翼を羽ばたかせて地へと降臨する巨大な姿。

それは、全身が鋼鉄に包まれたサタンイレイズであった。

『…望むところだ…… 電獣戦隊!!!!』

消し去る悪魔と正義の最後戦いの火蓋が切って落とされた。

第二十三話 薊よ、俺の話を聞け（後書き）

第二十八話 薊よ、俺の話をPK

皆さまのご意見、ご感想をお待ちしております。

次回で最終回ですが、ご感想を参考にして、続投するかどうかを決めたいと思います。

最終話 人の命と、心を守る。(前書き)

第一部【出撃する、五人】

最終話 人の命と、心を守る。

突然嵐が巻き起こり、突然炎が吹き上がる。

「この世界が憎い！ 憎い！憎い！憎い！憎い！」

ビル群の中に立つ巨大なる鋼のサタンイレイズ、狂気の怒号が紫色の空を裂き、雷鳴が彼を照らした。

「くそっ！まるで地獄絵図だな！」

ボルライガー…大門陸はその巨大なる悪意を見上げた。

サタンイレイズはその鋼に包まれた巨体から黒い霧を放出し、赤い瞳で広大な大地を睨みつけていた。

「くっ！緑の大地を 人間達の命を 思い通りにされてたまるか！」

ボルホエール 西川海は拳をにぎりしめる。

ミシリという音が響き、彼は瞳を細めた。

「そうっす！絶対守らなきゃ…みんなの街を！この 地球を！」

ボルリンクス 巽勇も拳を握りしめて怒りを露わにする。

「その通りだ電獣戦隊！人間の世界を…破壊されるわけには いかないのだ！」

高らかな宣言が響き、地獄谷の上空に巨大なる電獣母艦・ボルトマンモスが現れた。

「その声は 火車司令官！」

ボルコンドル 空矢が叫び、ボルトマンモスが谷に着地する。

「 空矢！」

ボルドラゴン 冷泉薊がコンドルと視線を合わせると、二人は頷いた。

「電獣戦隊各員は電獣に搭乗せよ!!」

着地した衝撃から四散する粉塵を掻き分け、ボルトマンの5人の戦士達はボルトマンモスへと走り出した。

「スカイコンドル! 頼むぞ!」

ボルコンドルはスカイコンドルのコクピット内に搭乗し、電獣携帯をレバーの中央にセットした。

「第一デッキ開放!行ってこい…空の戦士…コンドル!」

火車長官の声がコクピットに響くと、ボルトマンモスの甲板の上に格納されていたスカイコンドルをロックしていたアームが開放された。

「了解!エネルギー充填完了 スカイコンドル発進します!」

ボルコンドルがペダルを踏むと、スカイコンドルは翼を展開させ、憎悪が渦巻く紫色の天空へと飛翔した。

「サタンイレイズ…この戦いで 決着をつけてやる!」

黒い霧を裂き、巨大なサタンイレイズに向かって加速する真紅のスカイコンドル。

「レーザービーム、発射!」

サタンイレイズめがけて高熱のレーザービーム砲が放たれる。

一筋の閃光が空を穿ち、スカイコンドルは一気に旋回した。

「できるな?海」

マリンホエールのコクピット内に火車長官の声が響く。「大丈夫だ、俺はやれる…最初にそう言っただろう?」

海は電獣携帯をレバーの中央にセットし、計器類の確認を行った。

「あまり無理はするなよ海…お前の体は…」
火車長官の言葉を遮るように、海は叫んだ。

「俺は！…俺はまだ…大丈夫だ… 奴らと一緒になら！」

海は瞳を見開いて、レバーを握りしめた。

「だから やらせてくれ」

海の呟きが消えると、ボルトマンモスの格納庫が開放され、コクピット内が微妙に振動した。

「…西川海……死ぬなよ」

長官の声が響く。

マリンホエール内のモニターに紫色の天空と揺れ動く緑の大地が映し出された。

「……………」

長官の声を聞き、唇を閉ざしながらもペダルを踏む海。

マリンホエールは開放されたボルトマンモスの格納庫から地上に着地し、ホバーを用いて移動を始めた。

獅子の刻印が刻まれた電獣携帯をレバーの中央にセットするとエネルギーゲージが満タンを表示し、彼の闘志は最高潮に達する。

「さあさあさあ…決戦だ！」

ガイアライガーのコクピットの中で叫ぶ陸。

「…っと、…エネルギーゲージよし、関節よし、全武装の解除を確認…」

鋼の獅子の中心部に格納された動力源が一気に起動すると、コクピット内にその脈動が伝わった。人類科学を結集させた史上最強の動力源が生み出すエネルギーが鋼の獅子の体を駆け巡る。

「いこうぜガイアライガー！…人の命と心を守るために！」
ボルライガーがペダルを踏むと、紅き獅子は叫びと共に大地を疾駆した。

自らの十字架を大地へと下ろしたボルドラゴンは、力を得た無垢なる戦士・ボルリンクスと共にボルトマンモスの頭部の上に立っていた。

「ボルリンクス…いや、勇…いくわよ」雷鳴が轟き、雷が降り注ぐ空の前に…ボルドラゴンはリンクスを見つめた。

「大丈夫っス！ボクだって電獣戦隊の一員ですから！」

ボルリンクスは拳を握りしめて力む。

「……そう」

ボルドラゴンはそれを聞くと頭上を見上げて電獣携帯を握りしめた。

「…頼りにしてるわよ… ドラゴンエンペラー！」

竜の刻印が刻まれた電獣を開いてエンターキーを押すボルドラゴン。
「…えっ？！それってどっちを…？」

リンクスはドラゴンを二度見した。

黒い電獣携帯からは黒と赤が混ざったような一筋の光が放たれ、その光は天空に向かって加速した。

「ギャアアアアアッスッ！！」

紫色の天空を裂いて、猛る声と共に現れる巨大な姿。

それは、ボルドラゴンの強化服と共に製造された最強無敵の電獣スペースドラゴンであった。

「搭乗するわよ、リンクス」

ボルドラゴンはリンクスの肩を叩くと、ボルトマンモスの頭上に接

近したスペースドラゴンの腹のコクピットへと跳躍した。

「はっ！はいッス！」

リンクスもドラゴンに続き、コクピットへと跳躍する。

コクピット内は前回の戦闘の後にNGOの技術部によって副座型への改修が施されており、二人は前後のシートに座った。

「勇…私が頼りにしてるのはスペースドラゴン…そして勇…どちらもよ」

電獣携帯をレバーの中央にセットするとエネルギーゲージがミリタリーモードからマックスへと変化する。

「……！」

ボルリンクスはその振動と言葉の両方に驚きながら、後部座席のレバーを握りしめた。

ボルドラゴンは振り返ることなくペダルを踏み、レバーを引く。

「だから頑張りましょう…みんなで」

皇帝の名を冠した最強の電獣の、二つめの動力源が起動する。

「はっ！はいッス！」

放熱板を兼ねた鋭い牙が装備された口が開放され、エネルギーが鋼の体を駆け巡る。

「スペースドラゴン！出撃！」

鋼の竜は巨大なバーニアを用いてサタンイレイズへと一気に加速した。

何よりも速く、強く。

敵に奪取されていた時には開放できなかった（真の力）を携えて…

最終話 人の命と、心を守る。（後書き）

最終回は三部構成です、つづきます。

最終話 第二部（前書き）

第二部 二大口ボット大決戦！

最終話 第二部

「いくぞ！ホエール！ライガー！」

三体の電獣が雄叫びをあげる。

「了解だコンドル！ 景気よくいこうぜ！」

ガイアライガーは人型形態へと。

「ふっ… 景気よく… か そうだな」

海は瞳を細めて苦笑する。

マリンホエールは前後へと分裂し、肩のアーマーへと変形した。

「電獣合体！」

そして、スカイコンドルは頭部へと変形し、三体の電獣は集結した。

「コネクトだ！」

人型に変形をしたボルトライガーの獅子の頭部が胸に移動し、マリンホエールが肩アーマーとして合体する。

「ファイヤーコネクト！」

スカイコンドルが可変した頭部が体に合体し、大電獣ボルトカイザーが完成した。

「大電獣！ボルトカイザー！」

巨大な足が大地を踏みしめる。

その大地の先の黒い霧が蔓延するビル街で、翼もつ鋼の悪意がボルトカイザーを嘲笑う。

『くくくっ…… 来たか！電獣戦隊！』

巨大なるサタンイレイズは、翼を展開させて再び大地から離陸した。
「ああ来たさ！ボルトメーカー！」

ボルトカイザーは射出されたボルトメーカーを受け取り、大地スレスレを浮遊して加速するサタンイレイズに向かって走り出した。

『サタンソード！』

サタンイレイズは腕から漆黒の剣が出現する。

「くらえええいッ！」

ボルトカイザーはメーカーを振り上げ、一気にサタンイレイズの間に接近した。

『遅いッ！』

「なにっ！？」

サタンイレイズの翼がボルトカイザーの間合いの外からボルトメーカーを弾く。

次の瞬間、漆黒の剣がボルトカイザーに迫った。

『砕ける！ボルトカイザー！』

「ボルティック！フレアッ！」

漆黒の剣の先端がボルトカイザーの胸に触れた時、その黒い刀身は爆発した。

『なっ？！』

爆発に巻き込まれたサタンイレイズはよろめきながらも、その翼でボルトカイザーに攻撃を仕掛けた。

『スペースドラゴンだと！』

「ボルトアックス！」

ボルトカイザーは射出されたボルトアックスで迫るサタンイレイズの翼を振り払う。

「スペースドラゴンが…動いている?!」

ボルコンドルはモニターを見つめて驚き、叫ぶ。

「だっ…大丈夫なのか薙?！」

そこには口から火球弾を吐き終えたスペースドラゴンが浮遊していた。

「大丈夫っす!今のスペースドラゴンは…薙さんとボクの二馬力で動かしてるっす!」

勇の叫びが響き、スペースドラゴンは大地から飛翔した。

「いくわよ勇!竜帝変形!」

薙はレバーの中央にセットされた電獣携帯を取り出し、変形コードを入力して再び中央にセットした。

「了解っす!エネルギー輪郭80パーセント!ポテンシャルマックス!」

竜帝王に搭載された三つ目の動力源の封印が開放され、竜の瞳が輝いた。

リンクスはエネルギーゲージを確認して機器類を操作する。
スペースドラゴンはその頭を右腕、それ自体が強力なドリルになっている尾を左腕に可変させた。

「帝竜王!ドラゴンエンペラー!」

体部分から人型の頭がせり出でて、バーニアが脚部となって大地を踏みしめた。

「ボルティックドリルッ!」

ボルドラゴンは左のレバーを引いた。

ドラゴンエンペラーの左腕の巨大なドリルは高速回転し、サタンイレイズの体に直撃した。

『ぬうつっ!ドラゴンエンペラーだっ!…だがああっ!』

サタンイレイズは悪魔のような翼の先端をドラゴンエンペラーに向けて振り下ろした。

「甘い!」

サタンイレイズの翼を阻む、竜の頭の右腕。

「ドラゴンエンペラーの力を 舐めないでほしいわね！」

脚部のバーニアを吹かして後退しサタンイレイズの攻撃を回避するドラゴンエンペラー。

『当たらぬ?!』

焦るサタンイレイズは右腕から黒いエネルギー弾を炸裂させた。

「ドラゴンタイフーン！」

後退するドラゴンエンペラーのボルトティックドリルの高速回転が生み出す強力な竜巻は、サタンイレイズの黒いエネルギー弾を相殺した。

「あれをやるわよ リンクス！」

ボルドラゴンが両方のレバーを引くと、ドラゴンエンペラーの瞳は一瞬だけ赤く輝き、後退を止めて大地を踏みしめた。

「了解っス！」

ボルリンクスも両方のレバーを引くと、ドラゴンエンペラーは大地を蹴って大きく飛翔した。

『跳んだだと?!だが イレイズハンドレッドウィング!!』

サタンイレイズの翼は幾重にも分裂し、無数の鞭のように変質しながら飛翔するドラゴンエンペラーを追尾した。

「俺達を忘れてないか?!サタンイレイズ!!」

猛るボルコンドルの叫び声が響く。

大電獣ボルトカイザーが大地を駆け、右手を振り上げた。

「電獣剣！」

ボルライガーが叫び、ボルトカイザーの三つの動力源が猛る。

ボルトマンモスから射出された電獣剣を右手で握りしめるボルトカイザー。

「エネルギー全開！！」

ボルホエールが機器類を操作し出力を電獣剣に集中させると、その刀身は輝きを放つ。

沙羅双樹の木々を背に、ボルトカイザーは翡翠のような光を放つ剣を振り上げた。

『小癪な！…そのような必殺剣など！』

サタンイレイズは巨大な槍を振り上げた。

「ヘルガルガリン起動！いくわよ リンクス！」

ボルドラゴンが左右のレバーの親指部分に装備された赤いボタンを押すと、飛翔したドラゴンエンペラーは空中でサーカスのピエロのように横回転した。

「…あつ！あれを使うんスね！了解っス！」

ボルリンクスが同様の操作を行うと、横回転をしていたドラゴンエンペラーはキックの体勢に入り、地上へと加速した。

「ドラゴンエンペラー！エネルギー全開！いくわよ…竜帝王必殺！」

ドラゴンエンペラーの足の裏の踵部分と爪先部分に搭載された鋸状ヘルガルガリンの車輪が超高速回転した。

「「稲妻流星キークー！！」」

そのキックは稲妻のように、また流星のように地上へと加速し、サタンイレイズの無数の翼を打ち砕いた。

その蹴りは更にサタンイレイズに直撃し、銀色の車輪が一気に光を放つ。

『ぐうっ！…これがドラゴンエンペラーの力だと言うのか?!』

高速回転し、サタンイレイズの鋼鉄の腹を穿つ鋸のような車輪。

『ぐっ？！このままでは…！』

ドラゴンエンペラーは黒い血しぶきを浴びながらサタンイレイズの腹を貫くために更に加速した。

「電獣剣！盛者必衰斬り！」

光輝く電獣剣の鋭い一撃が、サタンイレイズに炸裂する。

『ぐっっっ！あああああッ？！』

2つの凄まじい衝撃がサタンイレイズの体を貫く。

闇を払うように光の奔流が巻き起こり、地面が捲かれて岩の塊が浮上した。

「終わりだ…サタンイレイズ…！」

「私達の…勝利よ！」

ボルコンドルとボルドラゴンの叫びが響く。

電獣剣の光の一撃がサタンイレイズを切り裂き、ヘルガルガリンの雷の一撃が打ち砕く。

『…このサタン…イレイズが滅ぶというのか？！………』

最終話 第二部（後書き）

三部でなくて五部くらいあるかもです。
すみません。

最終話 第三部（前書き）

第三部 不死身の悪意

最終話 第三部

『こ…このサタン…イレイズが滅ぶというのか?! 否! 否! 否! 否! いなあッ!』

真つ二つに切り裂かれたサタンイレイズの体から黒い霧が噴出する。

『我は 不死身なり!!』

その斬り裂かれた両端から細胞が噴出され、結合し合い再生した。

『なにいつ!?!』

『さっ! 再生しやがったぞ!』

ボルライガーが驚愕して叫ぶ。

再生したサタンイレイズは両腕を振り上げて再生した翼を広げた。

『ドリルガイアーよ! 来おおいつ!!』

サタンイレイズの叫びに呼応するかのように大地がめくり上がる。

その大地から地上へと浮上する巨大な要塞 ドリルガイアーの上部にサタンイレイズは乗った。

『なにをする気だ!?!』

『融合していやがるのか?!』

コンドルとホエールが叫ぶ。

サタンイレイズの下半身はドリルガイアーへとめり込み、その2つは融合した。

『我は不死身の…メカキングサタン!!』

サタンイレイズはドリルガイアーとの融合を完了させ、下半身が巨大な要塞、上半身がサタンイレイズという異形の姿へと変質した。
「メカキングサタンだと?!」

驚愕する電獣戦隊を前に、メカキングサタンは瞳を赤く光らせる。

『サタンビームッ!』

メカキングサタンの全身から放たれる漆黒のビームが降り注ぐ。

「ぐあああッ?!」

「なああああッ?!」

「ひよああッ!」

ボルトカイザーはビームの直撃をうけて大ダメージを負う。

その莫大なダメージを相殺するために、ボルトカイザーは三機に分裂した。

「くっ空矢?!…みんな!」

ボルドラゴンはレバーを握りしめて叫ぶ。

「きゃあああッ!」

ボルリンクスは頭をシートに打ちつけて気絶した。

「リンクス?! そんな!…ドラゴンエンペラーは一人では!」

孤立し、ボルドラゴンは戸惑う。

ドラゴンエンペラーはヘルガルガリンとボルティックドリルによってビームを弾いていたが、中の人間…ボルドラゴンは一人乗りをすることによって限界が近づいていく…

『はっはっはっは! ボルドラゴン! まずは貴様から血祭りだ!』

サタンイレイズの腕が、ドラゴンエンペラーを捕らえた。

最終話 第三部（後書き）

このまま電獣戦隊は敗北し、世界は闇に包まれてしまうのか…？！

最終話 第四部（前書き）

第四部 戦士、再び。

最終話 第四部

「勇：起きて！空矢！陸！海！」

後部座席に振り返って叫ぶボルドラゴン。

しかし勇は瞳を閉じたまま揺れ動く後部座席に座っていた。

『くははははッ！無駄だボルドラゴン！貴様は最後まで一人なのだ！』

メカキングサタンの腕はドラゴンエンペラーの首を絞めあげる。
ドラゴンエンペラーの首に亀裂が走り、メカキングサタンのビームの直撃を食らうことによりカメラアイが砕け散った。

「……勇」

絶対絶滅のその時、ボルリンクスの電獣携帯が鳴り響き、後部座席のモニターに通信が入った。

「……うっ……」

勇はマスクの下で瞳を開こうとしたが、意識はどんどん遠のいていく。

「巽勇！貴様は何を寝ているか！！」

後部座席のモニターに関西支部の釧勝長官が映し出され、怒号にも似た叫び声が響く。

「……ちょ……長官」

マスクの下で、勇は唇を動かした。

「貴様の気持ちはそんなものなのか？！貴様の父とその兄弟はどんな状況にも絶対に諦めない戦士であった！」

長官は拳を握りしめて叫ぶ、勇は瞳を開いてモニターを見つめた。

「貴様は今諦めるのか?!電獣の中で仲間の足を引っ張って死ぬために強化服を着たのか!それが貴様だとしたら私は一生貴様を軽蔑する!」

ボルリンクスは頭を振り、レバーに手を伸ばした。

グローブからは血が滴り、コクピット内の床に落ちた。

「…ボクは…」

ボルリンクスはレバーを強く握りしめ、瞳を見開いた。

「ボクは諦めない!!」

ボルリンクスはペダルを踏み、レバーを引いた。

「勇!意識を取り戻したのね!」

振り返るボルドラゴン、それと同時にドラゴンエンペラーの脚部のダガーがメカキングサタンの腕に炸裂した。

「なにっ?!」

ドラゴンエンペラーはメカキングサタンの腕から開放され、脚部のバーニアを使用して一気に後退した。

「ぐうつツ!殺すツ!」

要塞が変質した下半身で大地を這いながら進むメカキングサタン。

「くっ!ホエール!ライガー! もう一度電獣合体だ!」

その全身から放射させているビームを回避しながら、三体の電獣は再び集結した。

「ああ!電獣合体!」

「ボルトカイザー!」

三体の電獣が合体したボルトカイザーは、山のように巨大なメカキングサタンを見上げた。

メカキングサタンの下半身を構成する変質した要塞ドリルガイアーは、それだけで180メートルほどあり、ボルトカイザーはその足元でたじろいだ。

「ボルトブーメラン！」

ボルトカイザーが投擲したブーメランは、メカキングサタンの放つビームにより粉碎された。

全てを焼き尽くすかのように放たれる漆黒のビームを回避し、ボルトカイザーは電獣剣を構えた。

「電獣剣！盛者必衰斬り！」

ボルトカイザーの振り下ろした電獣剣は、メカキングサタンの下半身から出現した金属製の触手によって弾かれ、大地に突き刺さった。「なっ！電獣剣が効かない?!」

「こいつはヤバいな！」

大地に突き刺さった電獣剣を見つめて驚愕するボルライガーとボルホエール。

「くっ！メカキングサタンに死角は無い！どうすれば！」

そしてボルコンドルはレバーを握りしめてうなだれた。

『消え去るがいい！人間！』

メカキングサタンのビームは街の大地を溶かしていく。碎け散るビルの残骸、炎を吹く街。

「コンドル！ホエール！ライガー！ドラゴン！リンクス！聞こえるか!？」

空中を駆け、全ての砲門を展開して戦うボルトマンモスから、火車司令官の叫び声が響く。

「司令官!...メカキングサタンは強力です!」

コンドルは電獣携帯に向かって叫ぶ。

『分かっている！だが！勝機はある！』

ボルトカイザーとドラゴンエンペラーのコクピットモニターに、二体のロボットの内部図が表示された。

「…なんだこの設計図は?!」

「これは…ボルトカイザーと…ドラゴンエンペラー!?!」

驚くコンドルとドラゴン。

「…まさか…これは!」

「…これは…もしかするとっス!」

しかしボルリンクスとボルライガーは、もう司令官の言わんとしていることを理解しているようであった。

「バリアー展開！ボルトマンモス突貫する!」

『人間の作った空母ごときがああっ!』

ボルトマンモスはその全身からバリアーを展開してメカキングサタンの上半身に向かって突貫した。

『ぐうううッ!』

メカキングサタンは両腕でボルトマンモスをバリアーごと受け止めた。

「電獣戦隊よ…」

全火器を開放してメカキングサタンに応戦するボルトマンモスの中で、火車司令官は叫ぶ。

「今こそ竜帝電獣合体をするのだ!」

ボルトカイザーとドラゴンエンペラーのコクピットモニターに映し出されたロボット、ボルトカイザーとドラゴンエンペラーは重なり合い、その横ポテンシャルゲージは振り切れた。

「やるしかないようだな！…いいか？！みんな！！」

コンドルが叫ぶ。

そして、コクピット内のホエールとライガー、モニターに映し出されたドラゴンとリンクスを見つめた。

「ああ！竜帝電獣合体だ！」

四人の戦士は同時に頷き、ペダルを思い切り踏んだ。

最終話 第四部（後書き）

ついに、全ての電獣が一つになる。

最終話 第五部（前書き）

第五部 力と力

最終話 第五部

5人の戦士が同時にペダルを踏むと、ドラゴンエンペラーがボルトカイザーの元へと加速した。

「チェンジ！ドラゴンブースター！」

ボルドラゴンが叫ぶと、ドラゴンエンペラーの脚部がブースターとなり、そのボディはボルトカイザーの背中に合体した。

「ボルトパンチャー！セット！」

ボルリンクスの叫びが響き、ドラゴンエンペラーの脚部の足部分が分離し、ボルトカイザーの腕部分に装備された。

「ボルティックドリル！ドラゴンキャノン！スタンバイ！」

ボルライガーがレバーを引くと、ドラゴンエンペラーのもつ竜の頭状の右腕と尾状の左腕はボルトカイザーの肩に装備された。

「エネルギー出力100パーセント！いけるぞ！コンドル！」

ボルホエールはエネルギー出力を安定させると、直列した計6つの動力源が哮り、火花を散らす。

「完成！竜帝大電獣！」

ドラゴンエンペラーと合体したボルトカイザーは大地に降り立ち、拳を構えた。

「ドラゴンボルトカイザー！」

竜帝大電獣は背中ブースターを噴射させて飛翔する。

「すごいぜ！なんて加速力だ！」

ボルライガーは凄まじい加速力に耐えながら叫ぶ。

『ぐつつ！電獣が一つになろうと…このメカキングサタンは倒せぬ！』

メカキングサタンは右腕による鉄拳を繰り出すが、竜帝大電獣はその拳をも回避した。

「お前は俺達を倒せない！お前は……一人だからだ！」

ボルコンドルはレバーを握りしめて叫ぶ

「ターゲット・インサイト！」

ボルホエールがモニター越しにメカキングサタンを捉える。

「攻撃予測ポイント算出！かわせるっス！」

六基の動力源から発生する爆発的なエネルギーで加速する竜帝大電獣は巨大なるメカキングサタンのビームを回避し、その巨体の背後に回った。

「俺達は一人じゃない…みんながいる…」

ボルコンドルは勢い良くペダルを踏んだ。

「ドラゴンブレスキャノン！！」

ボルドラゴンの叫びと共に放たれた竜帝大電獣の肩の必殺砲は、一筋の光を描いて一気に加速した。

『ぬうつうつツ？！』

必殺砲の一撃はメカキングサタンのビームを弾き返し、そのまま背後に直撃した。

「だから…俺達是一つだ！！」竜帝大電獣は必殺砲の反動を利用して降下し、ブースターを噴かしてそのままメカキングサタンの下半身ユニットに向かって加速した。

『くっ！なんだ…なんだこの速さは！？』

メカキングサタンはその素早さに驚愕する。

雨のように放たれる全身のビームも繰り出す鉄拳もかわされていく。

「大鉄拳！」

竜帝大電獣は大地のスレスレを加速し、拳を構えた。

ドラゴンエンペラーの爪先から踵部分にあたるパーツが装備されたその拳は、風を切って光を帯びた。

「ボルトギャラクシー！」

ボルトギャラクシーが炸裂する。

竜帝大電獣の両腕から放たれた鉄拳はメカキングサタンの下半身ユニットの装甲を砕き、装備された鋸のような車輪・ヘルガルガリンによって切り裂いていく。

『ぐうううッ？！下半身が？！だがあっ！！』

メカキングサタンは竜帝大電獣が内部に侵入した下半身ユニットを廃棄し、上半身ユニットだけで飛び出した。

「なにっ？！」

『そのまま死ぬがいい！電獣戦隊！！』

メカキングサタンは悪魔のような体で急上昇し、自らの下半身ユニットを爆発させた。

「?!」

凄まじい轟音と共に光が街に満ちる。

メカキングサタンの下半身ユニットは完全に大爆発を起こし、黒い爆煙が巻きあがった。

「コンドル！ホエール！ライガー！ドラゴン！リンクス！！くっ……！自らの下半身ユニットを爆破させるとは……！」

ボルトマンモスのブリッジから戦闘の光景を見つめる火車長官。
しかし、爆破の光と煙は広い街に蔓延し、まともに見ることができない。

『はっはっはっはっはっはっ！！』

最終話 第六部（前書き）

第六部 黄金の正義

最終話 第六部

立ち上る黒煙を前に高らかに笑うメカキングサタン。

『……！？』

しかし、その黒煙の中に…何かが光り輝いた。

「電獣剣！」

コンドルの叫びが黒煙の中で響く。

その時、大地に突き刺さった電獣剣が黒煙の中へと加速した。

『なんだと…?!あの爆発の中で…なぜだ!』

怒りの怒号が響く。

サタンイレイズは翼をはためかせ、黒い空から飛来した剣を握りしめ、振り上げた。

「竜帝大電獣の力は…伊達じゃない!!」

竜帝大電獣が電獣剣を振り上げると、その風は天まで届く勢いであった黒煙を吹き飛ばした。

「ボルトダガー!」

ボルトドラゴンが叫ぶと、竜帝大電獣はバーニアに装備された2つの刃であるボルトダガーを一つの剣に合体させた。

「これで終わりだ!メカキングサタン!!」

竜帝大電獣は自らの胸の前でボルトダガーの先端に電獣剣を連結さ

せ、5人の力が一つとなった最強の剣・竜帝電獣剣となった。

「竜帝電獣剣！」

『やらせるかあッ！』

メカキングサタンは自らの掌に握りしめた剣を天に翳すと刀身が黒い空から落下していく雷を吸い、ただただ黒い両刃の剣に変質した。

『ハイパーサタンサーベル！』

メカキングサタンは剣を振り上げて一気に空を飛ぶ。

「でえいッ！」

自らが誇る最強の剣によって罅迫り合いをする竜帝大電獣とメカキングサタン。

互いに突撃する正義と悪。

『ぐっ…はッはッはッ！！我は負けぬ！負けぬ！負けぬ！』

メカキングサタンの剣が竜帝大電獣の剣を圧倒する。

「みんな！全力だあああああああッ！」

コンドルの叫びが機体の中で響く。

電獣戦隊の五人はモニター越しに見つめ合い、口元だけで笑った。

「天敬愛人斬り！」

五人の叫びが一つとなり、メカキングサタンと罅迫り合いをする竜帝大電獣は大気中のエネルギーを収束させ、自らに取り込んだ。

「これで終わりだ！メカキングサタン！！！！」

コンドルが叫ぶと、竜帝大電獣に取り込まれた莫大なエネルギーは装甲の表面を包み、黄金色に光り輝いた。

『ぬぐううううッ?!』

罅迫り合いで圧されていくメカキングサタン。

「でいやあああッ！」

一気に加速する竜帝大電獣、その剣はメカキングサタンの剣を切断した。

「我が負けるというのか?!」

真っ二つに斬り裂かれたメカキングサタン。

『くっ！世界は…終わる！』

メカキングサタンの体は、斬撃の衝撃によって光と化した。
そして謎の言葉を残して、消失した。

最終話 第六部（後書き）

そして…ついに。

最終話 第七部（前書き）

第7部 君達も、電獣戦隊だ！

最終話 第七部

「みんな、見てみるよ…朝日が眩しいぜ」

瓦礫の街を越えて低空飛行をするスカイコンドルのコクピットの中で、空也は呟いた。

戦いを終えて、空に立ちこめていた雲は消失しており、彼の言うとおりに眩しい朝日が登っていた。

「綺麗ね…」

スカイコンドルの頭上を飛ぶスペースドラゴンのコクピット内で、薊は微笑んだ。

「太陽がなかったら…地球はたちまち凍りつく……」

瓦礫の街中をホバー走行をするボルホエールのコクピット内で西川海は瞳を瞑った。

「やっと今…その意味が分かったぜ……」

「あああ…早く報告書を書かなきゃな！」

はつらつとした声で叫ぶ陸。

ガイアライガーは大地を疾駆する、彼らが手に入れた平和な大地を。

「手伝うつスよ！先輩！」

同じくガイアライガーのコクピットの中で、勇は微笑みながら腕を振り上げた。

「みんなよくやってくれた、これで電獣戦隊の最大の目的が果たせ

た あの太陽も君達を祝福してくれているだろう」

瓦礫の街の上空を飛ぶボルトマンモスのブリッジの中で、火車長官はゆったりとシートにもたれかかった。

「…俺達は誓いを守った…いや」

人の命と心を守る、電獣戦隊の戦いは今終わりを告げた。

「守り続ける」

そしてそれは、瓦礫の街を復興させるという新たな戦いへの始まりでもあった。

「俺達は」

激しい戦闘を終えた電獣達が、太陽を背にして輝く。

さあ、君達も彼らの後を追い、人の心と命を守ろう。

簡単なことである、愛と勇気さえあれば…

完。

エピソード（前書き）

戦いが終わった…だが

エピソード

人工島…東京都二十四区…。

小さなビル群が立ち並ぶなんの変哲そこには、近年に頻発した戦争やテロ、災害・イレイズの作戦によって住む場所や家族を失った日本人や、が住んでいた。

「…終わっただみたいだな…」

その広く広大な人工島は東京の近海に位置しており、メカキングサタンの爆発した閃光ははっきりと見えていた。

「サタン・イレイズが死んだ… か」

その人工島の中央に建てられている中学校の屋上。
の更に上の貯水タンクに立つ、白衣に身を包んだ二十代中盤とおぼしき女性が、眼鏡越しの細めの瞳を見開いて呟く。

「…悪魔去りし後、更なる存在が現れる」

予言めいな言葉を呟きいた女性は白衣のポケットに手を入れて、空を見た。

「来るぞ…終末を呼ぶ敵　パレートが」

太陽が登っていき、雲がゆつくりと流れていく青い空に、小さなヒビが入る。それは肉眼ではほぼ確認できない、小さな小さなヒビであつた。そのヒビの隙間からは、ドロドロと湾曲した空間が渦を巻いている。

「…ドクター・ソス…おまえの超人計画は私が引き継ぎ　完遂する」

女性は中盤タンクから屋上まで跳び、そのまま薄暗い校内へと歩き始めた。

「ただし　本来の目的、超人による地球の支配ではなく……地球を守る地球人の自衛の力として　！」

女性は何かを感じ、校舎から退場すると、

校門の前に停めておいたとおぼしき巨大なバイクに跨った。

「いよいよなのか……？」

蒼いバイクは機械音を発し、エンジンを自ら起動させる。

女性はそのままバイクを加速させ、一気に学校を後にする。

「ああ、あの時と一緒にだ！ 早くしないと犠牲者が出るぞ！！」

女性の顔に、怒りの表現が浮かぶ。

空が、大地が、海が割れる。

地球に終末が迫る時。

新たなる、戦いが始まる！

【次回作予告！】

「うわあああああッ！」

青年の絶叫が響く！

空が、大地が、地球が裂ける！

人々の暮らしを、侵略者が奪う！

「戦え！ 不堂断児！」

迫り来る終末！

パレートの侵略の魔の手！

「俺は戦う！ エクステデター！」

炎の中から蘇る命！その命は戦う！

君も目撃せよ！時を越えた戦士達を！

【 最新作 熾烈戦隊リベンジャー 】

涙を拭け！今の自分に勝つために！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6629a/>

電獣戦隊ボルトマン

2010年10月9日04時52分発行